

日本質的心理学会第8回大会開催にあたって

日本質的心理学会会員の皆様には、ご清祥にてご活躍のことと拝察申し上げます。
第8回大会は、広島を中心に、中国・四国・九州地区の会員の協力を得て、準備を進めてまいりましたが、皆様に「第8回大会プログラム抄録集」をお届けする運びになりました。

第8回大会は、大会テーマを「文化とプロフェッションの生成と継承」とし、人生や専門的世界における経験を「語り、継承していくこと」について、討論し認識を深めたいと考えています。このテーマに関して、会員の皆様から、多くの魅力的なシンポジウムの企画をお寄せいただきました。また、本年3月11日の東日本大震災に関わるテーマについても、2つのシンポジウムが提案されました。これも「経験の語りの理解・援助・継承」につながる重要な問題であると思います。

大会記念講演は、今日、文化・社会・教育の分野における代表的な論客の一人でおられる神戸女学院大学 名誉教授 内田 樹先生にお願いし、ご快諾いただきました。内田樹先生の大会記念講演と大会委員長による大会企画講演は、本大会のテーマに沿った「継承」についての内容で行われます。

第8回大会では、これらの企画を中心に、多彩なプログラムを組みました。ポスター発表については、昨年に引き続き、自身の研究を伝えるアピール力と表現力の発展を期して「優秀ポスター賞」を設けました。日本質的心理学会が発足した当初から受け継がれている質的心理学研究に対する熱い関心と探究心を、本大会においてさらに具体化、深化させることができれば幸甚でございます。

11月は、広島はもっとも過ごしやすい時期で海の幸、山の幸もおいしい季節です。本大会を機に、たくさんの素敵な出会いが生まれますことを願っております。

2011年10月

日本質的心理学会 第8回大会委員長
岡本祐子（広島大学）

表紙デザインは、木下寛子さん(九州大学大学院)によるものです。

日本質的心理学会第8回大会（広島大会）の概要

□大会テーマ：「文化とプロフェッションの生成と継承」

□大会日程・開催場所・主催等

期間 2011 年 11 月 26 日（土）、27 日（日）（25 日（金）にはプレ企画 2）
場所 安田女子大学 広島市安佐南区安東 6 丁目 13-1
主催 日本質的心理学会、日本質的心理学会第 8 回大会準備委員会
共催 広島大学大学院教育学研究科心理学講座、安田女子大学

□大会会場

プレ企画 2（発表者の申込は締め切りました。参加者の申込の締切は 11 月 24 日です）
日時 11 月 25 日（金）12:30～17:00
会場 安田学園セミナーハウス 研修室 広島市東区牛田新町 1 丁目 6-12
（大会会場である安田女子大学とは場所が異なります。会場図でご確認ください）

本大会

場所：安田女子大学 9 号館・まほろば館（キャンパス配置図をご覧ください）

□受付

場所：9 号館 1 階アトリウム エスカレーター前
時間：11 月 26 日（土） 9:00～17:15
11 月 27 日（日） 8:30～16:30

学会の入会申込手続き、その他学会や大会に関するご質問・ご案内を承ります。
大会期間中、会場内では、受付でお渡しする参加証（名札）をお付けください。
当日参加の方は、下記の参加費を申し受けます。

大会参加費

当日参加	会員一般	¥6,000	会員学生	¥3,000
	非会員一般	¥6,500	非会員学生	¥4,000

なお、学生の方は学生証の提示をお願いします。聴講生・研究生は学生に含みます。

大会期間中のお知らせや変更などは、受付の大会掲示板にてお知らせします。適宜、ご確認ください。

□大会本部・学会事務局

大会本部・学会事務局は 9102 教室に設置しています。ご用の方は、受付にてご相談ください。

□クローク

大会期間中、9号館1階9102教室にクロークを設けています（無料）。
荷物をお預かりいたしますので、ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。
なお、貴重品はご自身で携帯していただくようお願いいたします。

利用時間

本大会1日目 9:00～17:45

本大会2日目 8:30～17:00

□大会記念講演の概要

大会記念講演と大会企画講演があります。

大会記念講演（一般公開）

日時：11月27日（日） 大会2日目 13:00～14:30

場所：まほろば館3Fホール（大会配置図をご確認ください）

演題：現代日本の霊性と鎮魂ー受け継がれてきた癒しの心ー

演者：内田 樹 先生（神戸女学院大学名誉教授）

大会企画講演（参加者のみ）

日時：11月26日（土） 大会1日目 13:15～15:15

場所：9号館1F 9154教室

演題：師弟関係を通じた Profession の生成と継承ー世代継承性のマクロとミクロな視点ー

演者：岡本 祐子（広島大学、大会委員長）

□シンポジウムの概要

シンポジウムは、大会準備委員会企画、日本質的心理学会委員会企画、会員企画があります。それぞれのテーマ、時間、教室は、大会プログラムにてご確認ください。

シンポジウムの各部屋には、マイク、スクリーン、プロジェクター、DVD プレイヤー、PC 入力端子、OHC が設置されています。なお、パソコンを利用される場合は、各企画者が持参してください。
教室機器の操作方法等、何か不明な点がございましたら、近くに係員にお尋ねください。

□シンポジウム打ち合わせ室

シンポジウムの事前打ち合わせなどは、9号館アトリウムに設置する机をご利用いただくか、9151 教室をご利用ください。9151 教室では、各シンポジウム会場と同様の教室機器が試用できます。

□個人発表（ポスター）の概要

個人発表は、大会1日目10:00～12:30に、9号館1階アトリウム西側にて行います。
発表者は、開始時間にポスターを掲示して、ポスターの前で応対してください。責任在席時間は、発表番号が奇数は10:00～11:15、偶数は11:15～12:30となっております。できるだけ多くの方と対話が実ることを期待しています。

特に今大会では、質的心理学研究第12号特集テーマ『「個性」の質的研究』に関連する個人発表を区

大会の概要

分けて、特集テーマに関する議論ができるスペースを設けております。

なお、掲示されたポスターは、大会の2日間掲示し、責任在席時間外でも発表者との議論や発表者抜きでの議論が展開できるようにします。ポスターの撤去は、2日目16:45～17:00の間に各自で撤去してください。もし、その時間に発表者の都合がつかない場合や17:00を過ぎて掲示されている場合は、大会本部が責任をもって撤去・処分します。ご了承ください。

ポスター賞の概要

本大会でも優秀ポスター賞を設けます。

優秀ポスター賞は当学会理事による投票によって選びます。特に、ポスターの表現力、アピール力に注目して審査をします。発表の中身が何より大事ですが、ポスターの表現力・アピール力にも磨きをかけた発表になることを期待しています。

1日目15:00には、受付の大会掲示板にて優秀ポスター賞受賞者を発表し、夕方の懇親会にて表彰を行います。

□プレ企画2および講習会の当日参加

プレ企画2は、発表者の申込は締め切りました。参加者の申込の締切は11月24日です。この日までにお申込みください。

講習会の予約参加申込は締め切りました。

□休憩スペース

9号館1階アトリウムを休憩スペースとします。お茶などを準備しますので、セルフサービスでご利用ください。

休憩スペースには、参加者が利用できるコミュニケーション・ボード（掲示板）を設置します。参加者相互のコミュニケーションの道具としてご利用ください。

また、好天に恵まれれば、9号館の屋上庭園や建物外のスペースもご利用ください。

□懇親会

大会1日目17:45～19:15に、安田女子大学9号館2階 9215室にて行います。

当日参加の方は下記の参加費を申し受けます。大会会場と同じ建物ですので、多くのご参加をお待ちしております。

懇親会参加費（会員・非会員の区別はありません）

当日参加	一般	¥4,500	学生	¥3,500
------	----	--------	----	--------

□展示・販売

9号館1階アトリウムにて、書籍の展示・販売を行います。参加する出版社は、北大路書房さま、新曜社さま、ナカニシヤ出版さまになります。ぜひお立ち寄りください。

□昼食

学内構内の食堂は大会両日ともに休業、2日目はコンビニエンスストアも休業となります。

大学近隣にも、コンビニエンスストア（会場より徒歩約 7 分）および飲食店がございます。こちらをご利用できます。加えて以下の通り、お弁当の事前予約（1 日目）、総会に出席される会員へのお弁当の準備（2 日目）のご案内をいたします。あわせてご検討ください。

1 日目（26 日分）お弁当事前予約のご案内

26 日に限り、弁当（600 円、お茶付き）を事前にご予約いただくことができます。事前予約をされる方は、11 月 24 日（木）の 17 時までに、下記までお申し込みください（電話、FAX、e-mail のいずれでも可）。ご予約いただいた弁当は、26 日 11 時～13 時に受付付近のブースでお渡しいたします。代金はお受け取りの際にお支払ください。

＜26 日お弁当の事前予約申し込み先＞

広島駅弁当株式会社（担当：龍地 隆）

電話：082-286-0181 FAX：082-285-2272 e-mail：ryuchi@ekibento.co.jp

＊ 電話、FAX、e-mail のいずれかでお申し込みください。申し込みの際には、「氏名、11 月 26 日質的心理学会参加者、安田女子大学主催」を明記してください。

2 日目（27 日）総会に出席される会員へのお弁当の準備（無料）

大会 2 日目の 27 日（日）は、11:45～12:35 の総会（9154 教室）にて、会員の方々に無料にてお弁当を準備しております。ぜひ総会にご出席ください。

□ピアノ演奏

大会 1 日目の 12:30 より、9 号館アトリウムにて安田女子大学音楽教員によるピアノ演奏があります。昼食をとりながらお楽しみください。

□学内禁煙

安田女子大学構内はすべて禁煙となっております。禁煙にご協力ください。

□コピー機の利用

学内のコピー機を使用する場合には、専用カードが必要です。1 枚モノクロ 10 円、カラー 40 円にて受け付けますので、受付に申しつけください。

□学内インターネットの利用

大会期間中、大会参加者用に無線 LAN 接続のパスワードを発行します。受付の大会掲示板にてパスワードや利用方法を示しますので、確認してご利用ください。

□会場までのアクセス

会場の安田女子大学は、広島市内の安佐南区に位置しています。ＪＲ広島駅からは、ＪＲ可部線、アストラムラインと乗り継いだ「安東駅」より徒歩４分です。

<ＪＲ利用の場合>

ＪＲ広島駅でＪＲ可部線に乗り換え、「大町駅」で下車（約 15 分、運賃 200 円）→アストラムライン長楽寺・広域公園前方面に乗り換え、「安東駅」で下車（約 4 分、運賃 220 円）→徒歩（約 4 分）

<ＪＲ広島駅から市内中心部経由で来場する場合>

ＪＲ広島駅で路面電車（５番以外）に乗り換え、電停「紙屋町」または「本通り」で下車（約 15 分、運賃 150 円）→徒歩にてアストラムライン「本通駅」へ→「本通駅」からアストラムライン長楽寺・広域公園前方面に乗り換え、「安東駅」で下車（約 20 分、運賃 350 円）→徒歩（約 4 分）

<飛行機利用の場合>

広島空港から「中筋経由広島バスセンター行き」のリムジンバスに乗り（約 40 分）→高速バス停「中筋駅」で下車→アストラムライン長楽寺・広域公園前方面に乗り換え、「安東駅」で下車（約 7 分）→徒歩（約 4 分）

<高速バス利用の場合>

高速バス停「中筋駅」で下車→アストラムライン長楽寺・広域公園前方面に乗り換え、「安東駅」で下車（約 7 分、運賃 220 円）→徒歩（約 4 分）

<フェリー利用の場合>

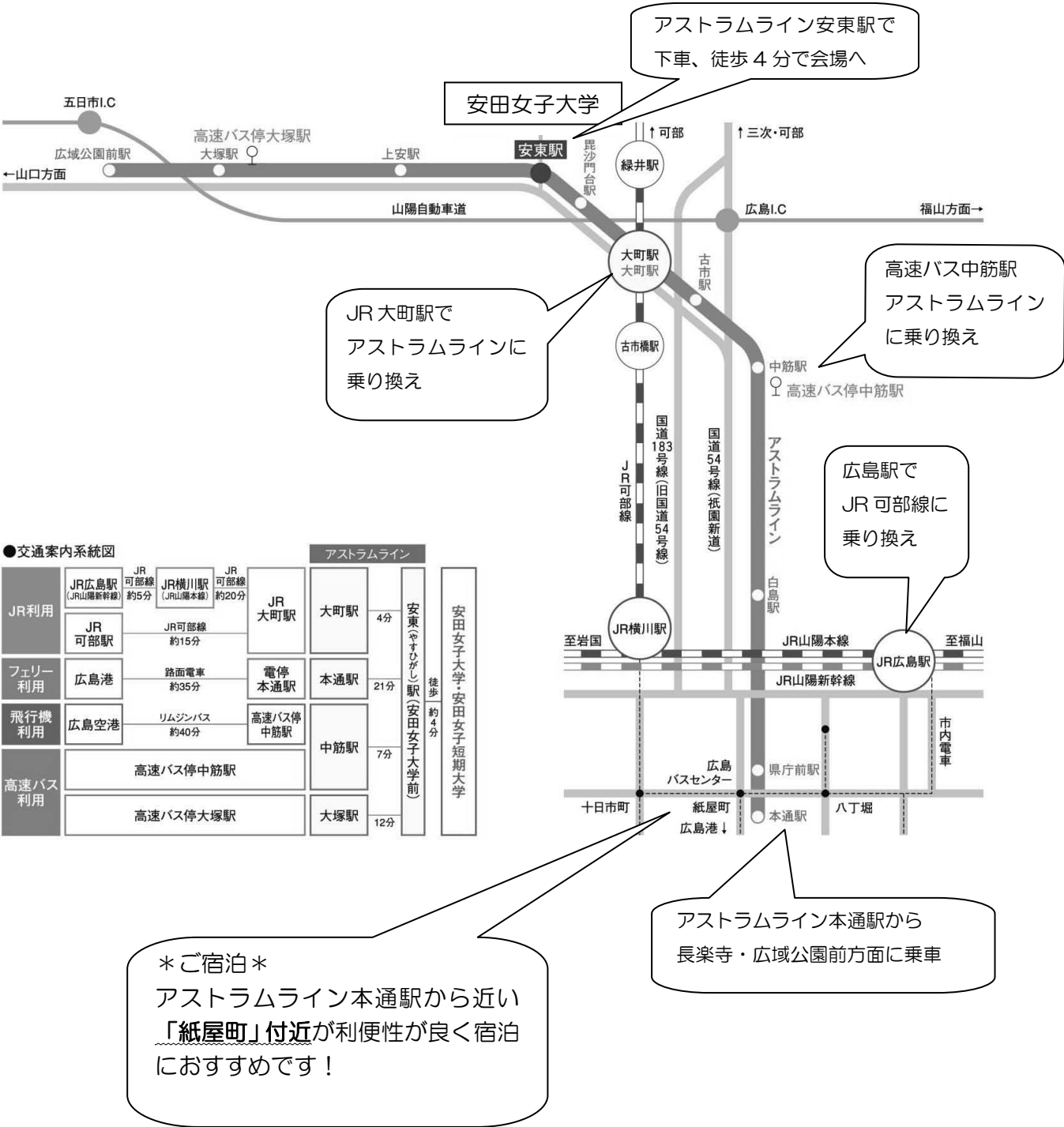
広島港から路面電車（５番以外）に乗り換え、電停「本通り」で下車（約 35 分）→徒歩にてアストラムライン「本通駅」へ→「本通駅」からアストラムライン長楽寺・広域公園前方面に乗り換え、「安東駅」で下車（約 4 分、運賃 220 円）→徒歩（約 4 分）

※アストラムライン「安東駅」から会場まで

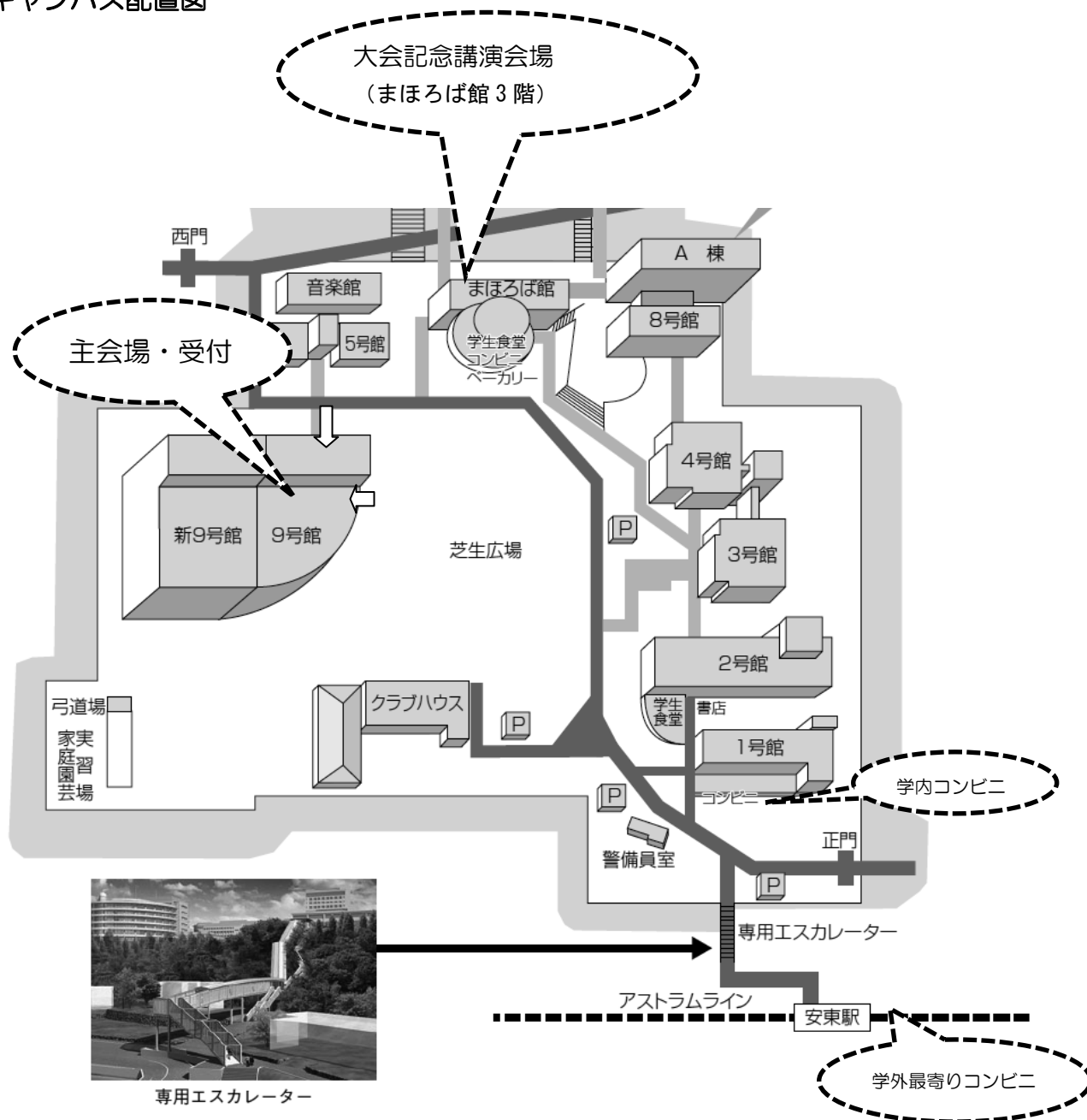
「安東駅」改札を出て進行方向に向かって右側の、北出口（安田女子大学方面）から歩道に出る。「安東駅（西）」交差点を、「安田女子大学・安田女子短期大学」の紫色の看板がある方（西）へ渡る。竹林に沿って右に折れ、エスカレーターへ進む。所要時間約 4 分。

- ◆広島市内の交通機関（アストラムライン、路線バス、路面電車）では、広島県交通系 IC カード乗車券・PASPY の他に、JR 西日本の IC カード乗車券・ICOCA がご利用いただけます。その他の地域の IC カード乗車券につきましては、ご利用いただけませんのでご理解ください。

ロアクセスマップ



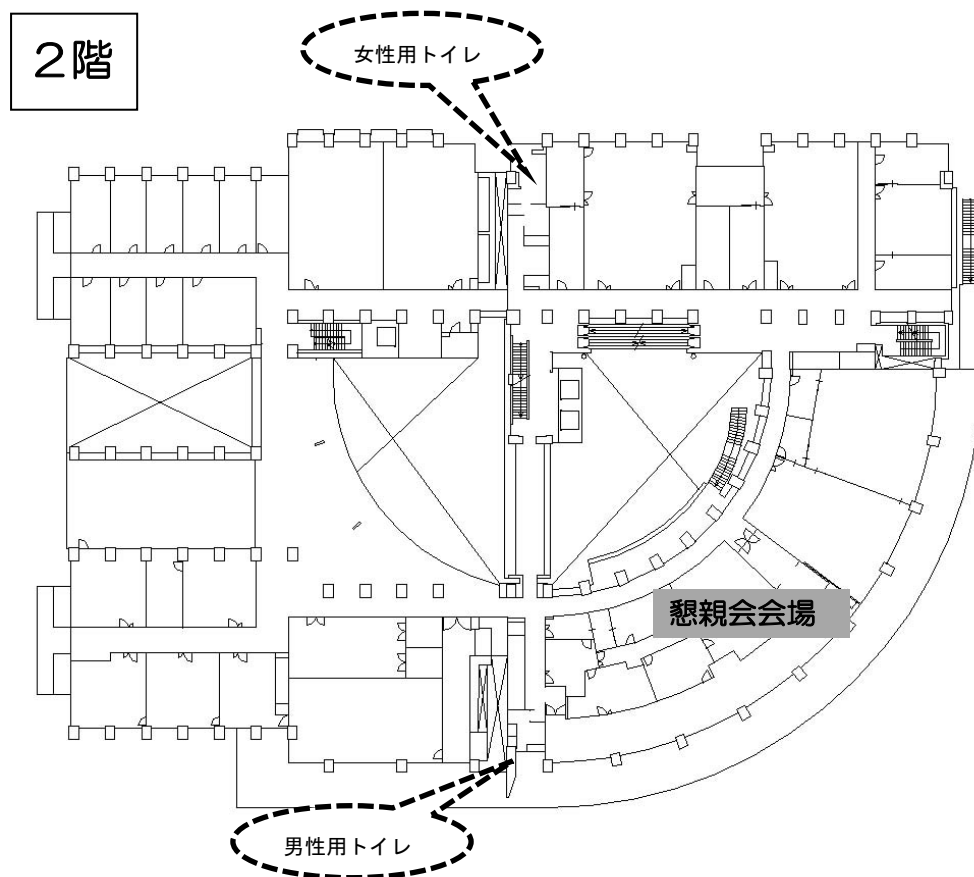
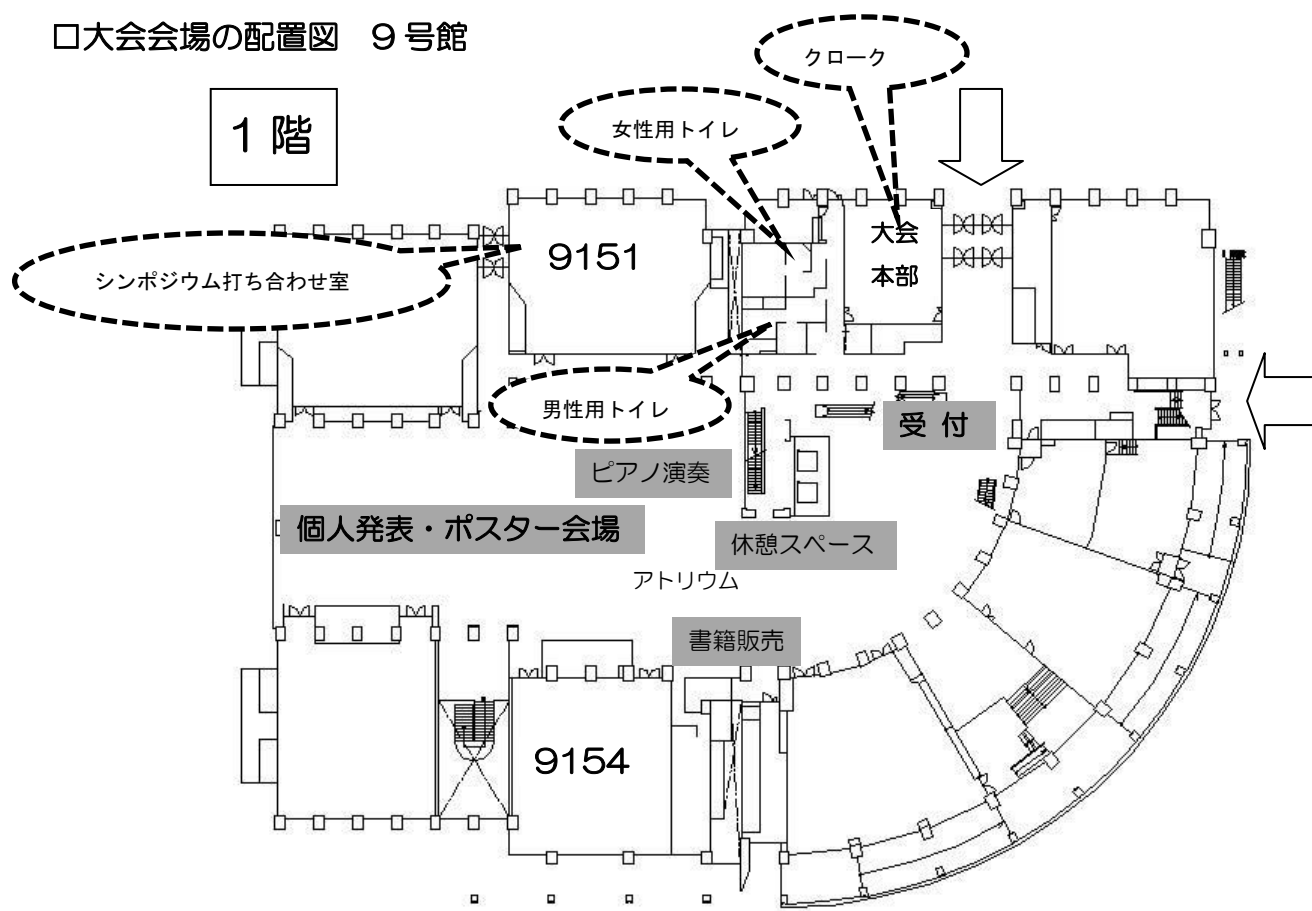
□キャンパス配置図

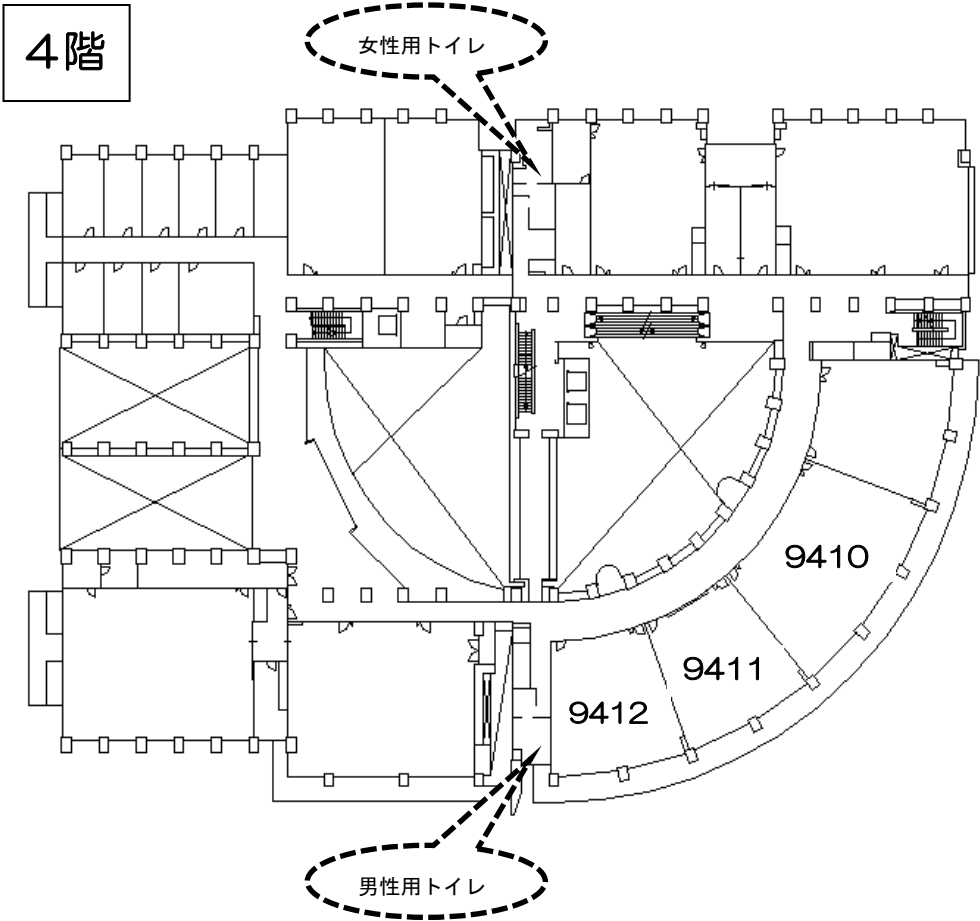
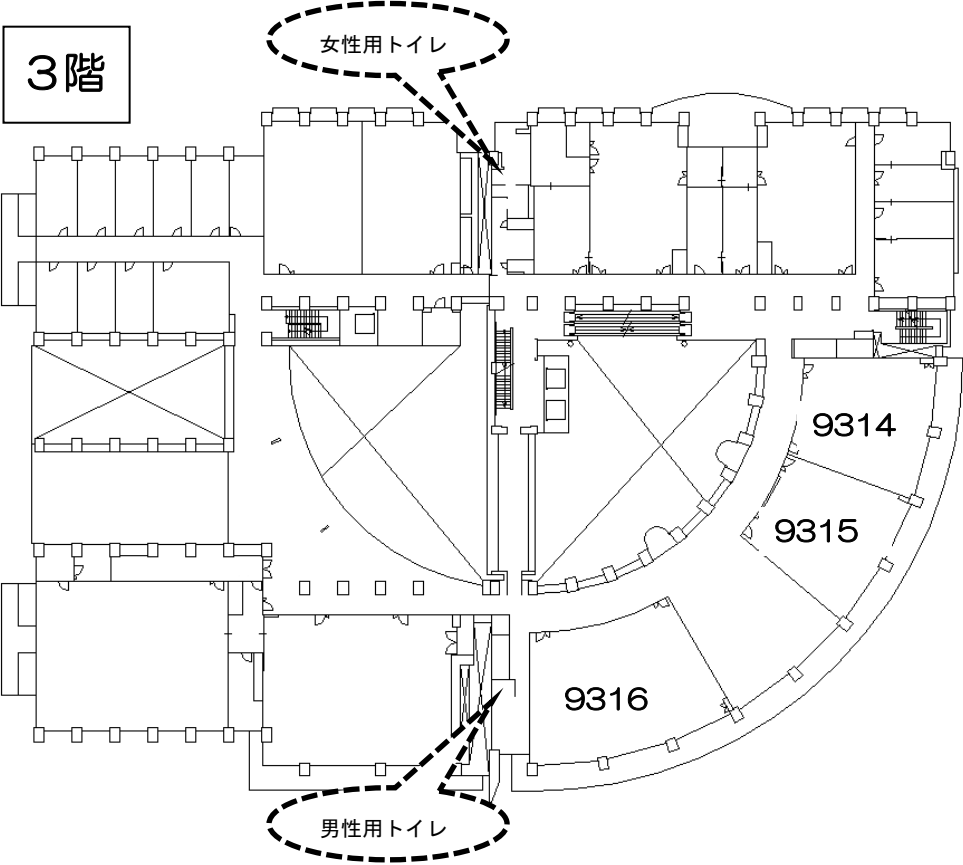


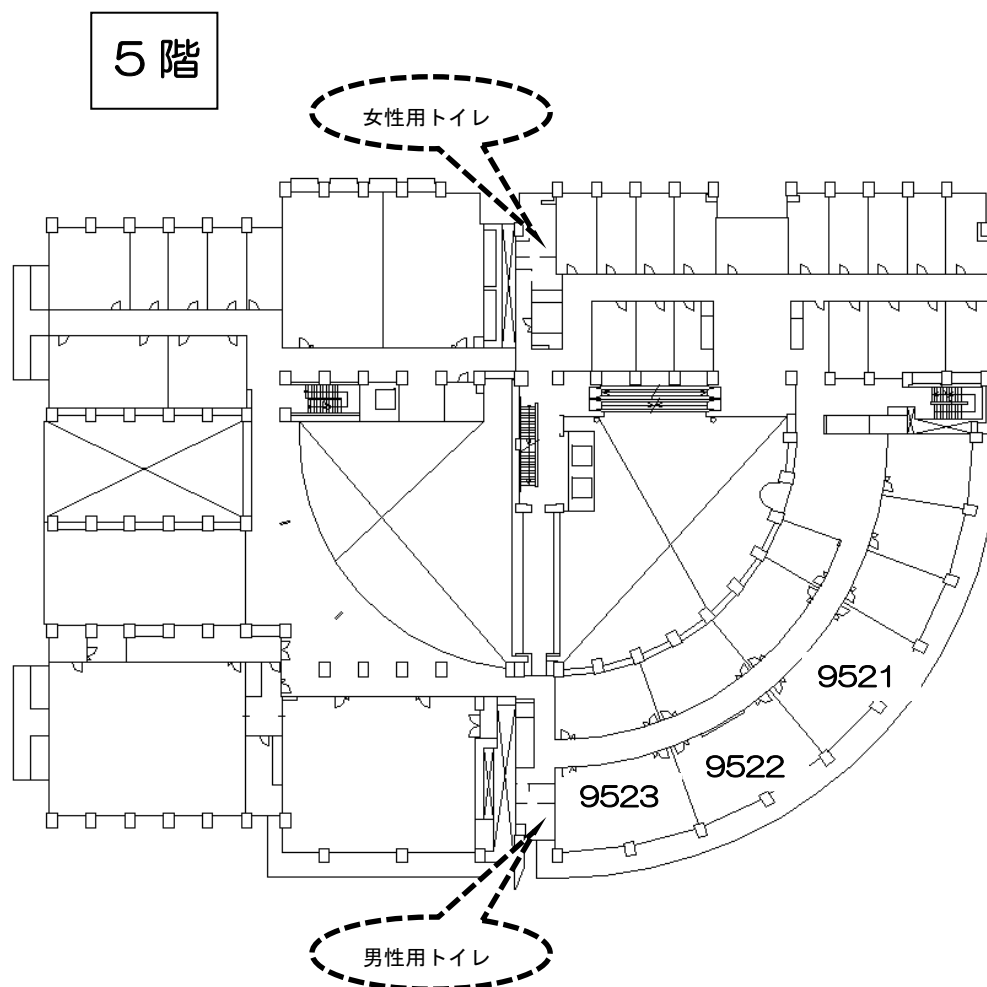
◎屋食について◎

大会初日の26日(土)は学内のコンビニエンスストアが営業しております。また、大学近隣にはコンビニエンスストア(会場より徒歩約7分)もございますので、そちらもご利用ください。大学食堂は大会両日とも休業となります。また、27日(日)12時からの総会では、会員の方々にお弁当を無料でご準備させていただいております。ぜひ総会にご出席ください。なお27日(日)は学内のコンビニエンスストアが営業していませんので、ご注意ください。

□大会会場の配置図 9号館







◎屋上庭園のご案内◎

- ・ 7階からは屋上庭園に行くことができます。屋上からは周辺の景色が一望できます。天候が良ければぜひ足をお運びください。ベンチも設置されておりますのでご昼食、打ち合わせなどにも、ご利用いただけます。

◎お願い◎

- ・ 本学構内は全面禁煙となっております。喫煙所はございませんので、ご協力をお願いいたします。

□安田学園セミナーハウス

広島市東区牛田新町 1 丁目 6-12

ブレ企画 2「みんなで研究検討会—話そう、味わおう、突き抜けよう—」 会場

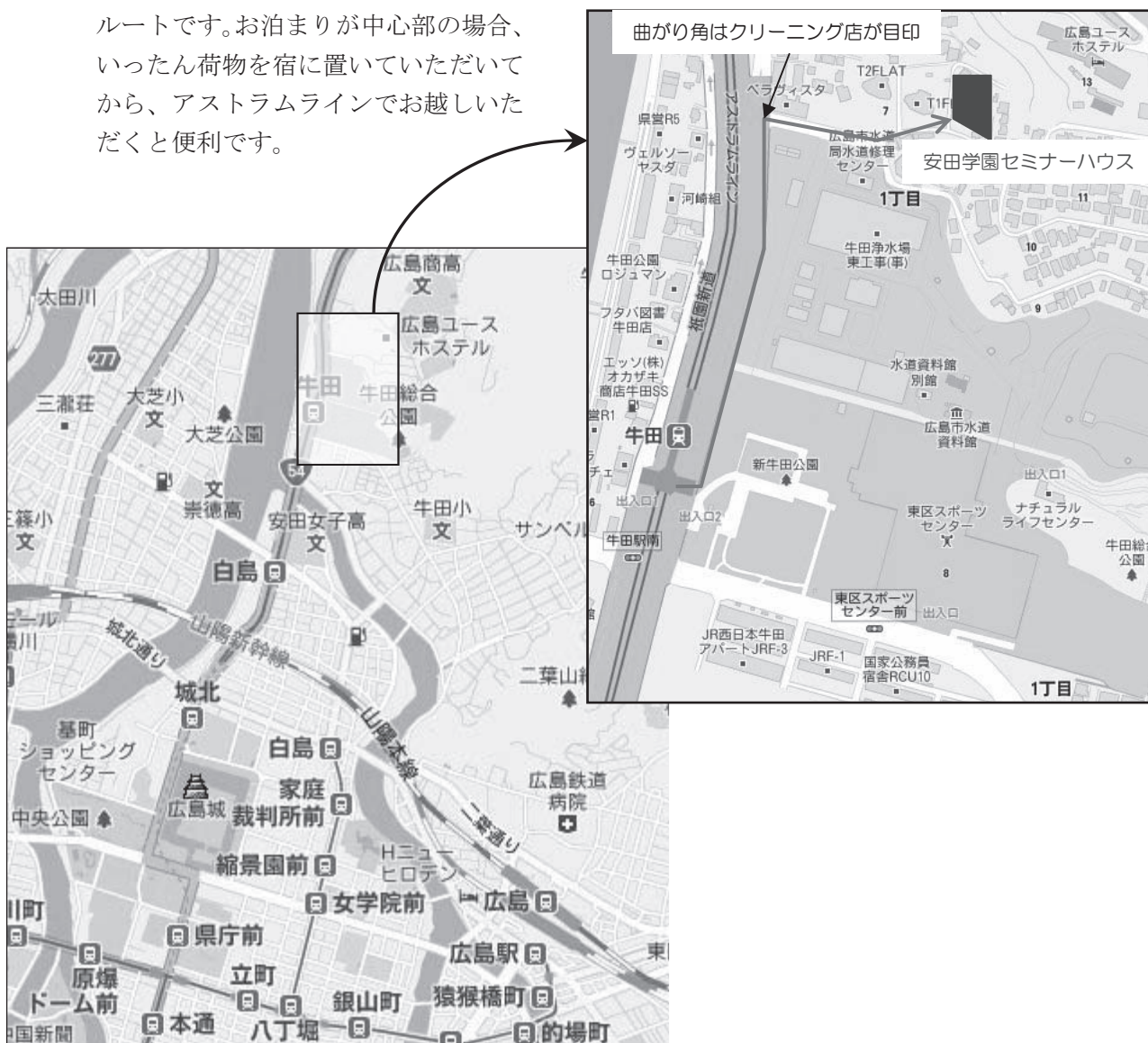
【アクセス：広島駅より】

- ・ 広島駅新幹線口からタクシーでアストラムライン牛田駅へ（所要時間 10 分）。徒歩 7 分。

← このセミナーハウスは改装後間もないので、タクシーの運転手さんに告げていただいても通じないかもしれません。「アストラムライン牛田駅」と告げていただくと通じます。GPS 機能をもったタクシーに住所を告げてもらおうとセミナーハウス付近に着きますが、途中が一方通行のため、大回りとなります。

- ・ または、広島駅南口から市内電車で紙屋町電停へ（所要時間 10 分）。地下に降りていただいて、アストラムライン「本通駅」または「県庁前駅」から「牛田駅」へ（所要時間 5 分）。「牛田駅」から徒歩 7 分。

← 一度、広島市内中心部に出ていただくルートです。お泊まりが中心部の場合、いったん荷物を宿に置いていただいてから、アストラムラインでお越しいただくと便利です。



プログラム

11月25日（金）

ブレ企画2 みんなで研究検討会：話そう、味わおう、突き抜けよう！ 安田学園セミナーハウス 研修室								
---	--	--	--	--	--	--	--	--

11月26日（土）

時間	9号館 1階アトリウム			9154 教室	9410 教室	9411 教室	9412 教室	9314 教室	9315 教室	9316 教室
9:00	受付	書籍販売	個人発表 (ポスター)							
10:00										
11:00										
12:00										
13:00										
14:00	12時半以降、 ポスター 掲示のみ	大会企画講演 師弟関係を 通じた Profession の 生成と継承 講演者： 岡本祐子	大会企画1 「育てる」営 みの生成と 継承 企画： 永田彰子 渡邉照美							
15:00										
16:00				シンポジウム(Ⅱ) 15：30～17：30						
17:00				会員企画4 個人の経験を 丁寧に記述す るために 企画： 廣瀬眞理子	会員企画3 農と食と 心理学 企画： 石井宏典	大会企画2 文化の 生成と変容の 最前線 企画： 大会準備 委員会				委員会企画2 語りにおける ポジショナリ ティと傷つき を語る／聴く ための時間 企画： 研究交流委員 会
18:00	9215教室 懇親会(17：45～19：15)									
19:00										

プログラム

11月27日(日)

<午前>

時間	9号館 1階アトリウム			9521 教室	9522 教室	9523 教室	9410 教室	9316 教室	9412 教室	9411 教室
9:00	受付 (8:30~16:30)	書籍販売	個人発表 (ポスター) 掲示のみ	講習会 9:30~11:00			シンポジウム(Ⅲ) 9:30~11:30			
10:00				講習会1 ステップ 質的研究法 TAE入門 講師: 得丸 さと子	講習会2 TEM入門 (2) 講師: サトウ タツヤ	講習会3 カテゴリー化 を読み解く試 みから 講師: 好井裕明	大会企画3 不在の コミュニ ケーション 企画: 南博文	委員会企画3 質的心理学の 東日本 大震災 企画: 『質的心理学 フォーラム』 編集委員会・ 日本質的心理 学会東日本 大震災WG	会員企画5 保育実践の アクチュアリ ティと 質的心理学 企画: 本山方子 東村知子 堀越紀香	会員企画6 模倣と創発 としての 学習 企画: 岡花祈一郎 田島充士
11:00										
12:00				9154教室 総会 11:45~12:35						

<午後>

時間	9号館 1階アトリウム			9316 教室	9315 教室	9314 教室	9411 教室	9412 教室		まほろば館 3階
13:00	受付 (8:30~16:30)	書籍販売	個人発表 (ポスター) 掲示のみ							13:00~ 14:30 大会記念講演 現代日本の 霊性と鎮魂 講演: 内田 樹
14:00				シンポジウム(Ⅳ) 14:45~16:45						
15:00				大会企画4 現代 メディアの 創造性 企画: 小嶋由香	大会企画5 子ども理解の メソッドロジ ーとしての 質的研究 企画: 大会準備 委員会	委員会企画4 「個性」の 質的研究 企画: 渡邊芳之 森 直久	会員企画7 社会に開く ナラティブ 企画: 森岡正芳	会員企画8 GCQHRを 通してみる、 日本の質的研 究のこれから 企画: 植田嘉好子 山本玲菜		
16:00										

プログラム

9月23日(金)

プレ企画1. インタビューの仕方とまとめ方の初歩（半構造化面接の場合）

企画・講師 榎田美雄（徳島大学）

11月25日(金)

プレ企画2. みんなで研究検討会：話そう、味わおう、突き抜けよう！

[安田学園セミナーハウス 研修室]

企画・講師 松本光太郎（茨城大学）

ゲスト 箕浦康子（お茶の水女子大学）

11月26日(土)

個人発表（ポスター） 10:00-12:30 (Pp.21-27をご覧ください) [9号館1階アトリウム]

大会企画講演 13:15-15:15

[9154教室]

師弟関係を通じた Profession の生成と継承

—Generativity(世代継承性)のマクロとミクロな視点—

講演 岡本祐子（広島大学大学院）

司会 やまだようこ（京都大学大学院）

シンポジウムⅠ 13:15-15:15

大会企画シンポジウム1

[9410教室]

「育てる」営みの生成と継承—保護者を育てる「子育て支援」とは何か—

企画 永田彰子（安田女子大学）

渡邊照美（くらしき作陽大学）

司会 渡邊照美（くらしき作陽大学）

話題提供 鯨岡 峻（中京大学）

西村真実子（石川県立看護大学）

菅野幸恵（青山学院女子短期大学）

指定討論 鯨岡 峻（中京大学）

委員会企画シンポジウム1

[9411教室]

実践としての身体

企画 『質的心理学フォーラム』編集委員会

司会 五十嵐靖博（山野美容芸術短期大学）

話題提供 河野哲也#（立教大学）

重村朋子（日本医科大学）

上淵 寿（東京学芸大学）

指定討論 サトウタツヤ（立命館大学）

砂上史子（千葉大学）

会員企画シンポジウム 1

[9 4 1 2 教室]

神経難病とともに生きる病者の在宅療養文化の記述と転用可能性

—病者の生を支える多層的支援システムの実現に向けて—

企画	日高友郎	(日本学術振興会特別研究員, 立命館大学大学院)
司会	滑田明暢	(立命館大学大学院)
話題提供	日高友郎	(日本学術振興会特別研究員, 立命館大学大学院)
	安達俊祐	(立命館大学大学院)
	中村純明	(日本 ALS 協会広島県支部)
	岡林清司	(コールメディカルクリニック広島)
	市川貴子	(日本 ALS 協会広島県支部/障害者生活ケア Links 広島)
指定討論	伊藤哲司	(茨城大学)

シンポジウムⅡ 15:30-17:30

大会企画シンポジウム 2

[9 3 1 4 教室]

文化の生成と変容の最前線

企画	大会準備委員会	
司会	田中共子	(岡山大学)
話題提供	奥西有理	(大阪大学)
	細川京子	(川崎医療福祉大学)
	奥田尚甲	(広島大学)
指定討論	柴山真琴	(大妻女子大学)

委員会企画シンポジウム 2

[9 3 1 5 教室]

語りにおけるポジショナリティと傷つきを語る/聴くための時間

—質的心理学における「語り」研究の地平(2)—

企画	日本質的心理学会研究交流委員会	
共催	日本質的心理学会震災WG	
司会	徳田治子	(高千穂大学)
話題提供	宮地尚子	(一橋大学大学院)
	一丸藤太郎	(広島国際大学)
指定討論	野坂祐子	(大阪教育大学)
	小嶋由香	(安田女子大学)

会員企画シンポジウム 2

[9 3 1 6 教室]

「Evidence から“当事者としての家族”支援を考える」

企画	河原智江	(横浜市立大学大学院)
	西村ユミ	(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
司会	西村ユミ	(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
話題提供	河原智江	(横浜市立大学大学院)
	池田真理	(東京大学大学院)
	南山浩二 #	(静岡大学大学院)
指定討論	西村ユミ	(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

会員企画シンポジウム3

[9 4 1 1 教室]

農と食と心理学

企画・司会	石井宏典	(茨城大学)
話題提供	木下寛子	(九州大学)
	菅野幸恵	(青山学院女子短期大学)
	石井宏典	(茨城大学)
指定討論	浜田寿美男	(奈良女子大学名誉教授)

会員企画シンポジウム4

[9 4 1 0 教室]

個人の経験を丁寧に記述するためにキーワードでとらえる TEM の実際

企画	廣瀬眞理子	(関西学院大学大学院)
司会	安田裕子	(立命館大学)
話題提供	佐藤紀代子	(長崎純心大学)
	山田嘉徳	(関西大学大学院)
	廣瀬眞理子	(関西学院大学大学院)
指定討論	荒川歩	(武蔵野美術大学)

懇親会 17:45-19:15

[9 2 1 5 教室]

11 月 27 日(日)

講習会 9:30-11:00

講習会 1 ステップ式質的研究法 TAE 入門

[9 5 2 1 教室]

講師	得丸さと子	(日本女子体育大学)
----	-------	------------

講習会 2 TEM 入門(2): 質的研究をする姿勢を作ろう

[9 5 2 2 教室]

講師	サトウタツヤ	(立命館大学)
----	--------	---------

講習会 3 カテゴリー化を読み解く試みから: エスノメソドロジー入門2

[9 5 2 3 教室]

講師	好井裕明	(筑波大学)
----	------	--------

シンポジウムⅢ 9:30-11:30

大会企画シンポジウム3

[9 4 1 0 教室]

不在のコミュニケーションーその後

企画者	南 博文	(九州大学大学院)
司会	澤田英三	(安田女子大学)
話題提供	南 博文	(九州大学大学院)
	手塚 千鶴子	(慶応義塾大学)
	濱田裕子	(九州大学大学院)
指定討論	やまだようこ	(京都大学大学院)

委員会企画シンポジウム3

[9 3 1 6 教室]

質的心理学の東日本大震災—『質心フォーラム』緊急特集連動シンポジウム—

企画	『質的心理学フォーラム』編集委員会・日本質的心理学会東日本大震災 WG	
司会・指定討論	山田富秋	(松山大学、『質心フォーラム』編集委員)
	八ッ塚一郎	(熊本大学、『質心フォーラム』編集委員、震災WG委員)
話題提供	矢守克也	(京都大学、震災WG委員)
	金丸隆太	(茨城大学)
	白柿 綾	(特定医療法人和ホスピタル)
	伊藤哲司	(茨城大学、震災WG委員)
	引地達也#	(元共同通信記者)

会員企画シンポジウム5

[9 4 1 2 教室]

保育実践のアクチュアリティと質的心理学 — 保育プロフェッション研究の可能性と限界 —

企画	本山方子	(奈良女子大学)
	東村知子	(奈良文化女子短期大学)
	掘越紀香	(奈良教育大学)
司会	本山方子	(奈良女子大学)
話題提供	梅崎高行	(甲南女子大学)
	東村知子	(奈良文化女子短期大学)
	古賀松香	(四国学院大学)
	松本健義	(上越教育大学大学院)
指定討論	掘越紀香	(奈良教育大学)

会員企画シンポジウム6

[9 4 1 1 教室]

模倣と創発としての学習 —ヴィゴツキーおよびフレイレのまなざしより—

企画・司会	岡花祈一郎	(福岡女学院大学)
	田島充士	(高知工科大学)
話題提供	岡花祈一郎	(福岡女学院大学)
	田島充士	(高知工科大学)
	木村里美	(大阪府立富田林高校・大阪府立大学大学院)
指定討論	高木光太郎 #	(青山学院大学)

総 会

11:45-12:35

[9 1 5 4 教室]

大会記念講演 13:00-14:30

[まほろば館3階]

現代日本の霊性と鎮魂 ―受け継がれてきた癒しの心―

講演 内田 樹 (神戸女学院大学 名誉教授)
司会 岡本祐子 (広島大学大学院)

シンポジウムⅣ 14:45-16:45

大会企画シンポジウム4

[9316教室]

現代メディアの創造性

企画・司会 小嶋由香 (安田女子大学)
話題提供 西原明史 (安田女子大学)
佐々木玲仁 (九州大学)
家島明彦 (島根大学)
指定討論 内田 樹 (神戸女学院大学 名誉教授)

大会企画シンポジウム5

[9315教室]

子ども理解のメソドロジーとしての質的研究 ―実践者の研究方法としての可能性を探る―

企画・司会 中坪史典 (広島大学大学院)
話題提供 柴山真琴 (大妻女子大学)
得丸さと子 (日本女子体育大学)
指定討論 サトウタツヤ (立命館大学)
松本信吾 (広島大学附属幼稚園)

委員会企画シンポジウム4

[9314教室]

「個性」の質的研究―個をとらえる、個をくらべる、個とかわる―

企画 渡邊芳之 (帯広畜産大学)
森 直久 (札幌学院大学)
司会 渡邊芳之 (帯広畜産大学)
話題提供 矢守克也 (京都大学)
大橋靖史 (淑徳大学)
指定討論 森 直久 (札幌学院大学)

会員企画シンポジウム7

[9411教室]

社会に関くナラティブ―戦争と原爆の体験を聞く・語り継ぐ

企画・司会 森岡正芳 (神戸大学大学院)
話題提供 松尾純子 (調布市教育相談所)
森 茂起 (甲南大学)
門池啓史 (東海大学・日本大学)
指定討論 児島達美 (長崎純心大学)
山口智子 (日本福祉大学)

会員企画シンポジウム 8

[9 4 1 2 教室]

GCQHRを通してみる、日本の質的研究のこれから

(1st GLOBAL CONGRESS for QUALITATIVE HEALTH RESEARCH)

企画	植田嘉好子	(川崎医療福祉大学)
	山本玲菜	(川崎医療福祉大学)
司会	植田嘉好子	(川崎医療福祉大学)
話題提供	吉田尚史	(東邦大学)
	福田茉莉	(岡山大学)
	山本玲菜	(川崎医療福祉大学)
指定討論	やまだようこ	(京都大学大学院)

個人発表（ポスター） 11月26日（土）10:00-12:30 [9号館1階アトリウム]

在席責任時間：発表番号が奇数は、10:00-11:15、偶数は、11:15-12:30

ポスターは、27日 17:00まで掲示します。

- | | | |
|---|--|-------------------------------------|
| 1. パルソナ法の実践試行：個性の再現と活用可能性について | 富士通研究所ソフトウェア
システム研究所 | 渡辺 理 |
| 2. インタビューからトランスビューへ：TEM の理念に基づく方法論の提案 | 立命館大学文学部
立命館大学立命衣笠総合研
究機構
長崎純心大学
武蔵野美術大学 | サトウタツヤ
安田裕子

佐藤紀代子
荒川 歩 |
| 3. PEN-A による高齢者への面接調査データの解析：写真とナラティブデータの対応分析の試み | 関西学院大学社会学部
京都光華女子大学人文学部
琉球大学法文学部 | 岡本卓也
石盛真徳
加藤潤三 |
| 4. 組織を理解しようとした時に見えた自己のありよう | 財団法人田附興風会医学研
究所北野病院 | 鈴木 泉 |
| 5. イメージマップからとらえた小児看護学実習前後の「子どもの看護」のイメージの変化 | 国際医療福祉大学保健医療
学部看護学科 | 世良喜子 |
| 6. 新人看護師の看護実践コミュニティへの参加過程で経験するコンフリクト：正統的周辺参加論の視点によるエスノグラフィーから | 国立循環器病研究センター | 奥野信行 |
| 7. 病棟看護師長として自信を回復した語り合い：ナラティブアプローチの実践にチャレンジしている2年目の私 | 財団法人田附興風会 医学
研究所北野病院 | 吉井輝子 |
| 8. ALS 患者による介護者に対する教育場面のエスノグラフィー研究 | 立命館大学大学院応用人間
科学研究科 | 安達俊祐 |
| 9. 中途障害者の家族プロセスにみるパワーの変化：頸髄損傷で半身不随になった A さん家族との会話の分析から | 関西福祉科学大学 | 得津慎子 |
| 10. 看護師が語る「根治治療が困難になったがん患者への告知」をめぐる物語についてのナラティブ分析：構造、関係性、テーマ | 新潟大学大学院保健学研究科
新潟大学大学院保健学研究科
新潟大学大学院保健学研究科 | 菊永 淳
坂井さゆり
宮坂道夫 |
| 11. 基礎看護学における「電法の援助」に関する授業研究：ニューカウンセリングを経て電法の技術から学んだ安楽な援助 | 明治国際医療大学看護学部
基礎看護学講座 | 岡田朱民 |

プログラム

12. 「文脈横断論」を前提とした看護基礎実習の試み	京都光華女子大学健康科学部	鮫島輝美
13. 聴覚障害のある人の他者とのやりとりと発達との関連：手話による語りの分析から	東京大学大学院教育学研究 科臨床心理学コース	広津侑美子
14. 慢性病と「ともに生きる」という事象をめぐって	名古屋大学医学部	今尾真弓
15. 慢性疾患患者の講演による高校生の見えない障害観の変容	立命館大学大学院文学研究科	赤阪麻由
16. ターミナルケアにおける援助者と患者・家族との関わり：医師・看護師へのインタビューに基づく質的研究	東京大学大学院教育学研究 科臨床心理学コース	向後裕美子
17. 医師と患者のやりとりに潜在するゆらぎを捉える探索的方法：化学療法導入のインフォームド・コンセントにてミックス法を用いた観察研究より	京大大学病院探索医療臨床部 京大大学病院探索医療臨床部 京大病院外来化学療法部 京大病院外来化学療法部 京大病院地域ネットワーク 医療部 京大大学病院探索医療臨床 部・京大病院地域ネッ トワーク医療部	八田太一 成田慶一 柳原一広 石黒 洋 岸本寛史 横出正之
18. 障害のある子どもをもつ親の障害受容過程：現象学的アプローチを用いた検討	広島大学大学院教育学研究 科特別支援教育学専攻 広島大学大学院教育学研究 科附属特別支援教育実 践センター	奥村直子 川合紀宗
19. ある障がい者きょうだいの社会の見えと語り合いにおけるその提示方法	東京大学大学院・日本学術 振興会	原田満里子
20. 産後うつ病発症に関連するアタッチメント・スタイルの構成要素：夫との関係性に着目して	東京大学大学院医学系研究科 東京大学大学院医学系研究科	池田真理 上別府圭子
21. 変容過程を複数のアプローチを用いて捉える試み：インタビューから得られた家庭内役割分担に関わる語りの分析から	立命館大学大学院	滑田明暢
22. 医療観察法制度における入院治療中の青壮年期の患者の体験：治療に取り組むことへの意味づけ	国立精神・神経医療研究セン ター/マンチェスター大学	小松容子

23. 過量服薬経験者の過量服薬の効果に対する意味づけ：「過量服薬によって得たもの／失ったもの」についての語りから	明治学院大学大学院社会学 研究科社会学専攻	砂谷有里
24. 暴力更生プログラムの導入がDV被害者の主観的認知に与える影響について	安田女子大学大学院教育学 専攻臨床心理学コース	長船まどか
25. 心理療法における内的ナラティブの生成とその特徴について	神戸大学大学院人間発達環 境学研究科 広島大学大学院教育学研究科 神戸大学大学院人間発達環 境学研究科	小泉 誠 岡本祐子 森岡正芳
26. 子どもの遊戯療法による親への橋渡し機能	久留米大学医学部神経精神 医学講座 久留米大学医学部神経精神 医学講座・小児科学講座 久留米大学医学部小児科学 講座 久留米大学医学部神経精神 医学講座 久留米大学医学部神経精神 医学講座	舩田亮太 松岡美智子 永光信一郎 前田正治 内村直尚
27. 不登校児への対応：異なるケースに共通して存在する概念：	茨城県スクールカウンセラー 東京福祉大学大学院	土田弥生 石川清子
28. スクールカウンセラーの現状と問題点に関する一考察：カウンセラーに対する生徒や教師の認識・評価に注目して	茨城大学大学院教育学研究科	神山拓哉
29. 当事者の語りから見るひきこもりという経験：社会参加までのプロセスにおける葛藤	立命館大学社会学研究科 立命館大学社会学研究科 立命館大学社会学研究科	岡部 茜 青木秀光 深谷弘和
30. 「学校観の脱構築」実践の研究：子どものネガティブな戦略的適応を超えるナラティブ・アプローチ	茨城大学大学院人文科学研 究科	山崎一希
31. 新任小学校教師の経験と変容過程	東京大学大学院教育学研究	曾山いづみ
32. 私立学校に対する親の態度の階級差	釜山国立大学 釜山国立大学	金 鎮淑 宋 娟珠

プログラム

33. 専門職大学院ビジネススクール院生視点の授業 満足基準～成人教育（者）は個性をどう扱うのか	東京大学大学院教育学研究科	豊田かおり
34. 世代間交流が子どもの高齢者表象に与える影響 2	慶應義塾大学大学院	村山 陽
35. 「伝える」という仕事：動物園 1 日飼育体験に おける飼育担当者の大人と子どもに対する語り の特徴の違いから	札幌市立大学デザイン学部 札幌市立大学看護学部	町田佳世子 河村奈美子
36. 1 歳児の「わからなさ」と保育実践	四国学院大学	古賀松香
37. 幼稚園のあいさつのルーティンにおける子どもと 先生の役割交換：5 歳児クラスあいさつ当番の分 析から	静岡英和学院大学	鈴木幸子
38. 幼児の挑戦的活動の展開プロセスに関する研究	広島大学大学院 広島大学大学院 広島大学大学院	境愛一郎 中坪史典 中西さやか
39. 母子関係研究へのポリフォニー（多声的接近）	北海学園大学	小島康次
40. メターコントラクトのダイナミックスの観点か ら見た大人と子どもの共同活動の分析	新羅大学校	朴 東燮
41. 小学 3 年生の英語活動にみられる子どもの質問： ALT とのコミュニケーションに対する質問とは	京都大学大学院	黒田真由美
42. 媒介された行為の創出による世界と知覚の相互 生成	上越教育大学大学院 上越教育大学大学院 上越教育大学大学院 上越教育大学大学院 上越教育大学大学院 上越教育大学大学院 上越教育大学大学院	松本健義 井上啓一 水谷奈央 関根淑充 竹内 淳 平沢大樹 藤田仁美
43. 小学校時代の自然体験やまちづくり学習を中学 生がどう振り返り、意味づけるか	茨城大学大学院人文科学研 究科 茨城大学人文学部	米川久子 伊藤哲司
44. 高校数学教科書の「語り口」に関する言説分析 研究：新しい教科書の構想	熊本大学教育学部 京都大学大学院人間・環境 学研究科	ハッ塚一郎 河合直樹

45. 青年期の親子関係の変化：反抗期を中心に	神戸大学人間発達環境学研究科	須崎暁世
46. 「おやじの会」における男性の経験の考察：おとなの学び合いの場-SCAT を用いた語りの分析から	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科	井上真理子
47. 中年期の子が実感した父親の老い・母親の老い	立命館大学大学院 先端総合学術研究科	谷村ひとみ
48. 「祖母一母一娘」三代の関係性を超えて：「声・心・体を育てる丹田呼吸法と正しい発声法」の創始者、K 子氏の語りから	京都大学大学院教育学研究科 京都大学大学院教育学研究科	西山直子 やまだようこ
49. 人付き合いを好まない高齢者の QOL 理論化 (1)：人付き合いを好まない高齢者は改善すべき存在か？	岡山大学大学院文化科学研究科 岡山大学大学院社会文化科学研究科	福島和俊 長谷川芳典
50. 認知症高齢者による作話的特徴のある語りの検討：連続して繰り返される発話内容の変化	淑徳大学大学院総合福祉研究科	田中元基
51. 認知症介護者がウェブログを綴ることの意義に関する検討（第 2 報）：当事者にとってのウェブログの存在に焦点をあてて	横浜市立大学大学院医学研究科 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 逗子市福祉部障がい福祉課 東京大学大学院医学系研究科 ケア研究会 尾道市立市民病院	河原智江 西村ユミ 塩田 藍 池田真理 林 由美 渡辺陽子
52. 児童養護施設をとりまく社会資源のむすびつきとその実践―「役割分担」に着目して	京都大学大学院教育学研究科	高橋菜穂子
53. 特別支援学級―「ふれあい」のエスノグラフィ―：中国の中学校の視点から日本の中学校を見る	茨城大学大学院人文科学研究科 茨城大学人文学部	孟エイ 伊藤哲司
54. 日本人の親を持つ日本語学習者 X にみられる日本留学経験と読解教材との相互作用：PAC 分析による縦断研究から	国際基督教大学 横浜国立大学	小澤伊久美 丸山千歌

プログラム

55. 留学におけるホームステイ生活への心理的適応過程：女子大学生とホストファミリーとの対人関係を中心に	安田女子大学大学院教育学 専攻臨床心理学コース	平山美雪
56. バイリンガル児の現地校・補習校の宿題遂行過程：初等学校から中等学校への移行を経験した独日国際児の事例から	大妻女子大学 大妻女子大学 早稲田大学大学院 大阪教育大学	柴山真琴 ピアルケ千咲 池上摩希子 高橋 登
57. 成人バイリンガルの文化的アイデンティティ：対話的自己論の視点から	神戸大学大学院人間発達環境学研究科心身発達専攻人間発達論講座	P r y m a k o v a K a t e r y n a
58. バイリンガル児の二言語における読書活動の社会化過程：教育的関係における文化の伝達関係論を手がかりに	大妻女子大学 大妻女子大学 大阪教育大学 早稲田大学大学院	ピアルケ千咲 柴山真琴 高橋 登 池上摩希子
59. 在日三世にとって「文化」とは何か	一橋大学大学院社会学研究科	松岡瑛理
60. 大学食堂での食事場面における日本人と外国人留学生の文化・社会的行動に関するマイクロエスノグラフィー	立命館大学大学院文学研究科	西浦和彦
61. いわゆる異文化接触における「私たち」と「あなたたち」：内モンゴル人と日本人が相手の文化に対して抱く違和感の分析と比較	茨城大学大学院人文科学研究科 茨城大学人文学部	ウダバラチチゴ 伊藤哲司
62. 中国人留学生の日本文化取り入れ行為における文化的気づきと異文化変容	大阪大学 工学研究科	奥西有理
63. 2011年3月11日以降の原発に関するブログ記事のテキストマイニング	立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 立命館大学文学部	上村晃弘 サトウタツヤ
64. 大洗町の復興過程のエスノグラフィー：町内外の社会的ネットワークの果たす役割に注目して	茨城大学大学院人文科学研究科 茨城大学人文学部	王曉玉 伊藤哲司
65. ボランティア活動の原初的規範（意味）生成についての一考察	株原子力安全システム研究所 京都光華女子大学健康科学部	竹内みちる 鮫島輝美

66. PEN-A による地域コミュニティの魅力の発見：沖縄県国際通りを事例に	琉球大学法文学部 京都光華女子大学人文学部 関西学院大学社会学部 帝塚山大学心理学部	加藤潤三 石盛真徳 岡本卓也 谷口淳一
67. 茶道における間主観的関係の構築の可能性について	兵庫教育大学大学院 兵庫教育大学大学院 学校 教育研究科学校心理・ 発達健康教育コース	宮本知子 浅川潔司
68. プロフェッショナルにとっての「教えること」の意味：伝統芸能の師匠の語りから捉える伝承と熟達の関係	京都大学大学院教育学研究科	竹内一真
69. 博物館における「解説者」の熟達の諸相	千葉市動物公園	並木美砂子
70. サグラダ・ファミリアに集う人々：建築継続の要因としての協力・葛藤	茨城大学人文科学研究科 茨城大学人文学部	仲根聰子 伊藤哲司
71. 日本人キリスト教徒の「宗教」語りにおけるポジションと「語り方」の分析	東京大学大学院教育学研究科 東京大学大学院教育学研究科	綾城初穂 北村篤司
72. 「運の譲渡」に関する一考察	神戸山手大学 現代社会学部	村上幸史

抄 録

現代日本の霊性と鎮魂 —受け継がれてきた癒しの心—

講 演 者

内 田 樹

(神戸女学院大学 名誉教授)

<講演概要>

日本は今回の震災によって、そしてかつては広島も原爆によって、大きな傷を負った。圧倒的な悲しみや怒りの前で、私たちは時として、ただ、深い祈りを捧げ、慰霊の儀式を行う。それは、合理性や論理を越えたふるまいであるが、傷を癒し、荒ぶるものを鎮めるために重要な機能を果たしており、霊性は今日でも日常に深く関与しているといえる。本大会では、内田樹先生をお迎えし、現代日本における霊性と鎮魂というテーマで、ご講演いただく。

<内田樹先生のご紹介>

神戸女学院大学 名誉教授。

1950 年 東京都生まれ

東京大学文学部仏文学科卒業、東京都立大学大学院人文科学研究科中退。

専門は、フランス現代思想、映画論、武道論。

著書に、『下流志向』（講談社, 2007）、『死と身体: コミュニケーションの磁場』（医学書院, 2004）、『武道的思考』（筑摩書房, 2010）、『現代霊性論』（釈徹宗氏との共著, 講談社, 2010）をはじめ、多数。

『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書, 2007）で、第 6 回小林秀雄賞を、『日本辺境論』（新潮新書, 2010）で、新書大賞 2010 を、2011 年、第 3 回伊丹十三賞を受賞。

教育、社会、文化等の領域で、現代のわが国におけるもっともユニークでシャープな論客の一人として活躍されています。

師弟関係を通じた Profession の生成と継承 —Generativity(世代継承性)のマクロとミクロな視点—

講 演 者
岡 本 祐 子
(広島大学大学院教育学研究科)

はじめに —「世代継承性」の危機の時代—

Profession(専門的精神と技)とは、どのような営みなのであろうか。文化・芸術・技能・学問・宗教などの世界は、古いものと新しいものが重なり合いながら、ゆっくりと変容していくものである。特に Profession の世界は、どの時代においても、人間の営みをリードする役割をはたしてきた。個人の達成した専門性が、次世代へ受け継がれるプロセスは、どのようなものなのであろうか。私たちは、ズームレンズをひいたマクロな視点から、歴史としてそれをたどることはできるが、師や先輩世代と自世代、さらに次世代との face to face の人間関係における継承の心理的プロセスは、あまり知ってはいない。また、個人がプロの仕事師として自立するための鍵となるポイントも、心理学的にとらえることができ、私たちの専門領域の次世代育成にも応用可能と考えられる。しかしながら、その具体はあまり明らかにされていない。

一方今日は、世代継承性の危機の時代と言われている。戦争体験などの、継承されるべき過去の重要な事実が語り継がれないこと。継承者がいないために、途絶えようとしている高度な技芸が、現代の日本社会に多数、存在すること。仕事を担うために不可欠な、基本的な人間的強さ、深さ、成熟性等の劣化もその一因と考えられるかもしれない。世代継承性の危機の中核的問題のひとつは、Profession を受け継ぐ最も重要な人間関係・装置である「師弟関係」が希薄化していることである。その背景には、①情報伝達方法の驚異的・脅威的な発達、②父権主義の弱体化、③大衆民主主義の蔓延などがある。師弟関係の希薄化によって失われつつあるものは少なくないと考えられる。

今大会では、このような Profession の生成と継承を大会のテーマに掲げた。その一環として、本講演では、①現代の師弟関係を通じた Profession の生成と継承は、どのような特質をもつのか。②それを、心理学の理論で読み解くとしたら、どのように理解できるのかという問題について、演者の最近の研究も踏まえながら考察してみたい。

世代継承性の意味するところ

生成継承性・世代継承性は、よく知られているように、Erikson(1950)が Generativity という言葉でとらえた概念である。それは次世代の創生とケアを意味し、①次世代を生み出すことと育てること、②ものを生み出すこと・創造すること、③他者を支えることなどが包含される。また、McAdams(1998)は、Generativity は、世代連鎖的關係性と自己完結的個性性の 2 つの特質をもつと述べている。

一方、世代継承性は、マクロな継承とミクロな継承という 2 つの次元で見ていく必要がある。マクロな継承とは、世代から世代へ受け継がれた包括的無意識的な継承である。ミクロな継承とは、師から

弟子への man to man, face to face の継承であり、口伝の形をとることも少なくない。後者は、**Profession** の中核が継承されるために重要な役割を果たす。それは心理的なプロセスとして読み解くことができると考えられるが、いまだ未開拓の分野である。

陶器職人の Professional Identity の生成と継承—Generativity 研究の一例として—

演者はこれまで、アイデンティティの生涯発達と危機に関する研究とともに、心理臨床実践にも取り組んできた。心理臨床家の仕事は職人のそれとよく似ているといわれている。このたび縁あって、沖縄読谷壺屋焼の陶器職人さんの師弟に、面接調査とフィールドワークを行う幸運に恵まれた。陶器職人の熟達のプロセスの具体を面接によって聴き取り、師弟関係を通じた **Profession** の生成と継承のプロセスと特質を実証的に考察した。

弟子と師の側から見た陶器職人の Profession の生成と継承の段階と特質

プロとしての熟達、**Professional Identity** の達成と継承は、どのようなプロセスを経て達成されるのか。この研究では、半構造化面接によって、その道行きを語っていただき、後日その語りをアポステリオリに分析・考察した。個としての専門家アイデンティティの達成、および師弟の相互の関係性を通じての熟達には、明確なプロセスが見出された。以下の①～⑧は、師弟関係を通じた熟達のプロセスである。① 入門（親方の専門的世界を主体的に選び取る）、② 仕事のシステムを体得する（仕事世界のルールを血肉にする）、③ 責任性（作陶の全ラインに責任をもつ）、④ 見て覚える（感性を発揮して師を「見て技を盗む」）、⑤ 繰り返しの作業（繰り返して技を身につける）、⑥ 良い作品の弁別、⑦ 感性の獲得（よい作品を多く見て自分の感性を磨く）、⑧ 技と感性を発揮したオリジナリティ の発揮。

これらを、Erikson(1950)の **Epigenetic schema** をもとに捉えると、弟子は、特定の専門的仕事世界の中で第Ⅰ段階から第Ⅴ段階までのテーマが順に経験されること、師匠の側から見ると、第Ⅶ段階(世代性)の中で、第Ⅰ段階から第Ⅶ段階のテーマが現われ、師弟関係の中でそれらが相互に体験されることが示唆された。この相互の営みと心理的意味は、ミクロな次元での **Profession** の生成と継承の具体を示すものであり、他の専門的仕事の継承にもあてはめることができるであろう。

心理臨床家と職人のプロフェッショナル・ワークにおける共通の特質も見出された。両者とも、①知的な仕事であると同時に、感性・イメージが重要な役割をもつこと、②本人の「人間性」が仕事の質を決定すること、③仕事の現場性、④訓練の基本は、型・技の習得から始まること、⑤常に新しい「生」に遭遇する驚きが体験されることなどである。

Profession の「世代継承性」研究と討論における課題

アイデンティティ研究は、この 60 年間にすでに数多くの研究の蓄積があるのに対して、**Generativity** 研究、中でも **Profession** の生成と継承に関する心理学的研究は、まだほとんど行われていない。学問・技芸など長い歴史をもつ分野の継承プロセスとその心理的特質のミクロな分析は、今後の重要な課題である。また、**Profession** の継承と深化のための「師弟関係」のあり方、つまり、旧来の徒弟制度ではない、現代社会に適した **positive**、かつ生産的な師弟関係とはどのようなものかという問題の考察は、世代継承性の危機の時代の重要な課題であろう。

第 1 回 質的心理学研究法セミナー：インタビューの仕方とまとめ方の初歩 (半構造化面接の場合)

日時：2011 年 9 月 23 日(金)

場所：安田女子大学 9 号館 5 階 9521 教室

10：00－11：00 第一講義 インタビュー方法の概説

(機材の準備から、インタビューガイドづくりまで。1 分間スピーチの実践。)

11：10－11：50 模擬インタビューと質疑 (登壇者 1 名の立候補を募ります)

11：50－12：30 第一グループワーク (6 人ずつ 3 班)。午後にその発表と講評

※インタビューイヤーは、榎田。全部をビデオでも撮影。

※インタビュー題は、「母の入院から学んだこと」

13：30－14：00 第二講義 インタビューからデータ分析へ

(キーワードの抽出から、一人称一人語りでのまとめまで)

14：10－14：40 第一グループワークの発表 (3 つの班で各 5 分発表 5 分質疑)

14：40－16：10 第二グループワーク (25 分の実践＋5 分の講評を 3 セット)

※「インタビューの研究法セミナーを受講しようと考えた理由」を題に、3 人ずつ 6 チームに分かれてインタビュー。聞き役、聞かれ役、書記役を交代しつつ全部経験する。

16：10－16：20 総括討論とまとめ

16：20－16：30 事後課題 (オプション) の説明

教科書：能智正博著 2011『質的研究法』東京大学出版会 (2500 円＋税), 7～10 章を利用

講師： 榎田 美雄氏 (A 班支援者)

※徳島大学准教授、日本質的心理学会研究交流委員会委員長 (常任理事)

業績：D.メイナード著榎田・岡田訳 2004『医療現場の会話分析』勁草書房

助手 1： 中島 慶子氏 (B 班支援者)

※安田女子大学大学院文学研究科教育学専攻 臨床心理学コース

関心分野：発達障害のある子どもへの支援

助手 2： 淀瀬 麻未氏 (C 班支援者)

※安田女子大学大学院文学研究科教育学専攻 臨床心理学コース

関心分野：喪失体験の語り

事前配布物・・・第二グループワーク用課題 (インタビューガイドの作り方メモ) 注)

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/social/kasida/presentation/presentation.html> の 70 番で、最新情報を公開し続ける予定です。

プレ企画・ワークショップ2

みんなで研究検討会：話そう、味わおう、突き抜けよう！

広島にて開催される第8回大会前日（11月25日）、大会プレ企画「みんなで研究検討会：話そう、味わおう、突き抜けよう！」が当委員会と共催で行われます。今回案内するのは、研究発表者と参加者の募集です。どしどしご応募ください。

【日時】2011年11月25日（金曜、大会前日） 12時半～17時

【場所】安田女子大学（詳細は追ってHPに掲載します。また参加申込者にはメールで連絡します）

【ゲスト】箕浦康子先生

【司会】松本光太郎（茨城大学）

【主催】東京フィールド研究検討会

【共催】日本質的心理学会第8回大会準備委員会、日本質的心理学会研究交流委員会

【概要】東京フィールド研究検討会（とうふ研）は、大学院生においては研究室外で、研究者においては所属先外で、公にじっくりと長時間の研究検討の機会を提供しています。

今回は、箕浦康子先生をゲストにお招きして、質的心理学会広島大会の前日にプレ企画として研究会を開催いたします。

募集する研究発表者は2名です。研究発表者は大会参加者に限りますが、研究会には、事前申込をしていただければ、どなたでも参加できます。

研究発表者においては、未公刊で、すこし行き詰まりを感じている研究、あとひと山ふた山が越えられないでいる研究、そのような自分では打開できない状況にある研究について、箕浦先生や研究会参加者との議論を通して、突き抜けるきっかけを掴んでみませんか。

参加者においては、研究を育む手助けをすることは、自分の研究実践に必ず生きてきます。

研究発表者以外の参加も積極的に募集しています。

【研究発表者の応募概要】

- ・募集人数： 2名
- ・応募資格： 大会参加者に限る。
- ・応募書類： 研究発表者は、テーマ、概要、そして現状を文章にまとめて、以下のアドレスに応募する。

tofukun2011@gmail.com（とうふ研）。

- ・応募締切：10月10日（募集は締め切りました。）
- ・諸費用： 必要なし。

【参加者の申込概要】

- ・応募締切：11月24日まで延長します。

誰でも参加することが出来る。費用は必要ない。座席準備のため、事前に以下のアドレスに申込が必要。tofukun2011@gmail.com（とうふ研）。

講習会

講習会1

ステップ式質的研究法TAE入門

講師 得丸さとこ（日本女子体育大学）

「研究したいテーマはあるが漠然としている」「学習者の授業感想などのデータはあるがどう分析すればよいかわからない」—こんな方に、新しい質的研究法 TAE を体験していただく入門講習会です。

TAE (Thinking At the Edge*) は「漠然とわかっていること」を明確な言葉で表現するための系統だった方法です。14 ステップの手順に沿ってスモールステップで作業するうちに、自然に「表現したいこと」が「言葉（概念）の連関構造」に展開し「データの意味の要約文」ができあがります。各ステップの作業目的が明確なので、要点さえ押さえれば自在に応用でき、教師、カウンセラー、看護師等、忙しい現場を抱える実践者の「実践を振り返る方法」としても活用できます。

講習会では、やさしい「ワーク」を通じて、参加者に TAE のエッセンスを体験して頂けるよう準備しています。具体的な研究計画がなくても、ご参加頂けます。講習の時間を、研究のアイデアをまとめる時間としてご活用ください。

既に研究データ（学習者の授業感想、観察記録、インタビューデータ、記録映像等）をお持ちの方は、事前によく目を通してからご参加ください。講習会で、ご自身のデータ分析の実際を、部分的に体験して頂くことができます。

みなさまのご参加をお待ちしています。

*ユージン・ジェンドリンらが考案した概念生成法です。（参考文献：『ステップ式質的研究法—TAE の理論と応用』得丸さと子, 2010, 海鳴社）

講習会2

TEM 入門（2）：質的研究をする姿勢を作ろう

講師 サトウタツヤ（立命館大学）

質的研究は何のためにやるのでしょうか。この問いに対して私は「人間について丁寧に考えるため」と答えたいと、今は考えています。

この講習会では、TEM という方法を一つの媒介にして、丁寧な質的研究をするとはどういうことかを考えていけるようにしたいと思います。研究を仕上げるためのお手軽なマニュアル的技術として扱うのではなく、丁寧に考えるための補助具として扱うようにしたいのです。そのように考えれば、TEM を学ぶことが TEM という限られた方法を学ぶことにとどまらず、質的研究のトレーニングの一つになるかもしれません。

さて、TEM（複線径路・等至性モデル）とは、等至点に至る複線径路を描くことでライフストーリーを記述・理解する試みです。その際、個人（やシステム）とその置かれた環境のせめぎ合いの中で個人が特定の選択肢を選んで歩みを進めていく姿を描くことを重視します。扱う素材としては、語りデータやフィールドワークのデータなど時間経緯を考える素材であれば、何でも大丈夫でしょう。テキスト化されたストーリーであれば、自白調書のようなものにも適用できるはずです。

この講習会では、質的研究の原理について考えた後、**TEM** に固有な考え方、人間モデルとしてのシステム論、サンプリングストラテジーとしての歴史的構造化サンプリング、個人の決断の発生を理解するための三層モデル、などについても必要な解説もします。

最後は実習も盛り込みます。素材はこちらで用意します。非可逆的時間と時計時間との差異、分岐点の設定、分岐点における対話的自己の生成、必須通過点の発見、両極化した等至点の設定、などについて考えながら **TEM** 図を画いてみたいと思います。

参考文献

サトウタツヤ(編著) (2009). **TEM**ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして
誠信書房

参考サイト

<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/index.html>

講習会 3

カテゴリー化を読み解く試みから：エスノメソドロジー入門2

講師 好井裕明 (筑波大学)

昨年(2010)の大会(茨城大学)で「今一度「あたりまえ」を疑う意味を考え直す：エスノメソドロジー入門」という講義を行った。そのときは時間的制約もあり、伝えたい内容をすべて語り尽くしたわけではなかった。ただエスノメソドロジーというものの見方、考え方の核心は語ることができたと思う。好評ということで今年も入門講義を、という依頼があった。うれしい限りだが、今一度昨年度と同じ内容を語ることは、やはりできないだろう。では何を伝えようかと考えてみた。エスノメソドロジーが示してくれた重要な問題として「カテゴリー化(categorization)」がある。日常的な差別や排除を調べてきた私にとっても、この問題は具体的な現実を読み解くうえで基本の手がかりとなっている。そこで今年はこの問題を中心に語ってみたい。かつてTVドキュメンタリーにおけるカテゴリー化実践を解説したことがあった。いったいどのような営みの中で、読み解く発想に気づき、どのように映像を書き起こして、そのカテゴリー化実践がもつ問題性を読み解こうとしたのか。実際に用いた映像をみなさんに見ていただき、私なりの解説のありようを例証したい。もちろん、初めにエスノメソドロジー的な考え方について、平易に説明するイントロをおいておくので、昨年のリピーターだけでなく、今回初めての参加も大歓迎です。

「育てる」営みの生成と継承ー保護者を育てる「子育て支援」とは何かー

企画者	永田彰子	(安田女子大学)
	渡邊照美	(くらしき作陽大学)
司会者	渡邊照美	(くらしき作陽大学)
話題提供者	鯨岡 峻	(中京大学)
	西村真実子	(石川県立看護大学)
	菅野幸恵	(青山学院女子短期大学)
指定討論者	鯨岡 峻	(中京大学)

企画主旨

今、われわれが在るのは、太古の昔から続く命のバトンが継承されているからに他ならない。そして今後も、人類が存在する限り、このバトンは継承されるであろう。しかし、晩婚化の進行、未婚率の上昇、経済事情等により、子どもを生むことをためらう人々、子どもを授かったとしても、育児不安や乳幼児虐待等、子どもを育てることに難しさを感じている人々の増加といったように少子高齢化を迎えた日本社会において、「育てる」ことは容易ではない。子育て支援が盛んに叫ばれているが、子育て支援は保護者の子育てを肩代わりするものではないだろう。育てる者としての保護者が、保護者として「育つ」営みを支援することが、子育て支援の本質だと考える。そして「育てる」という営みを、時代に応じて生成し、世代から世代へと継承していくことが、今、求められている。そこで、本企画では、保護者を育てる子育て支援を考えることにより、「育てる」営みの生成と継承について、様々なお立場から検討していただく。

「子育て支援は保護者のためだけのものか」

鯨岡 峻 (中京大学)

筆者は現在、京都市「こどもみらい館」の「子育て支援研究プロジェクト」に間接的に関わっている。公私立幼稚園各1園、公私立保育園各1園から集まった保育者が、自園の子育て支援の取り組みを紹介し、相互理解を深めながら、幼稚園や保育園で行い得るあるべき子育て支援とはどのようなものかについて研究を進めているところである。そこから分かってきた子育て支援の実態を見、またあるべき子育て支援の中身を考えると、いくつかの視点が浮かび上がってきた。云うまでもなく、子育て支援は、在園か否かを問わず、いま子育て中の保護者が抱えるさまざまなニーズへの支援であることは云うまでもない。しかし、□子育て支援の議論の中で、子どもに必要な支援の議論が希薄ではないか、□支援する側は、保護者の悩みの実態をどれだけ踏まえて支援を考えているだろうか、□保護者を受け身にすることなく保護者の能動性をいかに引き出すかの視点をもって支援に取り組んでいるだろうか、などの問題点が見えてきたことも確かである。シンポジウムでは、支援する側と支援を受ける側での接点での対応を中心に、支援で最も求められているものについて、いくつか考えるところを述べてみたい。

「育児不安や育児困難に悩む母親への子育て支援のあり方」

西村真実子 (石川県立看護大学)

「ちゃんとしつけないのに、うまくいかない...こんなにがんばっているのに」「どうしてもわが子を

かわいいと思えない」「子どもにあたってしまった後悔ばかり...こんな未熟な親じゃダメだ」「子どもをみていると、自分の子どもの頃が思い出されて辛い」など、これらは母親の悩みの一部である。シンポジウムでは、このような育児不安や育児困難に悩む母親を対象とした、親育ち支援プログラム「完璧な親なんかいない Nobody's Perfect(NPと略する)」の実践と評価研究の経験、および育児困難や虐待に悩む母親同士のグループ「親と子の関係を考える会 Mother and Child Group(MCGと略す)」の経験を基に、親が子どもに不適切な関わりをしないための子育て支援のあり方、親への関わりについて述べてみたい。親が安心して自分の悩みをありったけ話ができ、わかってもらえたと実感できること、分かり合えサポートし合える仲間がいると感じられること、自分を前向きに客観視できること、自分に合った子育てのやり方を見つけられること、母親モデルがいることなどがある。私たちが今、社会全体で子育てを支援しようとしているのは、親が子どもと適切な関わりをもつのを願うからである。そして、そのことが次代を担う健全で健康な子どもたちが育っていくことに繋がると思うからである。子どもへの不適切な関わりに問題を感じていない(心理段階の)一部の親を除けば、わが子の将来を心配していない親はいないと思う。相手がどのような状況にあるかを十分にとらえることが必要である。

「母親主体による地域活動～W音楽祭の試み～」

菅野幸恵（青山学院女子短期大学）

“子育て支援”という枠組みは、養育者を困っている人（支援の必要な人）として位置づけ（岡本, 2008）、支援するものと支援されるものの関係を固定化する。そのような枠組みのなかで養育者は受身的になりがちである。「育てる」営みを支援するためには、養育者を“主体的に子育てをする人”としてとらえる必要があるだろう。本発表では子育て中の母親たちが地域を巻き込みながら行っている音楽祭について報告したい。この音楽祭はある保育園内の子育て支援センターを利用していた母親たちに、保育園から『地域を巻き込んだ音楽祭』をしてはどうか？という投げかけがなされたことがきっかけとなり始まった。2010年までに計9回行われている。音楽祭が始まった当初は保育園が企画や運営の多くにかかわっていたが、2回目以降から母親たちが主体的に運営を担うようになり、スポンサーを募るなど経済的にも自立した活動になっていった。8回目からは地域の中学生にボランティア参加を集うなど、多世代がかかわる活動になっている。今回は音楽祭がどのようにして母親主体の活動として発展したか、そこに保育園はどうかかわっていたのか、またどのようにして継続してきたのかについて、母親たちに行ったインタビューに基づいて報告する。

文化の生成と変容の最前線

企画者	大会準備委員会
司会	田中共子（岡山大学）
話題提供者	奥西有理（大阪大学）
	細川京子（川崎医療福祉大学）
	奥田尚甲（広島大学）
指定討論	柴山真琴（大妻女子大学）

<企画趣旨>

ある組織や集団で「文化」が紡がれていくさまや、邂逅などの刺激により変容していくさまは、そのダイナミズムが魅力である。相互的に関連する要素からなるシステムの変容をどう捉えるのか、それを読み解く困難さは、研究の視点やツールを研ぎ澄ませていく。今回は三つの視点から、その試みの最前線を語っていただく。奥西氏からは、日本人と中国人との異文化接触に焦点を当て、文化的邂逅が何をもたらすのかを、両者の視点から解き明かす複眼的な研究を紹介していただく。細川氏からは、病院という組織において、医療安全への風土や制度を全て含めて安全文化として捉えたとき、何が浮かび上がるのか、また医療安全教育で変容しうる可能性をどこに見いだせるのかを語っていただく。奥田氏からは、東南アジアから日本に来て働く、東南アジア出身の介護士・看護師を対象とした日本語教育を整備する視点から、異文化圏で日常生活と職業生活を展開していく時の、言葉の持つ意味を読み解く手がかりを示していただくこととしたい。

<話題の概要>

奥西有理氏 「日本人ホストと中国人ゲストは異文化接触をどう受け止めたか」

日本の外国人登録者数は2009年付で、2,186,121人、国籍別でみると、中国が680,518人で全体の31.1パーセントを占め、かつては1位だった韓国・朝鮮をしのいで第一位となっている。日本人が中国人と接触する機会は増しているものの、異文化間心理学や異文化間コミュニケーション分野の研究は、集団主義対個人主義、高コンテクスト対低コンテクスト等、「対欧米」の枠組みで論じられることが多い。中国人などアジア系の人々と日本人との異文化接触研究は、端緒に着いたばかりである。本発表では、中国人短期滞在者（主に留学生、一部就労経験有）と日本人ホストとの異文化接触を取り上げる。インタビュー調査を行い、日本人ホスト側から見た中国文化と中国人ゲスト側からみた日本文化、すなわちそれぞれの「文化」のフィルターを通した相手方の「文化」観を調べた。日本人ホストの側は、伝統的な中国的特質としての食文化、マナー、コミュニケーション方法、大陸的気質、人間関係の持ち方等に言及し、加えて80年以降の政治的・経済的な大改編に伴う近代的・現代的な特質、すなわち女性の地位向上、民主主義への戸惑い、拝金主義、上昇志向などに注目していた。中国人ゲストの側は、日本のサービスの良さ、気遣い、礼儀正しさやマナー、集団主義的行動、コミュニケーションの消極性や曖昧さ等、欧米人による異文化コミュニケーション研究と重なる点を指摘した。しかし「希薄な人間関係」や「ルール依存」は特徴的な言及で、中国の価値観と相反する傾向に触れたものといえる。互いに相容れない価値観として、ルール依存 v.s. 人間関係依存が指摘できる。この葛藤は互いへの偏見につながっており、特にホストでその傾向が強かった。中国人留学生は、日本文化の取り入れを行って異文化変容を果たし、バランスを取っていた。一方で、ホストの日本人による中国文化の取り入れは希薄で、異なる行為を不可解とみて、違和感を抱えたまま受容したり放置したりしていた。そしてそうした異質な行為を中国人としての行動、あるいは個人の性格的な特徴と捉えていた。異文化接触でホスト側も変容するという見方を理想論とするなら、中国人という外国人を受け入れる日中異文化交流においてはその確

認は難しい。どうなればそれがかなうのか、ホスト側の文化学習の可能性を考察してみたい。

細川京子氏 「危険予知訓練がチームに与える影響と病院の安全文化への影響」

病院での患者安全にかかわる看護師を対象に、危険予知訓練を実施して得られた変化について紹介する。某病院が取り組んでいる危険予知訓練により、一般看護師が感じている変化と管理者が感じている変化を調査した。一般看護師においては、危険予知訓練の実施によって「チームワーク」や「他者への思いやり」などが生まれ、情報共有が活発に行われるようになった、と感じていた。例えば他者と一緒に指差しを行い、声に出して確認するなど、確認方法が丁寧になったと認識していた。さらに患者や他の看護師に対する説明が丁寧になり、情報共有が増えたと認識していた。また個人の変化だけでなくチームレベルにおいても変化を指摘し、チームでの働き方が変わったとの認識がみられた。一般に危険予知訓練の問題されるのはマンネリ化や時間がかかることなどだが、そうした意見を述べたものはわずかであった。病棟師長においては、一般看護師と共通した指摘がみられた。すなわち一般看護師の仕事の仕方や、彼女らの患者・他の看護師・上司への対応、そしてチームの仕事の仕方が変化したと、病棟師長は認識していた。両者ともに、危険予知訓練の実施で看護師自身の危険に対する意識や行動と、患者や上司や同僚に対する働きかけが変化した、という認識が生じていたことになる。危険予知訓練は個人のリスク感受性を高める目的で始められるが、今回は個人の意識変化のみならず行動変化や、患者を含むチームと対人関係における肯定的な変化も指摘されていた。看護師らはチームで話し合いを行うことで、自分だけでは気付けなかった問題点を把握できたり、自分が持っていなかった解決方法を共有できたなどと、チームで取り組む効果を述べた。結論として、危険予知訓練は個人レベルの変化のみでなく、チームレベルの変化も促しており、組織の「安全文化の醸成」に貢献する可能性が示唆される。

奥田尚甲氏 「専門用語は難しい？」

周知のように、2008年から経済連携協定（EPA）の枠組みによる外国人看護師・介護福祉士の受け入れが始まり、彼らの職場適応や国家試験対策が問題として取り上げられている。特に、国家試験における日本語の問題は、難しい漢字と専門用語だと新聞等で取り上げられることが多い。発表者は、この数年来、看護師国家試験について、出題内容や形式・テスト理論などの観点からではなく、日本語教育における言語的な側面、特に語彙という観点から調査を行ってきた。日本語教育とは、日本語を母語としない人々に日本語の何をどのように教えるかという言語教育の一分野である。一般的には、専門用語は難しく難解であるとされ、事実、そのように感じる言葉はどの専門分野でも存在する。しかし、本当に「専門用語」＝「難しい言葉」なのだろうか、日本人の専門家と非専門家、外国人の専門家と非専門家のそれぞれで、難しいと感じる言葉は異なるのではないだろうかと考えるようになった。2010年8月に厚生労働省から公表された、有識者検討チームによる看護師国家試験における用語の見直し案に次のような例がある。私たちににとっては何の問題もない文である。

・腹部の膨満感がある → お腹が張っている感じがする

しかし、食べ過ぎで「お腹が張る」という意味と出産間近の妊婦の「お腹が張る」という意味は異なる。また、「お腹」と「張る」から「お腹が張る」の意味を推測することも簡単ではない。そして、「お腹」という言葉は、単に腹部なのか、胃腸のことなのか、子宮のことなのか、などの判断を求められる。「張る」も、「弛みがない」という意味なのか「緊張する」「貼付する」等々、文脈で意味が変わり、自動詞・他動詞の使い分けも候補者に求められ、易しい言葉というには疑問がある。その一方で、当初は読めないだろうと言われた「褥瘡（じよくそう）」は、読めない候補者がいないのだからかさえ現在は言われている。私たちが「当たり前」と思っていることが当たり前ではないことが、行動・習慣や考え方だけではなく言葉の中にも潜んでいることを述べてみたい。

不在のコミュニケーション—その後

企画者	南 博文	(九州大学)
司会者	澤田英三	(安田女子大学)
話題提供者	南 博文	(九州大学)
	手塚千鶴子	(慶応義塾大学)
	濱田裕子	(九州大学)
指定討論者	やまだようこ	(京都大学)

企画趣旨：

やまだ（1994）は、日本教育心理学会での自主シンポジウム「生涯発達における「不在」のコミュニケーション」において、「ない」という視点から心理現象を考えることの必要性を主張し、それが日本文化に根づく「無の発想を生かす心理学」であるという問題提議を行っている。そこでは、1. 親子関係における「欠損」「不在」の意義、2. 人の有限性の自覚と死際のコミュニケーション、3. 「死者」との共生と世代間伝達および宗教機能、が話題として取り上げられた。文化的背景において、わが国の実在感覚に潜んでいる「ない」側から観るこの世の姿と、そこでの人の成り行きを辿り直すことによって、人の一生を見ていく新しいビジョンを得ようとする試みであった。

本シンポジウムは、この問題提議をひきつぎ、「その後」に起きたいくつかの国内外のcriticalな出来事を受け止め（その日付をもって表現される悲劇の重なり）から、もう一度「不在のコミュニケーション」の主題に意味ある形で向き合ってみようとする試みである。大会の開かれる広島という場所の記憶に、このテーマの原点もあると企画者には思われる。

話題提供

1. 路地の記憶／路地の消失 南 博文（九州大学）

場所の記憶は、その場所を失ったことの再認という形で顕在化するように思われる。どこが自分の場所なのか、意味のある環境なのかという問いも、それがふつうに身の回りに環境としてあるときには、意識されないであろう。それらは、いわば無意識として個人を取り巻き、包み、その個人のアイデンティティの背後に潜んでいる。共同性の基盤としての「まち」にも同様な事情があてはまる。

「原風景」を研究してきた筆者は、子ども時代の遊び環境が、道によって結ばれており、そこに一定の構造がある事に興味を抱いてきた。また、ある町の再開発の前後を見ていく経験から、道の構造が変化することで、町を身体化する枠組みそのものが変更され、場所の感覚やアイデンティティが失われる事が重要に思われた。原風景という言葉を最初に使った奥野（1972）は、「空き地・はらっぱ」を都市の中に残る縄文的な空間として解釈しているが、筆者は路地に展開する子ども時代の記憶の中に、神話的な性質を見ることができ、そこに都市生活の深層を読み取ることができるのではないかと考える。さらに、生涯発達の過程の中で、原風景を話題にするのは、すでにその環境が日常としては失われており、自己のアイデンティティの根拠を探し出そうとすると、自分を育ててきた環境を再度目の前に現したいという再現前（re-present）の動機に基づくように思われる。

広島の都市の歴史において、路地が道路に変換されていった経緯と、その記憶を今たどり直すことの意義を、さぐっていきいたい。その際に、「上手に思い出すことが大事」という小林秀雄（1946）の考え方と、廃墟をめぐるベンヤミン、W.（1955）の思索から、失うことと想起することとの関係について、人ではなく場所をめぐる記憶の課題について議論したい。

2. ヒロシマー 語りとしての沈黙 手塚 千鶴子（慶応義塾大学）

石内都の写真集「ひろしま」には、ぼろぼろに色あせても、存在感を放つブラウスやスカート、ワンピースたちが、長い歳月を経て淡い光に包まれ、なお一層身につけていた者たちの不在を刻み、見る者の心に深く迫ってくる。しかしまた、その柔らかで優しい光に照らされた洋服たちは、今にも死者たちをよみがえらせそうな予感で見る者を満たす。悲惨の極みを生きた彼らは、果たして何を語るものであろうか。わたしには、死者たちが、原爆投下への糾弾や、投下責任を問いつめる怒りの声を発しそうには思えない。語る身体も声も失った者に寄り添うすべをもたないわたしの、勝手な思い込みだろうか。いやそこにこそ、敗戦という喪失を生きてきた日本人の、原爆との折りあいのつけ方が、その語りや記憶の本質が、かいまみれるのではないだろうか。

そんなあやうげだがわたしを捉える直感を頼りに、今回、語りえない、語られないものを明らかにし、「不在」の側からの原爆の語りに耳を傾けてみたい。原爆との折りあいのつけ方を、鮮明に浮かび上がらせてみたい。それはあの戦争自身の語りにも連動している。日本人は、原爆を虐殺ではなく、不可抗力の悲劇ととらえたといはれる。戦争や原爆の語りに共通するのは、被害者としての悲惨や悲しみ、労苦である。原爆開発に20億ドルの巨費と多大なエネルギーを投じ、原爆投下を決定し実行した主体であるアメリカへの怒りが表出されることはあまりない。しかもこの背後に深い沈黙、原爆をめぐる自ら語る一步を踏みだしがたい、被爆者たちの「自主的な沈黙」がある。この沈黙と怒りの不在を、被爆した文学者たちの原爆をめぐる小説や短歌、一般の被爆者たちの証言や記録、戦後人気を博したヒバクシャ映画の分析を通して明らかにする。さらにその多様な要因のうち、怒りに抑圧的な日本文化の傾向や、「あはれ」や「はかなさ」「清らかさ」を貴ぶ日本的美意識を考察し、最後にアメリカをふくめた世界との、自己との意味ある対話をめざし、新たな語りの可能性にもふれてみたい。

3. 子どものホスピスへー 亡くなった子どもへの手紙 濱田 裕子（九州大学）

子どもを亡くすことは、親にとってもきょうだいにとっても不条理で受け入れがたいものである。子どもは本来、夢や希望、未来のある存在で、「死」からは最も遠い存在である。また、医療技術の進歩によって難治性疾患の治癒率や生存率が向上しているが、このことは、一方で子どもを亡くす体験自体が社会的に理解されにくい状況をもひきおこしている。子どもの死は、遺されたものに深い悲しみをもたらす。なぜ死に至ったのか、どうしてわが子なのか、子どもの未来も夢も、子どもとの関係も、全てが奪われた喪失感に苛まれる。しかし、死は「喪失」ではあっても、「無」ではない。遺された家族は、その子とのつながりを辿りながら、子どもの伝えようとしたメッセージを見出そうとしていく。

筆者の関わっている難病の子どもとそのご家族を対象にした毎年開催されるキャンプでは、子どもの死後も毎年ボランティアとして関わり続けているご家族がいる。ご家族にとっては、最初は「子どもがいないことを確認しに行くような辛い場所」であったが、しかしそこは「子どもが確かに生きていた場所」でもあった。子どもはいなくても、子どもがつなげてくれたひとを通して、さらに人とひとはつながっていく。あるごきょうだいは、亡くなった弟宛てに書いた手紙を見せてくれた。その手紙には、弟が生まれて嬉しかったこと、沢山の思い出と今のおもいが綴られ、弟へ語りかけるように、「軽くなったから、これからは一緒にどこへでも行こう。」と結ばれていた。

子どもは「不在」となっても、それまでの関係性がなくなることはなく、むしろ、子どもとの対話を繰り返しながら、子どもが生きた意味や自分の生きる意味を問いかけ、亡くなった子どもとの物語をゆっくりと紡いでいく。本シンポジウムでは、親やきょうだいにとって子どもを亡くすということ、そして亡くなった子どもとの対話によって紡がれる物語が何をもたらすのか、さらに、社会がタブー視することなく、ともに子どもの死に向き合うことについても考えてみたい。

現代メディアの創造性

企画者	小嶋由香	(安田女子大学)
司会者	小嶋由香	(安田女子大学)
話題提供者	西原明史	(安田女子大学)
	佐々木玲仁	(九州大学)
	家島明彦	(島根大学)
指定討論者	内田 樹	(神戸女学院大学 名誉教授)

企画趣旨

テレビや映画、マンガなどのメディアは、現代社会を生きる私たちに最も身近で、親しみのある文化である。また、メディアの作り出す作品は、その時代を映し出す鏡ともいえる。しかし、これらの作品には、一時的な娯楽を提供するに留まるもの、定型的で記号的な繰り返しに過ぎないものも多い。または、作品の世界に埋没し、メディアとの内閉的世界に閉じこまる場合もある。電子メディアの普及が、青年のコミュニケーションの希薄化や、リアリティの喪失をもたらすことも指摘されている。その一方で、見る者に創造的な影響を与える作品が存在する。このような受け手と作品の間に有機的な結合が生まれるには、作品の持つ世界観や物語の力だけでなく、受け手側の準備性や主体的な関与も不可欠であろう。また、同時代を生きる多くの人に受け入れられる作品を読み解くことは、現代社会そのものを理解することにもつながる。

本企画では、西原氏は宮崎駿作品を文化人類学の視点から、佐々木氏はテレビ番組「水曜どうでしょう」を臨床心理学の視点から、また家島氏はマンガが青年の自己形成に与える影響について話題提供を行う。また、指定討論者には「街場のメディア論」「映画の構造分析」などの著書を持つ内田樹氏を迎え、フロアとのやり取りも通しながら、メディアと私たちのこころの有り様を幅広く検討したい。

宮崎駿と中国の民族問題

西原明史（安田女子大学）

中国が抱える大きな課題の一つが民族問題である。最近では、中国西北部に住むウイグル族の存在が日本でも知られるようになってきた。しかしその実情は必ずしも報道されるようなものではなく、それなりに平穏な暮らしが営まれている。政治・経済・文化など様々な面で抑圧を受けているにもかかわらず、ウイグル族の人々が漢民族とそこそこうまくやっていけるのはなぜだろう。

この民族関係をめぐる問いを考える上でヒントになるのが、意外かもしれないが宮崎駿の作品である。エコロジー思想が主題だとよく言われているが、その物語を分析してみると、むしろ自然と文化という相容れないもの同士の対立が中和していくような「構造」を発見できる。これを念頭に置いてウイグル族の発言を分析してみると、確かに同様な語り口を見出せたのである。それが民族融和の鍵になっていると私は見ている。

宮崎駿とウイグル族。全く無関係な両者が、その作品の読み方次第でしっかり結びつく。このように物語の可能性を開く技法の一つ、構造分析の実演を中心に、物語を解釈することの楽しみを提案してみたい。

水曜どうでしょうの物語構造：「わかりにくいこと」の意味

佐々木玲仁（九州大学）

「水曜どうでしょう」は1996年より北海道の地方テレビ局で制作・放送されたバラエティ番組であり、2003年の放送終了後も現在に至るまで全国的に絶大な人気を誇っている。この番組中で行われる企画は、一見したところ「行き当たりばったり」に進行し、テーマが番組の途中で変化してしまうなど、極めて場当たり的に作られているように見える。また、そのことがこの番組の魅力の一つとなっている。しかし、この無構造に見える番組には実際には確固たる構造があり、それがこの番組特有の面白さと結びついているということが、制作者である2名のディレクターへのインタビュー調査とその分析から明らかになってきた。今回は話題提供としてこの物語構造を示すとともに、「水曜どうでしょう」とカウンセリングの類似性や、「番組に構造がある」ということ自体がわかりにくいものであることの必然性などについても論じたい。また、このような形で「水曜どうでしょう」を考えることが、今を生きる我々に「必要でありながら欠けているもの」を得るための手がかりとなることを示したい。

人格発達と現代メディア：マンガが青年の自己形成に与える影響について

家島明彦（島根大学）

本発表では、現代におけるメディアと発達の関係について、特に「マンガが青年の自己形成に与えるポジティブな影響」に焦点を当てて話題提供を行う。その際、特定の作品を解釈することは避け、人々がマンガからどのようなことを学び取っているのか、これまで実施してきた各種調査（電子掲示板の書き込み分析、質問紙調査、インタビュー調査）の結果に触れながら、その影響内容や影響過程について紹介する。さらに、「現代メディアと創造性」というシンポジウムのタイトルと絡めて、「セレンディピティ（serendipity）」と「ナラティヴ・イマジネーション（narrative imagination）」という2つの概念を取り上げる。簡単に言ってしまうと、セレンディピティとは「偶然から発見を導く能力」であり、ナラティヴ・イマジネーションとは「他者の物語の賢い読み手になる能力」である。結論を一言で言えば、現代メディアが人々に提供しているのは物語（ナラティヴ）であり、人々はそこから他者理解や自己理解のための知識と創造力を学んでいる。質的研究と上記2つの概念の関連についても議論してみたい。

子ども理解のメソドロジーとしての質的研究

—実践者の研究方法としての可能性を探る—

企画・司会	中坪史典	(広島大学)
話題提供	柴山真琴	(大妻女子大学)
	得丸さと子	(日本女子体育大学)
指定討論	サトウタツヤ	(立命館大学)
	松本信吾	(広島大学附属幼稚園)

<企画趣旨>

近年、研究方法としての質的研究は、いろいろな学問分野で注目されるようになってきた。保育学や教育学の分野でも、数量的データだけでなく、観察、実践記録、事例、エピソードなど、質的データを用いて理論構築を試みる動きが出てきている。客観的に測定可能な数量的データで保育や教育の事象を捉え、一般性と実証性を求めることが当然視されていた頃を考えると、今日の状況は目を見張るものがある。

私（中坪史典）は、この15年間、質的研究方法を用いた研究を行ってきた。その私が実感する質的研究のもう一つの魅力は、保育・教育現場との親和性である。質的研究は、研究者の研究方法だけでなく、実践者（保育者・教師など）が自分の実践を振り返ったり、日々の実践から問いを立て、仮説を生成したり、検証したりするための道具としての可能性を秘めていると思われる。例えば、KJ法は、研究者が観察や記録を通して情報を収集し、分類・統合するためだけでなく、実践者が自らの実践記録を分析する道具としても機能する。つまり質的研究は、実践者にとっても有益なメソドロジーなのである。

今日、保育や教育の現場では、「自らの実践を見直す」「実践の中で気づきににくい面に目を向ける」など、実践者の専門性向上が求められている。その一方で、実践者からは、「実践研究の進め方が分からない」「テーマを掘り下げるに至らない」など、実践研究を行うことの難しさを指摘する声を聞くことも少なくない。ところで、実践者の専門性向上の鍵となる共通のテーマとして、ここでは、子ども理解を掲げることとした。保育・教育の営みは、実践者の子ども理解によってその有り様が大きく異なると言われるほど重要であり、例えば、保育者は、日々の保育の中で<その子>とのかかわりを通して、自分の中の<その子>理解を常に更新（update）し続けていると言われる。この点を踏まえるとき、実践者が子ども理解を深めることは、専門性の向上に結び付くのではないだろうか。

改めて、本企画趣旨を整理する。本シンポジウムは、実践者の子ども理解のメソドロジーとしての質的研究の可能性を探ることを目的とする。このシンポジウムに参加した実践者や、将来実践者を目指す学生が、「是非自分も、質的研究方法を用いて実践研究をやってみたい!!」と思うような議論ができると幸いである。そして、このシンポジウムを通して、実践者の方々が実践研究を楽しめること、それぞれの園や学校の中で、チームとして子ども理解を深めたいという気運が高まること、質的研究への興味が広がることを期待する。さあ、みなさん、質的研究法を用いて、「無理なく」「楽しく」「継続的に」、実践研究を行い、子ども理解を深めようではありませんか!!

<話題の概要>

(1) 柴山真琴（大妻女子大学）：子ども理解のメソドロジーとしてのエスノグラフィー

エスノグラフィーの手法は、現地の人々と直接交流しながら人々の日常世界や意味世界を掴むことを通して、当事者の視点から異文化を理解するための手法として、文化人類学者のマリノフスキーによっ

て開発された手法である(Spradley,1980)。その後、社会学でも都市研究の手法として導入されるに伴い、エスノグラフィーの手法は、自国内の多様な背景を持つ人々の日常実践や学校における内部過程を解明するための有効な質的調査法となった。社会的実践の中でも特に保育・教育実践は、内外のエスノグラファーたちが研究関心を向けてきたフィールドである。

エスノグラフィーの手法では、参与観察・インタビュー・文献収集・質問紙・調査日誌の作成など、複数の技法を組み合わせるが、「参与観察」はエスノグラフィーの中核的な技法である。これまでに心理学でも多数の観察法が開発されてきたが、私見では、1)当事者の視点からの人々の行動の意味の理解、2)「参与」と「観察」の緊張関係を内包した複眼的な観察、3)実践に脈打つ文化的規則への注目、の3点に参与観察ならではの特征があると考えられる。こうした特徴は、子どもの視点から保育・教育実践を捉え直したり、実践を枠づける暗黙の前提や習慣的行為を意識化したりするなど、実践者が専門性の向上を目指す姿勢とも親和性があると思われる。この点で、エスノグラフィーの手法(特に参与観察)は、単に研究者の研究手法としてだけでなく、実践者の子ども理解の方法としての可能性も有するのではないだろうか。

本シンポジウムでは、(1) エスノグラフィーの定義と特徴、(1) 実践者の子ども理解の方法としてのエスノグラフィーのメリット、(3) 実践者がエスノグラフィーの手法を用いる際の具体的手順の例、(4) 実践者にとってのエスノグラフィーの有用性について報告するとともに、(a) 実践者の研究ツール(子ども理解の方法)としてのエスノグラフィーの課題は何か(b) 実践者と研究者を架橋する媒体としてのエスノグラフィーの課題は何かについて、話題提供したい。

(2) 得丸さと子(日本女子体育大学)：子ども理解のメソドロジーとしての TAE

TAE (Thinking At the Edge) は、うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法である。現象学の流れを汲む哲学者でもあり、心理臨床家でもあるユージン・ジェントリンが、夫人のメアリー・ヘンドリクスと共同開発したものである。ジェントリンは、TAE を「何か言葉にしようとするのだが最初はぼんやりとした『からだの感覚』としてだけ浮かんでくるものを、新しいタームを用いてはっきりと表すための系統だった方法」としている。

ところで、こうした TAE の考え方や研究手法は、保育者や教師が日々の実践に対して、うまく言葉にできないけれども知っている感じ(暗黙知、身体知)を言葉(形式知)にし、相互に共有することで、実践者の専門性向上も寄与するように思われる。眼前の子どもとの関係において、「うまく言葉にできないけれども知っている何か」で「言葉にされたがっている何か」をテーマとして掲げ、個々の保育者や教師がこれらを掘り下げてみることで、実践者の子ども理解に新しい展望をもたらすことができる。そうであるならば、TAE もまた、単に研究者の研究手法としてだけでなく、実践者の子ども理解の技法としての可能性も有するのではないだろうか。

本シンポジウムでは、(1) TAEの定義と特徴、(1) 実践者の子ども理解の方法としてのTAEのメリット、(3) 実践者がTAEの手法を用いる際の具体的手順の例、(4) 実践者にとってのTAEの有用性について報告するとともに、(a) 実践者の研究ツール(子ども理解の方法)としてのTAEの課題は何か(b) 実践者と研究者を架橋する媒体としてのTAEの課題は何かについて、話題提供したい。

実践としての身体

企画	『質的心理学フォーラム』編集委員会	
司会	五十嵐靖博	(山野美容芸術短期大学)
話題提供	河野哲也 #	(立教大学)
	重村朋子	(日本医科大学)
	上淵 寿	(東京学芸大学)
指定討論	サトウタツヤ	(立命館大学)
	砂上史子	(千葉大学)

【企画主旨】

身体は、物理的存在としてはいうまでもなく、生態学的存在、そして社会文化的存在といった様々な様態として存在する。まず物理的存在として、私たちはモノとして一定の空間を占有し、時間的が経つにつれて、その占有空間も変わる。たとえばひげが伸びることは、私たちが占有している空間が広がることを意味する。また、私たちは周りの生物学的・社会的環境と関わりあいながら生きている。

一方、行為に目を向けると、様々な形で実践し続けることによって、身体は存在し続けるといえる。グラウンドを走り続ける運動選手の肉体や存在は、「走る」という実践を通して浮かび上がり、それを私たちは認識し、理解するのである。すなわち、身体は一種の実践と言うことすら可能ではないか。

さらに、古風な謂いが敢えて許されるのなら、私たちは身体という媒介によって、世界を知るのであり、世界は身体を通じて私たちを知るのである。身体を脱いで見出される「アイデア」などないとすれば、身体の実践や、実践としての身体の中にのみ感受される物事を拾い集めていくしかない。この点からも、質的研究において身体を検討することは十分価値があると考えられる。

このように身体は私たちの存在・実践・理解に欠かすことができない。しかし身体をただ持ち上げるだけで良いのか。ここで改めて立ち止まる必要はないか。私たちが質的研究において身体を中心に据えた時に、何が表せ、また何が表せないのかを丁寧に考える必要はないだろうか。

そこで、質的研究のアプローチから身体を眺め、考察する時に「何が言えるのか」、または「何が言えないのか」、あるいは身体から始めて、質的研究を捉え直す時に「何が語れるのか」、あるいは「何が語れないか」。このような問題について改めて考えてみたい。

実践としての身体：「心理学のテーマとしての身体」 河野哲也

本発表では、(1) どのような意味において、心の諸科学にとって身体が重要なのか、(2) 身体性は心理学のテーマでありうるかどうかについて論じる。

近代哲学は、心身を分離して、心を身体よりも優越したものとして捉える考え方に立ってきた。しかし 20 世紀後半になると、メルロ＝ポンティに代表される現象学が「意識は本質的に身体的である」と主張するようになり、古典的計算主義以降の現在の心の哲学では、心は身体によって状況に埋め込まれていることが共通理解となってきた。認知科学やロボティクスにおける構成論的アプローチは、身体と心の間にパリティが成立することを指摘し、身体に関する新たな知見をもたらしつつある。しかしながら、まだまだ現代哲学、及び、現代の心の科学が十分に光を当てていない身体性が存在する。たとえば、身体の「見られる」受動的側面であり、それは化粧や被服、身体変工などに表現される。第二に、道具、改変環境、装置、建築物、都市などの延長した身体である。第三に、妊娠や生理のような女性的経験や加齢、クイアなど、これまでフェミニズムが扱ってきた身体性である。第四に、政治学や社会学

が指摘する身体と権力の関係である。これらはすべて心理学においてもさらに追求されるべきテーマである。

近代哲学が身体の忘却してきたのは、心を能動的な働きとして理解していたからである。そして、その「心の働き」はしばしば社会規範によって定義される。「考える」「記憶する」「工夫する」といった日常的な心理言語は、「貯金する」「訴訟する」「就職する」などといった言葉と同じく、社会によって規範的に定義された振る舞いを指している。身体性に着目するかどうかは、行動を微視的に見るか巨視的に見るかというスケールの違いにあるのではない。身体性が心理学にとって重要であるかどうかは、ある人の行動を社会的規範に則った一種の記号のようなものとして捉えるのか、それとも、ある人の行動の意味は本質的に確定されず、絶えず多義性と多文脈性を孕んだものとして捉えようとするかの違いにある。発表者は、最終的に行動に関する本質主義的な定義はできず、あらゆる行動は家族的にしか類似していないと考えるため、心の研究は身体性を抜きにしては不可能であると主張する。

「脳死」からみた身体 重村 朋子

脳死という時の身体は極めて解剖学的、生物学的な概念である。脳死状態の身体は“静止している身体”であり、その身体の主体者自らは実践することはない。それにも拘わらず我々はそこから影響を受けている。脳死という状態はその馴染みない死の特性から我々に認知の不一致、不確実性を引き起こさせる。「脳死」と言われた時に機械論的な身体の見方、またその主体者から離れて身体だけに焦点化した身体の見方が生じてくる。脳死を経ずしての死別では、その喪失のプロセスに亡くなっていく人の存在そのものと自己との関わりに物語が淀みなく流れていく。それに対して脳死と思われる説明がなされる時に、そこに一瞬人格をもった対象という視点から、身体そのものに対しての視点に移り、そしてまたその対象の存在全体にと立ち返っていくプロセスであり、そこにやや混乱が見られる。脳死の説明から臓器提供に至るテーマの中で、我々は身体がその主体者の人格や自己との関わりなどから離れた「もの」としての身体という視点が浮かんでくる。「もの」としての視点は主体者とは切り離され、他者が扱い得るニュアンスを含む。しかしその「もの」としての身体の見方は、まもなく主体者を含んだその人として統合されて認識されていくことが見られた。身体だけとして人を見ることへの困難さ、抵抗があると考えられる。

当然ながら我々は身体があって初めて他者を認識する。「どんなに心の中に居るといっても、いつかあの世であえると信じていても、今触れないのは何とも辛い」というように身体なくしてはその人はいない。しかしその身体は身体だけではなく、その人そのもの、過去の自己との関わりを含んだ全てであるのではないだろうか。

実践としての身体と実践としての身体の見方 上淵 寿

身体とは、まずモノとしてあるだけではなく、生き物としても、そして社会文化的な事物としても存在し続けたり、存在しなくなるものということができる。

そして、私たちが行為や実践をすることによって、身体は存在する、すなわち、身体は一種の実践ということもできる。さらに、私たちは、身体をもって世界を認識し、世界は身体から私たちを知るのである。質的研究でよくいわれる、研究者自身が研究のツールだという謂いからすれば、身体は欠くことのできないツールである。このように身体は私たちにとって必要不可欠な事物である。ゆえに、私たちは質的研究をするにあたり、身体をテーマとして、よく考える必要があるのではないか。

本発表では、まず行為、活動、実践として身体が立ち現れ、環境と相互作用することを強調する。そして、「身体の見方」をより広義に解釈し身体同士の関わりを検討する。最後に前半で主張した身体の見方の重要性の提唱をあえて論駁し「身体の見方」にともするとみられる「基礎づけ主義」を批判する。

語りにおけるポジショナリティと傷つきを語る／聴くための時間

：質的心理学における「語り」研究の地平（2）

企画	日本質的心理学会研究交流委員会
共催	日本質的心理学会震災 WG
司会	徳田治子（高千穂大学）
話題提供	宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科） 一丸藤太郎（広島国際大学）
指定討論	野坂祐子（大阪教育大学） 小嶋由香（安田女子大学）

企画趣旨

生命や身体、人間としての尊厳が脅かされる経験に言葉を与えることは、容易なことではない。ある体験が語られることと語られないことの間にわたしたちは何を見だし、どう関わっていけばよいのだろうか。本シンポジウムでは、昨年12月に東京大学で行われた『傷つきを語るの意味と聴くという経験：質的心理学における「語り」研究の地平』に連なる連続企画として、トラウマや傷つきを語る／聴く行為におけるポジショナリティの問題（語りの空間）、および、沈黙や生成、変遷といった語りをめぐる時間性（語りの時間）の問題（語りの時間）に焦点をあて、傷つきを語る／聴くという営みの複雑さとそこに近づくための方途について検討する。語り研究の発展と今後の展開を見据えたとき、語りの問題を語り手と聴き手双方の問題から捉え直し、様々な実践に基づいた臨床の知を共有していく営みが必要とされるだろう。

シンポジウムの前半では、長年、トラウマをめぐる臨床現場でさまざまな知見を重ねてこられた2名の先生にご登壇いただき、傷つきを語る／聴く行為をめぐるポジショナリティと時間性（語りの時間）の問題について各々の臨床経験ならびに研究活動を通して得た知見についてお話しいただく。シンポジウムの後半は、若手研究者からの質疑応答という形で指定討論を行い、より対話的な流れのなかで、傷つきをめぐる語りの問題について考察を深めていきたい。

話題提供発表概要

傷のそばに佇む ～「環状島モデル」をもちいて～

一橋大学大学院社会学研究科 宮地尚子

傷を抱えた人にとって、語ることは簡単ではないし、語ることがかならずしも望ましいとも限らない。周囲の人に望むことは、ただそばにいてもらうことだけかもしれない。そのことを理解しながらも、支援者にとっては、語らない当事者のそばにただいることもまた難しい。

理想の支援を、「具体的には何か知らないけれど、何かつらいことを抱えているとわかってくれていて、ただそばにいてくれる、そして話をする気になったらいつでも聴いてくれる、わかろうとしてくれ

る」ということだと、とりあえずしてみよう。そんな支援はどうすれば持続可能だろうか。

本発表では、まず、トラウマの語りをめぐるポジショナリティの問題、および時間性（沈黙、語りの生成、変化など）について、「環状島モデル」をもちいて整理する。そして、トラウマについて語る／語れない／語らない、聴く／聴けない／聴かないことと、わかる／わからない、わかってもらえている／わかってもらえない、ということとの関係性を探る。

環状島とは<内海>のある島であり、私が被害者支援にあたる上でサバイバル・マップとして作ったモデルである。内海とは、沈黙の空間であり、時間である。内海に当事者や支援者、研究者はどう向かい合うのか、それぞれの位置や困難、知や学問のもつ役割について、みんなで考えてみたい。支援者や研究者自身の傷つきについても言及したい。

いつも「そこにあり」ながら、「語られることもなく、聴かれることもなかった」被爆体験

広島国際大学 一丸藤太郎

広島で生活してきた 40 年間、被爆者はいつも私の横にいた。しかし、被爆体験のかけらが思わず彼らの口からこぼれてしまうことがあるものの、決して正面から被爆体験を語ろうとすることがなかった。また、彼らには、ほんの少しでも立ち入ることを許さない強固な壁があった。広島での 30 余年にわたる心理療法の実践で出会ったクライアントの中には、被爆体験をした人、身近な人が被爆をしている人、被爆二世の人など、被爆体験となんらかの関わりのあった人が間違いなく多くいたはずである。それにもかかわらず、これまで心理療法で被爆体験、被爆体験の影響、被爆二世であることを語り、それを共にわかり合おうとする機会は全くなかった。日常生活では、いつでも被爆者、また被爆体験のかけらがそこにあったのにもかかわらず、心理療法で被爆体験を全く扱ったことがなかったというのは不思議なことだ。被爆体験のある、あるいは身近に被爆者がいるクライアントだけでなく、心理療法家自身がまるで被爆体験などなかったかのようにして生きてきたのだ。被爆後 60 余年を経て今や高齢となり、死を意識するようになった被爆者の中には、機会が与えられると体験を語り始めたり、聴いてくれる人が共にいることで心の荷のほんの一部を下ろそうとしているかのようなのである。被爆者、被爆に関係する人、被爆体験のない者にとって、被爆体験を語り（あるいは沈黙し）、聴く（あるいは耳をふさぐ）というのはどのような意味があるのだろうか。

質的心理学の東日本大震災—『質心フォーラム』緊急特集連動シンポジウム

企画 『質的心理学フォーラム』編集委員会・日本質的心理学会東日本大震災 WG
司会・コメンテーター 山田富秋 (松山大学、『質心フォーラム』編集委員)
ハッ塚一郎 (熊本大学、『質心フォーラム』編集委員、震災 WG 委員)
話題提供 矢守克也 (京都大学、震災 WG 委員)
金丸隆太 (茨城大学)
白柿 綾 (特定医療法人和ホスピタル)
伊藤哲司 (茨城大学、震災 WG 委員)
引地達也 # (元共同通信記者)

企画趣旨

東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

未曾有の大災害にあたり、日本質的心理学会の会員も、被災各地で支援の活動にあたっています。

『質的心理学フォーラム』では、会員による支援の取り組みを広く紹介して情報交換を行うとともに、支援活動の一助ともなることを期して、本年末刊行予定の第3号(最新号)に緊急特集「質的心理学の東日本大震災」を掲載します。あわせて、質的心理学会のメールマガジン 78号(2011年4月)から81号(同7月)で、特集原稿の先行掲載を行いました。

また、「理事長からのメッセージ」(本学会ホームページを参照)を具体化するための一歩として、東日本大震災ワーキンググループが設置されました。『フォーラム』および、『質的心理学研究』『研究交流委員会』など、本学会の各ユニットが連携して活動しています。

今回のシンポジウムは、『フォーラム』の上記特集をベースに、震災ワーキンググループも共催に加わって企画しました。本学会の会員をはじめとする多彩な支援の活動を報告、紹介し、お互いの交流と情報交換を行うことを、まずは目的としています。さらに、そこでの対話を通して、未曾有の大災害における質的心理学の役割や課題、今後の可能性を検討できればと考えています。

シンポジウムでは、上記緊急特集の執筆者をはじめ、それぞれのかたちで大震災とかかわり、活動を続けてこられた方々にご登壇いただきます。多くのご活動やご経験、対話と見聞の詳細をお話しいただいて、まずは大震災へのさまざまな取り組みを交換、共有したいと思います。そのうえで、大震災とのかかわりや、経験を記述することの意味、質的心理学への提言や課題などについて、フロアもまじえて討議を行いたいと思います。

話題提供者の概要

矢守克也（京都大学、震災WG委員）

岩手県野田村を拠点とする「北から」の支援を開始、遠隔地からの連携した支援活動「チーム北リアス」へと発展している。

金丸隆太（茨城大学）

臨床心理士として、震災直後から茨城県下の被災地をまわり、避難所の子どもたちをはじめとするケアの活動にあたってきた。

白柿 綾（特定医療法人和ホスピタル）

看護師として、宮城県石巻市の福祉避難所に滞在し、ライフラインが途絶した状況下、緊急救援期の支援活動に従事した。

伊藤哲司（茨城大学、震災WG委員）

国内外の被災調査にあたった経験を踏まえ、現在は主に、被災した茨城県東茨城郡大洗町の住民と連携して復興への取り組みを進めている。

引地達也#（元共同通信記者）

「小さな避難所と集落をまわるボランティア」と題した、被災各地を歩いて個人としての支援と対話を続ける活動を行っている。

「個性」の質的研究一個をとらえる、個をくらべる、個とかかわるー

企画者	渡邊芳之（帯広畜産大学） 森 直久（札幌学院大学）
司会者	渡邊芳之（帯広畜産大学）
話題提供者	矢守克也（京都大学） 大橋靖史（淑徳大学）
指定討論者	森 直久（札幌学院大学）

企画趣旨

このシンポジウムは、「質的心理学研究」第13号の特集として投稿を募集している「『個性』の質的研究一個をとらえる、個をくらべる、個とかかわるー」と連動して、質的研究の研究対象・研究テーマとしての「個性」について、また個性研究の必要性や研究方法について考えようとするものである。

個性とは、「多数の『個』の中で、ある『個』だけが特有に示す特徴や構造」と考えることができる。個性は単なる「個体差」や「個人差」ではなく、その個に特有の環境や、個に特有の時間の流れを基盤に生み出された「構造」とあるという点で、質的研究法によるアプローチをもっとも必要とする研究対象といえる。個性の理解は、単に個性の心理学的理解を促進するだけでなく、教育や心理臨床、医療、福祉や行政などの現場で個人にかかわり、個人によりそう実践にも役立つはずである。

しかし、20世紀の心理学において個性は、「ある個人変数の尺度値に示される個人差」や「尺度値による序列上での個人の位置」に還元されてしまった。そして、心理学における「個性の研究」は、ランダムサンプリングによって個をとりまく環境や個に特有の時間を相殺したデータから、「個人変数間の一般的関係を解明する」ことを研究の中心とし、現在では心理学の中で量的方法にもっとも支配される研究領域となっている。そこには「個人変数」はあるが「個人」はいない。

「個に特有の環境や個に特有の時間と結びついた構造」としての個性を理解するために、質的心理学がこれまで発展させてきたさまざまな研究方法は、どの程度の力を発揮してくれるのだろうか。新たな方法が必要になるのだろうか。それはいったいどのようなものか。また、「一般化の探求」こそが研究であり、個に向かう研究は研究と言えるのかとの見解は、質的心理学外では(内でも)依然根強い。これらの人々に対して、説得的な研究とは一体いかなるものとなろうか。いや、一般化と個性の探求は、相反するものではないのかもしれない。では、どのように二つの志向は整合するのか。個性の研究は、質的心理学にさらなる展開をもたらしてくれるものと確信している。そして、多くの質的研究者とともに、新たな扉を開くことができると期待したい。

このシンポジウムでは、まず「個性」が無視できない要素となるような現場と結びついた研究や、実践を行ってきた話題提供者2人から、「個性」をキーワードにした話題提供を受ける。これらは、先に記した疑問の完全な解答ではないかもしれない。しかし、個性の研究を考える上で、重要な問題提起となるであろう。聴衆は、どうかこれらに対応して、様々な意見を述べてほしい。フロアからの意見を求めながら、「個性」の質的研究の姿を深く探求していきたい。そして、「質的心理学研究」の特集にふさわしい研究論文が、どのようなものであるかを示すことができればと考えている。

話題提供の概要

個性をとらえるための2つのアプローチ（矢守克也）

個性を、特定の個別対象—たとえば、個人や社会—の本質と考えてみたい。これをとらえる方法は、大きく分けて2つあるのではないか。「平均化」と「純粋化」である(大澤, 2005)。ある個人の個性は、さまざまな場面に共通して認められる行動特性によっても(「平均化」)、生涯最大の難局といった特異な場面におけるふるまいによっても(「純粋化」)、表示されうる。社会も同様である。たとえば、高度福祉国家の本質は、多くの福祉重視の国家群が示す平均的特性によっても表現されるが(「平均化」)、他に類を見ない極端で先鋭的な福祉国家のうちにこそ見いだされると考えることもできる(「純粋化」)。卑近なところでは、似顔絵を考えてみればわかるように、ある対象を極端化しデフォルメすることによって、かえって、対象の本質が、つまりその対象の個性が何であるかがよくわかる場合もある。本プレゼンでは、個性をとらえるためのこれら2つのアプローチを比較しながら、個性の質的研究のあり方について考えたい。このとき鍵になるのは、おそらく「変化」である。なぜなら、個性は、静的な状態よりも、むしろ動的な変化のうちに顕現するからである。ちょうど、ある人物の貌の特徴が、泣いたり笑ったりといった動的な動きの中にこそあらわれやすいように。

関係の中における個のふるまい（大橋靖史）

私は社会の中に生きる個人である。社会の中には、人々の間に共有されたエスノメソッドが存在し、私を含め個々人のふるまいは、規範的にエスノメソッドに基づき営まれている。したがって、暗黙の社会規範としてのエスノメソッドを見出すことで、社会に生きる人々の営みは明らかにされていくだろう。しかしながらその一方で、私たち個々のふるまいにはその人らしさとしき言いようがない、独自なふるまいが存在することもまた事実である。そこには、エスノメソッドに対し、パーソナルメソッドとでも言える特徴が存在する。こうしたパーソナルメソッドという観点から私たちのふるまいを考えると、異なるパーソナルメソッドを有する者同士のふるまいは、互いに食い違いを見せながら、部分的に接触しながら進展していくことが考えられる。言い方を変えれば、食い違いを見せながら部分的に接触しながら進展していく、動的なやり取りの中にこそ、パーソナルメソッドは見出される。たとえば冤罪が疑われる被疑者と取調官とのやり取りではしばしば、両者が互いのパーソナルメソッドの違いに気づかぬまま、コミュニケーションが進展し、結果として、被疑者の体験に基づかない自白らしきものが生み出されることがある。そこでは、両者のやり取りの特徴を微細に分析することで、やり取りの中で被疑者や取調官が繰り返しその人らしいふるまいを見せる、そのふるまいの特徴(動的スキーマ)が明らかになる。話題提供では、エスノメソッドロジーや会話分析といった、社会の成員が規範としてもつエスノメソッドを明らかにする研究と、スキーマアプローチ(大橋ら, 2002)のような、社会の中における動的な個のあり方としてのパーソナルメソッドを明らかにする研究とが、相互にどのような関係にあるかについて考えてみる。さらにそうした考察を通し、個をとらえる個性の質的研究の可能性について考えるとともに、社会と個の関係についても再考を試みたい。

神経難病とともに生きる病者の在宅療養文化の記述と転用可能性

一病者の生を支える多層的支援システムの実現に向けて

企画者 日高友郎（日本学術振興会特別研究員（立命館大学大学院文学研究科））
司会者 滑田明暢（立命館大学大学院文学研究科）
話題提供者 日高友郎（日本学術振興会特別研究員（立命館大学大学院文学研究科））
安達俊祐（立命館大学大学院応用人間科学研究科）
中村純明（日本 ALS 協会広島県支部）
岡林清司（コールメディカルクリニック広島）
市川貴子（日本 ALS 協会広島県支部／障害者生活ケア Links 広島）
指定討論者 伊藤哲司（茨城大学人文学部）

【企画趣旨】

現在、医療の文脈から離れた「自宅」（在宅）という場で療養を行う病者が増加している。在宅療養のなかで、より充実した生を営むために、患者は周囲の介護者との連携・交渉を行いながら、独自の支援の技法や技術を展開してきている。こうした独自の工夫—在宅療養「文化」—を記述し、転用可能なものとしていくことは、他の病者やフィールドの活動を支える上で極めて重要な心理学上の課題でもある。

本シンポジウムでは、特に深刻な症状を有する進行性の神経難病である筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic Lateral Sclerosis, ALS）を対象とし、研究者・ALS 患者・支援者という多様な立場からの話題提供を行う。指定討論には質的研究法を専門とする研究者を迎え、在宅という場において患者・介護者らが構築してきた療養文化の記述が、心理学的にどのような意味と価値を持ちうるかという点について、議論を行う。

【在宅療養の場のライフ・エスノグラフィー生の記述と実際の支援の連結に向けて】（日高友郎）

本報告では、在宅療養中の ALS 患者宅へのフィールドワークを通じ、現場で培われてきた独自の生活上の技法を紹介する。症状の進行という不可逆的変遷に直面する中で、ALS 患者自身がどのように病いを捉え、支援を要請・構築してきたかという点に着目し、在宅療養の場のエスノグラフィの重要性を、「転用可能性」という視点から論じる。

【ALS 患者の介護場面における介護者の選択肢の提示と、それに伴う教育活動の可能性】（安達俊祐）

ALS 患者の在宅療養の場において、介護者が選択肢を提示するということは非常に重要となる。例えば、介護者が患者に呼ばれた際に、その要求をあらかじめ予想したうえで「吸引ですか？」「ベッドの位置ですか？」というように選択肢を提示していく。この行為は、患者がコミュニケーションエイド（コミュニケーションを補助する道具）を用いる労力を低減させるうえで非常に重要な役割を果たしていると考えられる。

また、この相手の要求を予想するという行為を応用すれば、ALS 患者自身が介護者に対して教育を施すことの可能性が出てくる。通常教育では大量の情報伝達が必要となるが、介護者が患者の言いたいことを予想出来れば、最低限の情報の伝達のみで教育が可能となり、患者自身が介護者に介護方法等を教授することが出来るだろう。今回は実際に介護者に文字盤の使い方を教授している ALS 患者の介護現場の観察や、介護者へのインタビューを通して、選択肢の提示の実際の様子や方法、また教育の可能性について論じていく。

【ALS が生きられる社会はすべての人が生きられる社会】（市川貴子）

私は、人工呼吸器をつけて約 10 年間病院で入院生活を送った、ある女性の ALS 患者さんの話をしたいと思います。今回のテーマは「在宅」ということですが、彼女がなぜ退院できなかったのか、いや、なぜ

退院させてあげることができなかったのか、三回忌も過ぎ、その辺のことを私なりに考えてみました。

彼女は、重度障害を負った夫と、認知症の母の二人の介護を、何のサービスも入れずに、一人で背負っていました。当時福祉は措置の時代でしたが、サービスを利用しなかったのは、制度のことを全く知らなかったからです。ここにも大きな問題があります。

診断を受けてから一年後、彼女は気管切開による人工呼吸器を装着しました。病院は最期まで受け入れる約束をしてくれていましたが、付き添える家族のいない彼女は、独り、不安に押しつぶされながらナースコールを押し続けるしかありませんでした。それは、日ごとかわる看護師に対応しきれるものではありません。自費で介助者を雇い、訓練し、何とかコミュニケーションをとっていました。

2000年に介護保険制度が導入されてからは、40歳以上のALSは特定疾病としてサービスを受けることができます。しかし、進行したALSでは全く「焼け石に水」程度にしかありませんし、ケアマネジャーには荷が重すぎます。その後、障害者福祉の制度は、措置から支援費、そして現在の自立支援法に到り、近い将来障害者総合福祉法へと変わる見通しです。広島市では、24時間介護も可能になり、入院時のヘルパーの付き添いも、条件付きながら認められるようになりました。来年度からは、ヘルパーによる吸引・経管栄養が法的に認められます。彼女がもし、在宅で、慣れたヘルパー達に支えられながら、療養生活を送ることができたなら、どんなにか安心して、全く動かない身体であっても、彼女の持てる才能をもっともっと発揮してこの社会に貢献できたであろうと、残念でたまりません。

まだまだとても充分とは言えませんが、あらゆる手段を尽くして、使える制度はなんでも使い、どんどん声を発して、外に出て行きましょう。ALSは日々失うことばかりですが、そうすれば得るものもきっと大きいと私は信じています。総合福祉法の骨格提言が出されましたが、それを実現し、我が物にするのは今ではないでしょうか。

【在宅療養において、快適さを求める自分としての捉え方】（中村純明・岡林清司）

私自身がALS患者であるためか、テレビなどのマスメディアから発信されるALS関連の情報を見る機会が多くなりました。しかし、どのシーンを見ても、かなり病状が進行した患者さん(人工呼吸器を装着している。又は装着していわゆる寝たきり状態)を目にすることが多く、自分自身の将来像も、そんな映像に重ねてしまいます。特に発症当時の不安感や絶望感は経験した人にしか分からない悲慘なものでした。そこから、這い上がってきた私の経験が少しでもお役に立てばとの思いで、話題提供をさせていただきます。

この病気は、病状の進行速度が個々それぞれ異なるという特徴を持っていますが、最初に診断が下った時に受ける衝撃的なショックは、ALS患者の誰しも共通なる苦悶な道程の出発点だと思います。その出発点からスタートして、個人差はありますが、なるべく早い内に「気持ちの切り替え」が出来るかどうかで、その後の無期限の辛い闘病生活に影響を及ぼすことは必至であろうかと思います。

「気持ちの切り替え」をするにあたっては、何点かの必要条件があると自分なりに捉えています。①生活面での不安解消からの安心感を得る、②身体的不安解消からの安心感を得る、③家族、支援者達の理解と協力、④自分の趣味、嗜好を始める、⑤ペットなど、癒しを感じる物との共存、⑥良い意味での「開き直る気持ち」。

在宅療養において快適な生活を維持するには、こういった項目全てが揃うことは、中々容易なことではありません。当然ながら、患者さんの病状の進行具合で制限されることがありますから、患者さん全てには当てはまらないかも知れません。しかし、大切なことは、自分で少しでも快適に在宅生活を過ごすために、落ち込んでいる自分自身の気持ちをポジティブな方向に導く努力も必要なことです。焦らずに少しずつ自分なりの快適さを探し当てて、自分なりの在宅療養生活を過ごしていきましょう。病気になって、初めて分かった「大切なこと」もあるはずです。

司会はインタビュー法による調査を専門とする滑田明暢がつとめる。

Evidence から“当事者としての家族”支援を考える

企画者	河原智江	(横浜市立大学大学院医学研究科)
	西村ユミ	(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
司会者	西村ユミ	(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
話題提供者	河原智江	(横浜市立大学大学院医学研究科)
	池田真理	(東京大学大学院医学研究科)
	南山浩二	(静岡大学大学院人文社会科学研究所)
指定討論者	西村ユミ	(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

<企画趣旨>

企画者らは、日本質的心理学会第7回大会において、“対人サービス専門家による「大事なひとを喪くした家族」支援を再考する”というテーマにてシンポジウムを行い、家族のとらえ方や当事者としての「家族を理解する」枠組みとともに、「支援するとは何か」ということを検討した。

今年度は、昨年度に引き続き第2弾として、“Evidence”をもとに、以下のことを議論したいと考えている。

- ① 家族が受けとめていることやニーズをより現実的に、また、家族のありのままをとらえるとはどういうことかを考える。
- ② ①を踏まえ、家族支援のために、登壇者及び参加者それぞれの専門性の立場からの“視座”を考える。

なお、ここで言う Evidence とは、企画者らの研究から得られた研究成果の一部であり、当事者としての家族の意向などを理解するための素材とする。

本企画シンポジウムでは、話題提供者は河原、池田、南山の3名が、指定討論者は西村が担当する。

<各話題提供者の概要>

1. 「Evidence から家族をとらえる必要性」 河原智江

Evidence について検討するときには、「なぜ Evidence なのか?」「Evidence がすべてなのか?」という指摘がある一方、「Evidence がなければ成り立たない」といった正反対の議論もあるだろう。私は、どちらか一方の立場ではない。しかし、【有効な】家族支援を行うには、“Evidence”を踏まえておくことが必要なのではないかと考える。例えば、家族が大事にしていること、あるいは、対人サービス専門職に対する気持ちなどは、ナラティブに着目した調査であろうと、アンケート調査であろうと、<丁寧に>調査を行うことで、その本質にせまることができると思われる。

つまり、Evidence を知る（理解する／検討する）ことで、家族との関係のとり方や問題となることについての適切なアセスメントにつながり、そのことが【有効な】家族支援を行う基盤になるのではないだろうか。

2. 「家族の関係と産後の精神状態の予測～妊婦・産婦の持つアタッチメント・スタイルから～」池田真理

妊娠・出産は、喜ばしい出来事である一方で、新しい適応を強いるといった意味では家族にとって大きなライフイベントの一つである。ここでは、妊婦のアタッチメント・スタイル（AS）に着目した研究を紹介する。

人は幼少時に養育者との間で培われた AS を用いて養育者以外の他者とのさまざまな人間関係を作るようになる。妊婦が母親になるにあたり、夫を含めた周囲との人間関係を築きあげる能力には、この AS が影響していると考えられる。また、同じ AS に分類されても、産後の精神状態や反応が異なることについて検討を進めてみると、他者との具体的なサポート関係（エビデンス）が浮かびあがる。産科領域の専門職が、妊婦の持つ AS を理解することで、産後うつ予測が可能となり、また、AS に添った支援を提供することが可能となるのではないかと考える。

3. 「「家族」への〈まなざし〉の変遷とその含意～精神障がい者家族支援に焦点をあてて～」南山浩二

精神障がい者（とりわけ統合失調症と診断された人々）の家族に対する専門的支援における「家族」の位置は、脱施設化・コミュニティケアの進展、生物医学や精神薬理学などの発達、家族の組織化と社会運動の展開などを背景に、おおむね、〈病因としての家族〉から〈教育の対象としての家族〉〈生活者としての家族〉へと推移していくこととなった。こうした推移は、家族の脱スティグマ化を伴うものであったのであり、家族にとって歓迎されうるものとも理解されたが、今日、その支援の有り様もさらに変容しつつある。専門家による家族支援を、再考しようとする場合、専門家の「家族」への〈まなざし〉を、「家族」を一定の有り様へと規格化していく力をもつものとしてもとらえる必要がある。

本報告では、こうした立場から、精神障がい者家族支援について概観し議論することとしたい。

<指定討論者の概要>

「Evidence から家族の何をとらえるか（あるいは、Evidence から見えてくること）」 西村ユミ
～コメントのポイント～

- 専門家のその専門性によって関心の視座は異なり得る。その視座の相違点と類似点を整理する。
- 本発表における、家族を理解するため、及び家族ケアについて検討するための研究成果（Evidence）の射程について整理する。これをもとに、Evidence に基づいた家族理解や支援の可能性と課題を提案したい。
- 研究成果がいかに具体的な「ケア」につながり得るのかについて検討したい。

「＝（イコール）」Evidence となる研究成果は、成果として定式化されても、その活用方法については、あまり論じられていない。この研究成果の活用方法の多様なあり方を検討したい。

<参考> ケア研究会

企画者の河原・西村は、平成 7 年より、当事者の経験の意味づけからケアを考えていくため、「ケア研究会」を立ち上げ、平成 18 年より、現在のメンバーからなる看護学、社会福祉学、心理学などの幅広い立場から具体的な検討を進めている。

本企画シンポジウムも「ケア研究会」における研究の一環として行うものである。

メンバー：河原智江・西村ユミ・池田真理・林由美・渡辺陽子・塩田藍

連絡先：carekennkyukai@gmail.com

農と食と心理学

企画	石井宏典	(茨城大学)
司会者	石井宏典	(茨城大学)
話題提供者	木下寛子	(九州大学)
	菅野幸恵	(青山学院女子短期大学)
	石井宏典	(茨城大学)
指定討論者	浜田寿美男	(奈良女子大学名誉教授)

企画趣旨

昨年度の大会において「農と心理学」というシンポジウムを開催した。本企画は、その反響を受けて立案された。前回は、近代後一貫して就業人口を減らしてきた農業の現状をふまえた上で、①この世界に新たに参入して有機農業を志向する青年たちの職業的社会化過程、②農による人びとのつながり方とその可能性、③かつての子どもたちにとって日常であった農作業への参加をとおしての学びと成長、という3つの角度から話題提供がなされ、フロアからの声を交えながら多重の議論が展開された。そのなかで改めて浮き彫りになったのは、農の現場から遠く切り離れたところにある都市住民の日常であった。

そこで今回のシンポジウムでは、農の世界とわたしたちの日常とのつながりに気づく契機ともなる「食」についての話題提供を行う。そして、食を媒介とした農と日常との結びつきを自覚しなおすことにより、わたしたちの生活世界がどのように変わることになるのかを展望したい。この試みはまた、それぞれの文脈で「農」文化とのつながりを見出し、継承するための手立てを探る作業とも重なるにちがいない。

はじめなおす場所：ある小学校と学童保育の「食べる」場面から

木下寛子

今、「食」を巡っては、さまざまな標語のもとで新しい挑戦や動きが活発である。それは『農』的なあり方へ向かう動きと歩みをほぼ同じくし、且つ、どこか「原点回帰」の調子を帯びている。その背景として言われるのは「食」を巡る危機である。——「食べる」ことは極めて個人的な営みだが、家族や地域、はては環境問題まで、あらゆることと密接に繋がっている。そして、その関係の網目の全体がひどく貧しくなっている。だからこそ身近なことから「本当の豊かさ」への一步を——。こうした声は単なる時代批判の声ではなく、現状のただ中から生じている分、切実に響いて人を動かす。

しかし、その「回帰」するところとして思い描かれる「農的なあり方」とは、今の私たちにとって本当に「原点」たりうるだろうか。また、そこは「回帰」するところなのだろうか。

仮にかつての「食」や「農的なあり方」を想い描くことはできても、それを現実につづすにはどうにも身体も知も及ばない。そして気付けば、今の「食」のありようや、それに端的にあらわれる物事との関わりや人との交わりの仕方の全体にすっかり親しんでいて、それによって生活を支えられている。私たちが居るのはそういうところ（世界／Welt）であり、危惧や「回帰」（そして「無関心」）さえも、この世界の内での出来事のひとつとして、今の「食」への親しさと根を同じくして生じている。

現実の事態として、人は時を巻き戻してやり直すことはできない。「農と食と心理学」という題で問われているのは、おそらく「原点・回帰」の仕方ではなく、また眼前にある諸問題の解決でもない。ここではそれを、今居る世界から新たに始めなおす可能性と見たい。この報告では、考え始める糸口として、筆者が通う小学校と学童保育での日々を取り上げる。そこでは食を巡る目立たしい取り組みは見当たらない。ただ、肌身に感じる変化の波や起こる出来事の中、食の枠組みやセッティングはそれに呼応するように変容してきた。この日々を話すことを通じて今居る場所のありようを確かめると共に、そこで見

出された「可能性」らしきものに触れ、「農的」ということについて考える道筋をつけていきたい。

自主保育活動にみる子どもの食体験と農的暮らし

菅野幸恵

自主保育とは、就学前の乳幼児を親たちが交代で預かりあう保育活動のことをいう。1970年代に東京で始まったのをきっかけに1980年代に拡大、活発化した。自主保育発足の背景には、子育てをめぐるコミュニティの変化、早期教育への疑問、外遊びを失った子どもの成長への危惧などがあり、親たちは地域のなかで子どもたちが人と自然と触れ合いながら育つ場を創り出そうとしている。自主保育の活動は基本的に公園や森、川、海など野外で行われ、強制や管理のない自由遊びを主体としている。また運営はすべて親たちの手で行われるため、話し合うことも多く濃い人間関係が生まれる。ローカルであること、人と人、人と自然とのつながりを重視するという点において、自主保育は“農”の世界に通じるところがあるだろう。今回は報告者がフィールドワークをしている自主保育グループ（TとK）の活動のなかで、子どもたちがどんな食体験をしているのかについて注目して報告する。

活動中にみられた子どもの食体験を、直接的体験と間接的体験にまとめた。直接的体験とは野外に自生しているものを子どもたちが採って（そのままもしくは調理して）食べる体験である。野外をフィールドとしている自主保育では、活動中に自然の恵みをいただく機会が多くある。そこで重要なのは“食べられるか、食べられないか”の判断であり、子どもたちは大人に判断を仰ぎながら学んでいく。間接的体験とは、食物の生産に子どもたちがかわる体験である。すべてではないが、自主保育グループの中には、畑をもっているところがある。自主保育Kもそのひとつである。子どもたちは保育活動のなかで畑を耕したり、苗を植えたり、草取りをしたりする。水遣りが水遊びになったり、土の中から出てきた虫と戯れたりと脱線することもあるが、できた作物は調理してみなでいただく。このような食体験はいずれも、食と生産の場とが目に見えるかたちで結びついているといえるが、子どもたちのいのちを支える食という観点からみると一部に過ぎないことも事実である。

豊作祈願と収穫感謝：実感から象徴へ

石井宏典

沖縄島北部に位置する一つのムラ（集落）において、現在まで継承されてきたひとつの祭りをとりあげたい。祭りは、豊作と豊漁を願い、収穫に感謝し、子どもたちの成長を祈願する。

旧暦七月に一週間かけて行われるこの祭りで、ムラの神に供えられる神酒や強飯は、収穫された粟を各家庭から集めて作られた。ムラでは水が乏しいために米は作れず、イモを常食とし、粟、黍などの穀類は特別な日に限り口にできるものだった。現在、祭りの中心的担い手である老齢の神人（かみんちゅ、神と人との媒介者、女性）は、行事の基本を変えずに維持してきたことを誇りとしつつ、後継者についての不安を抱えている。神酒と強飯作りをめぐる変化を拾ってみると、①材料は各家庭で栽培した粟から購入米となり、②作り手は各家庭の持ち回りから少数の神人中心となり、③作る場所も持ち回りの家庭から公民館等に固定した。祭りの締めくくりには、ムラの神に奉納する女性たちの舞いがあるが、40人弱の踊り手のうちムラ在住者は10人ほどで、中南部から駆けつけた中高年のムラ出身者が踊りの輪を支える。参加者減少の背景として神人は、「いまの若い人たちは信仰心が薄くなった。また、ムラの外で働いており、その仕事を休めないから」ともらす。

このムラにおいても、生産と消費が一体だった農のサイクルから離れる人が続き、ムラ外に現金収入の職を求める職住の分離は進行した。ムラ内には、専業・兼業農家や自給用の野菜を育てる高齢者は存在するが、土地の恵みによって自分たちの生命が支えられているという感覚から遠い人たちが多数となった。干ばつや暴風を恐れながら作物の実りを願ったかつてのムラ人の切実さを、「いまの若い人たちが」身をもって実感することはできない。それでも、神人たちは、ムラの豊作と豊漁を願い、その恵みに感謝しながら、手を合わせつづけている。

個人の経験を丁寧に記述するためにキーワードでとらえる TEM の実際

企画者	廣瀬真理子	(関西学院大学大学院)
司会者	安田裕子	(立命館大学)
話題提供者	佐藤紀代子	(長崎純心大学)
	山田嘉徳	(関西大学大学院)
	廣瀬真理子	(関西学院大学大学院)
指定討論者	荒川歩	(武蔵野美術大学)

質的研究法では、対象とする個人の経験を理解するために、丁寧に詳細な記述をめざす。丁寧な記述とはすなわち、直接観察やインタビューによって個人の内面を掘り下げることにとどまらず、外側の環境に視点を移して、これまで生きてきた文化・社会におけるその人自身の在り方や、他者との関係性を含めて全体的に理解しとらえていこうとする作業でもある。

複線経路・等至性モデル (Trajectory equifinality model : TEM) は、人の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するための新しい質的研究法の方法論的枠組みである。本シンポジウムでは、TEM を分析手法として採用し、それぞれに新しい概念をとりいれて研究をおこなった3名の話者提供者が、研究をすすめるにあたり、どのような点で困難を感じ、どのように工夫して分析をすすめて記述したのか、その実際についてキーワードをあげて報告する。

フロアの方々からのご意見もいただきながら、TEM そして質的研究法について丁寧に考える機会にしたいと考えている。

【佐藤紀代子氏：DV 被害者支援員の活動ヒストリー研究—TEM による質的研究】

1 目的

研究者は、2002 年から DV (ドメスティック・バイオレンス) の被害を受けた女性の支援を行う NPO 法人に所属し、相談・援助活動が続けてきた一人である。本研究では DV 被害者のサポートを行う民間団体の支援員に焦点を当て、DV 被害者支援員が、さまざま困難を抱えながらも、支援活動が続けていくことができるのはなぜか、その要因について明らかにしたいと考えた。方法として、20 年にわたり DV 被害者支援活動を行っている S さん (仮名) にインタビューを実施し、S さんの活動を TEM を用いて可視化し、支援活動が続けることを促進・阻害する要因が活動プロセス上にどのように生じてきたのか、分析した。

2 結果／考察

「活動が続けたい」という個人的指向性と社会的・文化的影響の関係について

TEM によって DV 被害者支援員 S さんの活動を描くことで、S さんが若い頃から抱えていた漠然とした思いが、環境の変化や外部からの影響によって「DV 被害者支援活動が続ける」という強い信念に変化し、その信念 (指向性) を基軸に、活動が継続していく過程が存在することがわかった。おそらく、同様の過程は、DV 被害者支援活動が続ける者には少なからず見られるものと推測されるため、今回の研究において作成した DV は、DV 被害者支援員が抱える課題や、やりがいに結びつく出来事の可能性を探る、支援員の活動予測モデルとなると思われた。

3 本研究のキーワード： トランスビュー

【山田嘉徳：卒業論文を書き上げるまでの逡巡過程—指導教員との関係に焦点をあてて】

1 目的

大学教育分野において、教員と学生とのやり取りとその変化という視点から学生の学習過程の変化そのものについて実証的に捉えた研究は少ない。本研究では、卒論を指導する教員と卒論に取り組む学生とのやり取りとその変化に着目し、指導教員と学生との関係性という観点から、学生たちの卒論作成に対する取り組みのプロセスを描くことをねらいとした。方法としては、学生が卒論作成に対し、つまずき“妥協する”事態を「逡巡」過程と規定した上で、3名の妥協学生を研究対象として選択し、それぞれに半構造化インタビューを実施し、その様相を TEM により分析した。

2 結果／考察

TEM を用いたことで、卒論を書き上げるまでの逡巡過程が多様なものであることがわかった。特に、その多様さを類型的に把握することができ、型毎で妥協学生の卒論の取り組みの様相にも違いがあることが明らかになった。また、一見、教員の側からみれば思うにまかせない学生の卒論の取り組みも、実際には教員からの足場づくりは、その一連の過程において行われていたことがわかった。これらの知見から、TEM による類型化によって、足場をうまく利用できない学生が逡巡する事態を、単に、個（教員）と個（学生）の関係としてではなく、卒論を書くということに関する教員と学生から成るシステムとして描き出せる可能性が見出された。

3 本研究のキーワード： 類型化

【廣瀬眞理子：セルフヘルプ・グループにおけるナラティブー「ひきこもり」親の会における継続維持要因の検討】

1 目的

ひきこもり問題のライフコースでの変化に対応する数少ない親支援の担い手として、ひきこもり親の会がある。本研究では、設立当初とは目的を変えながらも柔軟にひきこもり者の親をサポートしてきた1セルフヘルプ・グループ（Self-help Group 以下 SHG）に焦点を当てる。設立時からの世話人であるKさんのライフストーリーインタビューをとおして、親の会がSHGしてどのように発展し、親の支えとなっていたのか、その継続維持要因を TEM および発生の3層モデル（Three Layers Model of Genesis 以下 TLMG）を用いて明らかにする。

2 結果／考察

TEMに出会う以前の最初の分析では、KJ法を単独で用いていた。しかし個人内でのグループに対する意味づけの変容プロセスを捉えるには、親の会の20年の経過を含めて時系列で示す必要があった。

時間を捨象せず、プロセスに焦点をあてることのできるTEMを知り、KJ法から抽出したカテゴリーをもちいて新たに分析を行った。

本研究は1人を対象にしたライフストーリーインタビューであったが、TEMを用いて複線性の確保し、「世話人を辞める」という非経験事象を可視化することによって、辞めないという行動の選択の背景に何があるのか探っていった。TLMGによって示されたグループの意味づけの変容がKさんの中で内在化されることにより、さらにその後の最下層でのさまざまな行為が中間層との相互作用によって何度も捉え直されていくことが示され、グループとしての柔軟な発展を可能にしたことが明らかになった。

3 本研究のキーワード： 発生の3層モデル（Three Layers Model of Genesis：TLMG）

保育実践のアクチュアリティと質的心理学 —— 保育プロフェッション研究の可能性と限界 ——

企画	本山法子（奈良女子大学文学部） 東村知子（奈良文化女子短期大学） 掘越紀香（奈良教育大学教育学部）
司会	本山法子（奈良女子大学文学部）
話題提供	梅崎高行（甲南女子大学人間科学部） 東村知子（奈良文化女子短期大学） 古賀松香（四国学院大学社会福祉学部） 松本健義（上越教育大学大学院学校教育研究科）
指定討論	掘越紀香（奈良教育大学教育学部）

教育や保育のプロフェッションに迫るべく長年取り組まれている教師の実践知研究は、ある種の矛盾をはらんでいる。実践知について、暗黙知を含む「行為の中の知(knowing-in-action)」(Schön, 1984/2007)とし、教師自身にも明確な体系化や言語化が困難であるとしながら、研究の所産においては、教師による事後の省察に頼っている。つまり、実践の省察において意味づけ可能な次元と、実践のなかでしか具現化しない次元の両方を視野に治めつつも、教師の物語りや発話という言語化への依存が著しい。それは、木村敏がいうところの「リアリティ」と「アクチュアリティ」の関係にも似ている。物語りを通して、事後的に、教師の経験が再構成され、出来事が相互に関連づけられ、意味づけられる一方で、実践の感覚や臨場感、即応性、包括性などは「確かに」実践で感知されていたのに、事後の語りでは表しようなないアクチュアリティがある。つまり、研究において、「捉えたいもの」と「捉えられるもの」とのあいだに乖離があり、なかなか狭められない。

では、観察者は、実践のアクチュアリティの理解を放棄せざるを得ないのか。研究とはそうしたもののなのか。擬装的かもしれないが、事後の保育者の語りや実践の記録から「アクチュアリティ」を感知しているとしたら、それはなぜなのか。

質的心理学は、保育実践のアクチュアリティを捕捉し、すくいとることについて、何を可能にし、あるいは、困難なままにしているのか。本企画においては、保育実践のプロフェッションに焦点を当てつつ、質的心理学における実践研究の可能性と限界を探りたい。

保育士養成における質的アプローチの活用

梅 崎 高 行

実践者の言語化に頼り、暗黙的とされる実践知を取り出そうとする作業を、必ずしも矛盾したものとは思わない。研究者はたとえばインタビューという行為を通して、実践者と協働しながら新しく知を編んでいると考えることもできるからである。そのようにして言語化された知は、研究者が捉えたいと思っていたものであるというよりも、その後の実践に先行し、これを方向づけるべく働くのではないか。しかしながらこのような立場をとったとき、すなわち実践を実践者の言語に基づき構成していこうとする立場をとったとき、編まれた知が保育プロフェッションに寄与できる範囲は限られてくる。話題提供者は保育士養成校に勤務しているが、こと保育士養成、言い換えれば保育コミュニティにおける新参者の養成に当たっては、質的心理学における実践研究の貢献は少ないのではないか。保育の意味や哲学における質的アプローチよりもむしろ、行動レベルを扱う量的アプローチの方が、この場合に有効ではないか。本話題提供では、アイディアを援用して開発した「クロスロード・発達支援者版」の活用範囲や、

実習生が行った実習先での保育実践の分析を題材として、いま一度保育士養成における質的アプローチの活用について考えたい。

保育実践を「理解する」ということ

東 村 知 子

私は、ある幼稚園（ここではI幼稚園とする）におけるフィールドワークをもとに、「保育実践を理解する」ということについて、二つの観点から考えてみたい。I幼稚園では、2001年度から毎年、年長児を対象にプロのアーティストを招いてワークショップ（以下WS）を行っており、私は、2007年度から、4回のWSのフィールドワークを行ってきた。

第1の観点は、研究者がフィールドにかかわる時間である。WSのテーマやアーティストは毎年異なり、子どもも異なる。そのたびに見えてくるものは違うため、以前のWSが、当時とは別の見え方をすることとも経験した。その一方で、4年という時間をかけたからこそ、確かに「わかって」きたと感じられることもある。これがどういうことなのか、考えてみたい。

第2は、研究という営みは、必然的にさまざまな「ずれ」を生み出すものであり、それこそが研究者の役割なのではないかという観点である。さらにいえば、実践者の行為や、その瞬間に感じている「アクチュアリティ」もまた、意味づけという距離化（Valsiner, 2007）によって可能になるとも考えられる。このずれという観点から、保育実践のアクチュアリティを捉えるということについて、考えたい。

実践時の保育行為と実践後の語りの間

古 賀 松 香

「この保育者すごい」と観察時に思うとき、そのすごさを明らかにしたいと願う。ある1歳児クラスの保育者が共にビデオ記録を見ながら「そう、そうや」と思いだしたように笑って語り出す。「ヒメちゃんも起こしとかないかんし、タケちゃんが柵に上るのを阻止せな、でもままごともしにきたし、みんななんかちょっと、ぐちゃぐちゃに」と言う。実際その場にいた観察者も「わっ、大変!」とその状況を感じたが、観察者から見えていたものは、膝の上の子どもから背後の子どもまで視野に入れ、それぞれに必要なかわりを落ち着いて行っている保育者の様子であった。その場で生起していることに対するアクチュアリティを感じし、たとえ「わっ、大変!」と思っても、保育者は、専門的な実践知を用い、瞬間的にひとつの望ましい保育行為を形成しようとする。そこには、日々の保育実践と省察を積み重ねてきた者だけが獲得できる保育の実践知があり、「この保育者すごい」と思われる専門性の高さが感じられる。観察者には、実践後に「ぐちゃぐちゃ」と振り返る保育者の語りと、実践時の保育行為との間に開きを感じられる。その保育行為と語りの間に実践知の重要な要素、すごさの秘密が隠されているのではないか。ビデオ映像とインタビューデータの分析から、「この保育者すごい」を形にしてみたい。

記述が生まれる場と実践のアクチュアリティ

松 本 健 義

アクチュアリティは、他者とともにいまここで生きる世界（出来事）との相互作用によりその世界へと行為を立ち上げつくり変えていくわれわれの行為と行為の「あいだ」である。それは、世界が現象する根拠であり、世界が現象してくる場所である。メルロ＝ポンティは「ソナタが突然に叫び出すと、演奏者はそれについていくために、「すばやく弓に飛びつかなくては」なくなる。そしてこの音の響く世界に開かれたこれらの〈渦巻き〉が、ついに一つの渦巻きとなり、観念はそこで互いにふさわしいものになる」（M.メルロ＝ポンティ、1999、『メルロ＝ポンティ・コレクション』p.155）とする。文化と社会と自己の活動を通した生成過程として保育実践のモデルともなる。また、保育者や参与観察者は、食事や遊びなどの日常的場面で、子どもの行為に対して同型的・相互的にふるまう自分の行為が、〈出来事〉を媒介にして相互触発や衝突を生じることで、子どもや自分の行為や知覚の志向性や枠組みに気づき、世界の現われに応じて行為の関係と場とをその場でつくり変えて行為を生成している。こうした事例における保育者や観察者の行為や語りの更新過程に関する画像を用いた記述から、保育実践のアクチュアリティと記述されるもの、記述されないものについて提案する。

模倣と創発としての学習

ーヴィゴツキーおよびフレイレのまなざしよりー

企画	岡花祈一郎	(福岡女学院大学)
	田島充士	(高知工科大学)
話題提供	岡花祈一郎	(福岡女学院大学)
	田島充士	(高知工科大学)
	木村里美	(大阪府立富田林高校・大阪府立大学大学院)
指定討論	高木光太郎	井 (青山学院大学)

【企画趣旨】

ヴィゴツキーとフレイレ、この二人は、いずれも言葉や対話に着目しその理論を構築した。しかし、これまでこの二人の理論が重ねられ論じられることは少なかった。他方で、近年の質的研究においては、様々な方法論が論じられているが、その背後にあるべき理論は抜きで論じられている傾向にあるように思われる。果たして、この二つの理論は、質的研究にどのような光を示してくれるのだろうか。本シンポジウムでは、「模倣と創発としての学習」というテーマで、ヴィゴツキーとフレイレという二人の理論を手がかりとして教育実践の分析を行う。岡花氏からは幼児期の子どもの模倣の分析を、木村氏からは思春期から青年期におけるアイデンティティとその変容について、田島氏からは大学生の学校インターンシップ参加をとおした変容過程について話題提供していただく。そして、指定討論として、ヴィゴツキーをはじめとした諸理論に造詣が高木氏からコメントいただき、フロアとの議論との橋渡しをしていただく予定である。本シンポジウムでは、ヴィゴツキーとフレイレの理論が言語実践の質的な分析枠組みとしての可能性を探っていきたい。

【話題提供】5歳児の遊びにおける模倣と再文脈化

岡花祈一郎

子どもたちの遊びは、どのような契機で深まったり広がったり展開していくのであろうか。本研究では、5歳児の遊びにおける展開の契機として模倣に着目して事例を分析した。遊びという活動における模倣に着目し、意味生成の過程と、遊びのプロセスを重ね合わせながら検討した。その結果、単純模倣（他児の言動をそのまま模倣すること）では遊びに変化は生まれないが、変容模倣（他児の言動を変化させて模倣すること）によって新しい意味が生成され活動の方向が変化していた。本研究では、ヴィゴツキーが『思考と言語』（1934）で指摘した語義と意味の問題、さらに Van Oers（1998）の提唱する水平的再文脈化と垂直的再文脈化を分析の枠組みとして考察を行った。それはフレイレが指摘する、世界を認識しそれを再創造していく過程とも言える。

【話題提供】生涯発達の見点から見たアイデンティティと対話:メジローの自己変容理論を参照として

木村里美

思春期後期から青年期はアイデンティティの確立が人生の課題となる時期である。しかし、このアイデンティティ確立という課題は、常に子供時代に無批判、無意識にとり込んだ規範的信念体系がもたらす生活の機能不全という危機と背中合わせになっている。なぜならそれらの信念体系は、しばしば先入観や歪んだイデオロギー、幼少年期に押さえつけられた禁止を反映しており、そのために成長後の生活に機能不全をおこす影響要因となることがあるからである（J.Mezirow 2009）。Mezirow はこれらの幼少年

期に自らとりこんだ価値観や規範の意識化を中心とした認識変容に関わる学習を成人のための「自己変容学習」として理論展開している。それはフレイレが言うように、自らが内化した「現実世界の構造」を意識化し、対象化する学習であり、自らが過去に出会った他者の「声」を意識化し外在化する行為でもある。本研究ではこの Mezirow の「自己変容学習」を、「生涯発達論におけるアイデンティティ」の視点から捉えなおし、そこで交わされる対話を、アイデンティティ達成に関する二つの視点、すなわち「個としてのアイデンティティ」発達と「関係性に基づくアイデンティティ」発達という視点から考察する。

【話題提供】大学生における学びの創発性：学校インターンシップを視点として

田島充士

教員を目指す学生にとって、自らの知識を生徒が理解できることばへと編集・伝達する対話力は必須の能力といえる。しかし多くの教職課程履修学生が、このような教授対話を行うことができないままに実態が指摘されている。田島（2009）は、学生らのこのような認知状態を「分かったつもり」と呼んだ。そして田島・中村（2011）では、この分かったつもりを改善する可能性のある教育実践として「学校インターンシップ」に着目し、参加学生の研修状況を対象としたフィールドワークデータ分析を通し、その効果を明らかにしている。本研究では、本データで確認された学生の成長過程の構造を、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」概念、およびフレイレのリテラシー教育における「意識化」概念の理論的観点から再分析を行う。その上で、大学生の学びにおける模倣と創発の関係について考察を深める。

社会に開くナラティブー戦争と原爆の体験を聞く・語り継ぐ

企画者 森岡正芳（神戸大学）
司会者 森岡正芳（神戸大学）
話題提供者 松尾純子（調布市教育相談所）
森 茂起（甲南大学）
門池啓史（東海大学・日本大学）
指定討論者 児島達美（長崎純心大学）
山口智子（日本福祉大学）

企画趣旨:

歴史的な災害、戦争や原爆という出来事はその体験者にとってどのように語ることができるのだろう。このような体験について、心理学はトラウマという言葉をあてはめ、その回復への道筋を軸に発想がちである。むしろ聞くことの現場性がつねに問われることに聞き手は自覚的でありたい。語られている現場と語られた現場との二重性の中で、体験された現実も少しずつ変化する。

人が体験を語り始めるとき、それは私的な体験から社会的な語りへと移行するときである。それを通じて語り手のみならず参加者自らも、アイデンティティが変化することがある。社会に開かれたナラティブの実践は、語り手の生きる力を支えることにもつながる。

ナラティブという認識の枠組みを心理学的に基礎づけたブルーナーは、ナラティブという枠組みの特徴の一つに、「例外的なもの（unusual）と通常のものをつなぐ」ということをあげている。この例外的なものの極は戦争、災害といった社会歴史的な出来事である。規範だけでなく、例外的なものを許容し、理解可能にするストーリーの特質が人と人の葛藤を和らげ、緩衝地帯を作り出す（Bruner, J. “Acts of Meaning” 1990 p.49）。ストーリーは現実を和らいだものにする働きがある。

ブルーナーによれば、すべての文化はフォークサイコロジー（Folk psychology）をもつ。フォークサイコロジーは個人の信念（beliefs）、欲求（desires）を構成要素として、ストーリーの形式のなかで、一貫性を持ち組織化されている。それによって社会における経験、社会についての知識、社会との関係の持ち方を統合できる。フォークサイコロジーは文化のなかで規範的ストーリーを構成しつつ、例外や逸脱など規範に反する事象を物語的文脈にとりこめる。

以上のナラティブが生じるプロセスには複雑な要因が絡んでいるが、まず、聞き手の要因に注目する必要がある。聞き手との対話関係の中でライフストーリーは構成される。また、時間的要因は複合的に働いている。戦争の体験を語ることが可能な人口は減少する一方である。今聞いておかねば残らない。

また語りは積極的に聞かれることを通じて、過去の語りが今現在のものとしてよみがえる。過去の時制が現在の時制へと変化する瞬間が生まれることすらある。現場は過去の場面であるが、今ここが現場となる。語り継ぐことの切迫感を、身をもって体験された聞き手たちの声を、この企画で共有したい。

この企画では戦争や、原爆といった体験を個人の視点から語るとき、どのような社会文化的文脈の中で語りが生まれるのか、語ることを通じて個人のアイデンティティはどのように変化するのか。そして戦争の体験を個人レベルから公共的なものにつなぐときに、文化に根ざしたフォークサイコロジーがどのようにはたらくのか。以上のような点を課題として、実際に聞き取りを行った実践者の報告を交えながら、問題意識を広げていきたい。大震災復興のさなか、ナラティブ・語りを社会・歴史的な方向へと開いていくささやかな一歩を作っていきたい。

この企画は語り聞かすテーマである。参加者全員が話題提供者でありまた積極的な聞き手である。代表的な語り手として、3人の研究者の話題を予定している。

松尾純子「体験を語り始める：原爆体験者の聞き取りを通じて」

松尾は原爆体験者たちがその後の人生を生きる中で、どのように原爆体験を語り始めたのかに注目し、原爆体験者 27 名にインタビュー調査を行った。被爆の体験は個人要因と環境要因によって語り始める時期が異なることがわかる。そして、語り始める時期の違いによって、語りのタイプが違うことも明らかになった。1950 年代は「被害者としての自己の語り」が顕著であるが、1960 年代—70 年代には他者が意識され、被害者ではない他者に体験を語ることが特徴的となった。そして 1980 年代被害者である他者のために語るという意識が強くなり、1990 年代は次世代のための語りを生む。『質的心理学研究』第 9 号に掲載された研究を中心に報告の予定である。

森茂起「戦争と記憶：戦争の体験を語り継ぐ」

森は「子ども時代の戦争体験」という共同研究を 2007 年から進めている。今回はその一端を披露していただく予定である。第二次世界大戦に関しては現在までに膨大な文献記録が存在するが、それでは戦争について語りつくされているのかというと、否である。森は戦争体験者へのインタビューを 18 名(2009 年)に行った。もっともつらかった体験。家族状況と喪失体験。軍国主義と家族の交わり。戦後の生活。このようなテーマについて聞き取りを行い分析している。森からは臨床心理の立場から、トラウマ体験と語りについてもふれていただく予定である。森茂起『トラウマの発見』（講談社 2005）『埋葬と亡霊—トラウマ概念の再吟味』（編著 人文書院 2005）など参照。

門池啓史「日本軍兵士となったアメリカ人たち」

門池はこれまでに 15 回渡米し、主に日系アメリカ人二世の戦争体験者（主に元兵士）の聞き取り調査を行ってきた。個人インタビューは約 50 名にのぼる。二世の約 20%は戦前日本で教育を受けるため来日したが、自分の生まれた母国アメリカと両親の祖国日本が戦争を起こしてしまい、結局多くの二世は日本に留まり自己の意思とは無関係に、日本軍兵士として母国と戦うことになってしまった。このような二世たちの存在は日本でもアメリカでもほとんど知られていない。門池はこの貴重な報告を今回の企画で行う予定である。門池はこの研究をもとに『日本軍兵士になったアメリカ人たち—母国と戦った日系二世』（元就出版社, 2010）を出版している。

また代表的な聞き手として

山口智子と児島達美、以上の方々を予定している。お二人ともカウンセリングやサイコセラピーの実践場面を通じて、戦争や原爆体験に関わる当事者たちの語りに真剣に向き合ってこられた方々である。

「GCQHRを通してみる、日本の質的研究のこれから」 (1st GLOBAL CONGRESS for QUALITATIVE HEALTH RESEARCH)

企画者	植田嘉好子	(川崎医療福祉大学)
	山本玲菜	(川崎医療福祉大学)
司会者	植田嘉好子	(川崎医療福祉大学)
話題提供者	吉田尚史	(東邦大学)
	福田茉莉	(岡山大学)
	山本玲菜	(川崎医療福祉大学)
指定討論者	やまだようこ	(京都大学大学院)

【企画趣旨】

本年6月、韓国・ソウルにおいて第1回世界健康質的研究大会(1st Global Congress for Qualitative Health Research: GCQHR)が開催された。本シンポジウムでは、この世界大会に日本から参加したメンバーをシンポジストに招き、日本の質的研究の国際的な在り方について討論する。

このGCQHRには世界25カ国以上が参加し、看護学、心理学、社会福祉学、教育学、医学等の分野から、多彩な質的研究が報告され、大会テーマ“Understanding and Caring for the Human Being”のもと、活発な議論が行われた。また基調講演では、質的研究が歩んできた歴史や、これまでに報告された質的研究の段階的分類、そして今後の質的研究の課題について示された。

今回、アジア・ソウルから世界に向けて質的研究が発信されたことをきっかけとして、隣国の日本としても、質的研究を今後どのように発展させていくのか、そのために何が必要かを議論する必要があると考えられる。具体的には、質的研究における国際発表の意義や課題、各分野における国際的動向等について、シンポジストや会場の参加者と議論を行い、日本の質的研究の国際的発展に寄与したい。

【話題提供の概要】

1. GCQHRの概要(植田嘉好子)

この世界大会の開催趣旨(テーマ)、参加国、研究発表の内容分類(分野・方法論別)、基調講演の概要等について報告し、本大会の特徴や傾向について述べる。

2. 「カンボジア人精神疾患概念の質的研究—トラウマ経験を持つ精神疾患患者へのインタビュー調査をもとに」(吉田尚史氏)

本発表では、カンボジア王国プノンペン市にあるクメールソビエト友好病院精神科外来におけるインタビュー調査にもとづいて、トラウマ経験を持つカンボジア人精神疾患患者の病いの主観的認識について考察を行なう。文化精神医学の知見では、様々な文化的背景を持つ民族集団には、民族固有の文化的苦悩の慣用表現があり、非西洋圏では身体化傾向が大きいことが指摘されている。また認識論の問題として多くの精神疾患カテゴリーでは自然区分と文化的に構成された概念が相互作用すると指摘されている。

カンボジアでは、フランス統治時代に導入された精神医学・医療がポルポト政権下(1975-1979)で破壊された。1970年から1990年初めまでの20余年にわたる内戦と国際的孤立後、社会復興に向けた活動が本格化したのは1993年にカンボジア国連暫定統治機構支援による統一選挙が実現してからである。精神医学・医療の再導入は1990年初頭に始まった。発表当日には、先行するカンボジアでのトラウマ

と精神疾患に関する疫学研究とカンボジア固有の歴史的背景を踏まえた上で、発表者によるインタビュー調査のデータを提示する。文化精神医学・医療人類学の立場から話題提供を行ないたい。

3. 「文化間で生じるナラティブ研究のアカウンタビリティ—難病患者を対象とした QOL 調査事例からの検討」(福田茉莉氏)

福田茉莉(岡山大学)は、難病患者の QOL というテーマから話題提供を行う。話題提供者は、半構造化面接法を内包する QOL 尺度を用いて難病患者の QOL や生(ライフ)の記述を試みている。この調査に使用している QOL 尺度は、もともと海外の研究者によって開発されたものであり、逆翻訳プロセスを経て日本に適応されたものである。しかし、両国間の医療制度の違いやスピリチュアリティの位置づけにより、実際の医療現場で応用する際には多くの問題を抱えている。

また本尺度を用いて海外で研究報告する際には、患者のナラティブをどのように扱うのか? 社会・文化的背景を含めた患者のナラティブをどのように伝えるのか? さらに患者と調査者の関係性を含めた文脈をどのように扱うのか? などの課題が生じる。

よって、話題提供者が海外で開発された尺度を用いて日本での調査を遂行する、あるいはその研究成果を発表するにあたり、どのような課題に直面したのかを述べ、今後の日本における質的研究の在り方や国際的な発展に寄与できればと考えている。

4. 「現象学的方法によるアルコール依存の経験の意味」(山本玲菜)

本研究は断酒会に参加しているアルコール依存者の語りに基づき、依存の状況はどのように経験されているのか、そして本人にとっての苦しみの意味は何か、さらに回復の意味とは何かといった本人にとっての依存の経験の意味を明らかにすることを目的とした。

3 人の研究協力者の語りを現象学的方法によって分析した結果、以下の内容が明らかとなった。(1) 依存者にとって飲酒は耐えがたい現実から自身を守るために行われていた。この現実からの逃避は、自分に課せられた現実を引き受けるという実存であることからの逃避を意味しており、それは他者に対しても自身に対しても隠さなければならないことであった。(2) 依存者にとってのアルコール依存の苦しみとは自分の力ではどうすることもできない絶望状態にあること、つまり孤独であり、実存としての他者の不在を意味していると考えられた。(3) 依存者にとってアルコール依存からの回復とは、「生」の意味を持った実存としての「私」の発見、つまり実存の覚醒を意味していると考えられた。

当日は、国際学会での発表はどのように行われたか、どのような反応が返ってきたかなどについても話題提供を行いたい。

1. ペルソナ法の実践試行：個性の再現と活用可能性について

渡辺 理（富士通研究所ソフトウェアシステム研究所）

ペルソナ法は人間視点に基づく設計手法であり、実ユーザの調査によって仮想ユーザ(ペルソナ)を作成し、開発者がユーザ像を共有することで顧客志向を促進する方法である。筆者はペルソナを様々な設計・開発の現場に適用して改良を試みてきた。最近、地域の農家、行政、地場産業等の当事者が参加する地域再生検討の場に適用し、バフチンのポリフォニー論等も参考にして、当事者達の個性を（臆せずに）当事者達に提示することによる合意形成と社会的サービス設計の促進を試みてきた。これは期待した効果を十全に得るに至っていないが、我々がペルソナの個性的な発言を一覧することで地域再生のヒントを得るなどの副次効果も見えてきた。

現状、人間の個性をペルソナに表現して活用することの効果は、下記のように集約できる。

- (1)ターゲットユーザの生活世界や内的世界を想起しやすくなる。
- (2)複数のペルソナ利用者達のターゲットユーザに対するイメージがブレにくくなる。
- (3)外部環境の変化がターゲットユーザに及ぼす脅威や機会を検討・対応しやすくなる。
- (4)地域の当事者達の社会的な立場（例：板ばさみ）を理解しやすくなる。
- (5)地域の当事者達を相互に満足させる社会的サービスを着想しやすくなる。
- (6)地域の当事者達の実質的な合意形成と社会的なサービスの設計・実現が進む。

今後、特徴を整理し、統合・洗練を目指す。当日の発表では率直な研究対話を歓迎します。

2. インタビューからトランスビューへ：TEM の理念に基づく方法論の提案

サトウタツヤ（立命館大学文学部）・安田裕子（立命館大学立命衣笠総合研究機構）・佐藤紀代子（長崎純心大学）・荒川 歩（武蔵野美術大学）

複線径路等至性モデル（TEM）研究を行う際は、歴史的構造化サンプリング（HSS）により、興味ある事象（等至点）を経験したか経験しえなかった人を対象にする。3回会う。初対面で全ては語れない。2回目で互いを **cognition**（認識）可能になり、3回目で **recognition**（承認）可能になる。対象者数は「1・4・9の経験則」を提案する。人生を深く厚く扱う＝1人、等至点に至る複線性を可視化する＝4人、径路を類型化する＝9人、が目安となる。

質問は、等至点的経験の開始を明確にする設問が重要（恋愛＝等至点なら、その開始を対象者と共に明確にできる質問）。さらに、時の流れの中で、等至点に向かうことを妨害／促進した事柄、自己内対話が起きた事柄を尋ねたい。

データは切片化して **KJ** 法等を援用して **TEM** 図を作成する。複数の進路を取り得る出来事において逡巡するならそれが分岐点。見えない径路も可視化する。初回の面接後に作成した **TEM** 図を媒介にして2回目を行う。3回目も同様。完成した **TEM** 図は、対象者と研究者の間に発生した新しい何かである。**Inter-view** は「視点・見方」の「間」。**Trans-View** という「見方」の「融合」が実現できる。

個人の変容を描きたいなら、発生 of 三層モデル（TLMG）の中間層に促進的記号（Promoter sign）が発生する、その時と状況を明確化する。

なお、以上はマニュアルではない。研究全体を柔軟に計画しよう。何かに縛られては楽しくないし、自由に楽しく研究することこそ **TEM** の基本理念であるからだ。

3. PEN-A による高齢者への面接調査データの解析：写真とナラティブデータの対応分析の試み

岡本卓也（関西学院大学社会学部）・石盛真徳（京都光華女子大学人文学部）・加藤潤三（琉球大学法文学部）

我々の研究グループは、これまで写真投影法に面接調査を組み合わせた研究法を実施し、①投影的機能と概念化機能、②再評価機能と再発見機能、③語りの客体化機能、④関係形成機能といった点において、従来の研究法よりも優れていることを見出してきた（岡本・石盛・加藤,2010）。しかし、研究法として体系的に纏められたものではなかった。その後、写真から語りを融合的に誘出し、多元的な分析を可能とする研究アプローチとして、写真・ナラティブ誘出法（Photo Eliciting Narrative Approach : PEN-A）を提案している（Okamoto, Ishimori & Kato, 2011; 石盛・岡本・加藤,2011）。PEN-A では、調査対象者にあるテーマに基づき写真を撮影してもらい、その後それを元に聞き取りを行う。得られた写真とナラティブそれぞれのデータは、(1)ローデータレベル、(2)重要度などの点から整理した質的データレベル、(3)計量的な分析を想定した量的データレベルに整理することが可能である。本報告では、地域活動の実態と地域意識の把握を目的として、京都市中京区の高齢者を対象に行われた調査データを、PEN-A に基づいた分析例について報告する。今回は、特に写真データとナラティブデータに対して、テキストマイニングの手法の1つである対応分析を行った結果と、撮影場所の地理情報をあわせた分析結果を紹介する。

4. 組織を理解しようとした時に見えた自己のありよう

鈴木 泉（財団法人田附興風会医学研究所北野病院 消化器外科病棟）

今年度3月より、新たな病棟をマネジメントする事になりました。

その組織を「不健康な組織」と捉えた私は、「健康な組織」へと変化させる事が使命と思い、スタッフに関わりました。彼女らと接近し彼女らのドミナントストーリーに触れることで、私のドミナントストーリーに気づくことが出来ました。私は、日々臨床の場で繰り広げられる様々な事象に出会う中で、管理者としての「基軸」をベースにおきながら、管理実践を行います。ところが、彼女らへの心地よい接近が出来なかった時には、私の「基軸」がドミナントストーリー化し、私を支配し、心地よい接近を邪魔する体験をしました。

「不健康な組織」という私の内面で語った言葉が、健康な組織へと変化させられない

病棟看護師長としての、不満と不安をかりたせ、マネジメントを役割とする者としてのドミナントストーリーをより強固にさせて行きました。

互いが心地よい接近方法は、現在も模索中ではありますが、双方が数年かけて作り上げてきた物語を、共に唯一無二の語りとし認め合う事が出来ればよいと思います。そしてこれから彼女らと私で作る新たな物語を共に生きたいと思えるようになりました。

今回はこれらの組織を理解しようとした時に見えた自己の在りようについて示唆 頂きたいと思います。

5. イメージマップからとらえた小児看護学実習前後の「子どもの看護」のイメージの変化

世良喜子（国際医療福祉大学保健医療学部看護学科）

本研究は、小児看護学実習における学生の子どもの看護に対するイメージの変化を明らかにすることを目的に、小児看護学実習前後の「子どもの看護」をキーワードとしたイメージマップの変化を、検討するものである。

実践の学問である看護学において、臨地実習は実際の複雑な現象の中で行われている看護に参加し、実際にケアを実践する中でその経験を学生自らが意味づけ、経験そのものを深化発展させ、看護実践能力の基盤を形成していく過程である。そこで獲得される学びは臨床の知であり、状況の知であり、身体の知である。そのため学生の学びの成果を知識の量等だけで知ることは難しい。

イメージは体験・感情や学習者が既にもっている知識を自分なりに体系づけたものであり、対象を認識し、それについての概念や法則、原理を獲得する場合、その媒介となるものである。そこでイメージマップ（「コアになることば」からの連想表現で、概念や事象等のイメージをマッピングさせたもの）の変化を検討することで、臨地実習での学生の学びをとらえることを試みた。

6. 新人看護師の看護実践コミュニティへの参加過程で経験するコンフリクト：正統的周辺参加論の視点によるエスノグラフィーから

奥野信行（国立循環器病研究センター）

本研究の目的は、Lave&Wenger(1991)の「正統的周辺参加論」を分析枠組みとして、新人看護師の看護実践コミュニティへの参加過程における学びの様相を明らかにし、その特徴を考察することである。新人看護師4名の協力を得て参加観察を実施し、質的方法にて分析した。なお、看護実践コミュニティ（以下 CONP とする）の単位は、新人看護師が所属する病棟の看護チームとした。その結果、新人看護師は、臨床での学びの軌跡において、CONP との不協和や葛藤を経験する場合と、そのような経験をせずに CONP との関係性を深めつつ学んでいく場合があった。今回、CONP との不協和や葛藤を経験した新人看護師に焦点を当てて考察した結果、その要因として新人看護師と CONP、双方の「学習観」が関係していることが考えられた。このような経験の最中にある新人看護師は、自己への肯定的な感覚を持てず、また、そこでの学びにも意味を見出せずにいた。それが肯定的に変容していく要因となった契機として、次の二つが考えられた。一つは、CONP の古参者である先輩看護師からの謝意や肯定的評価を通して、自分が他者の役に立っているという感覚が得られたこと、つまり「参加の手応え」であった。もう一つが、同じ CONP に参加している同期看護師との学習面や情緒面での支え合いを通して絆を深めていくこと、つまり「同期看護師との同僚性の形成と深まり」であった。

7. 病棟看護師長として自信を回復した語り合い：ナラティブアプローチの実践にチャレンジしている2年目の私

吉井輝子（財団法人田附興風会 医学研究所北野病院）

私は急性期病院で勤務する病棟看護師長です。今年度の私は病棟を異動し、新たな気持ちで自信を持って勤務を開始しました。しかし、この気持ちを一気に崩す苦く辛い体験が、数ヶ月後に待っていました。

他者からの言葉によって私は主体を失い、落ち込みました。私を心配する周りの励ましや支援の言葉さえ、ふがいない私へのメッセージにしか聞こえませんでした。「自分が悪い。私の管理能力が低いから、こんな結果になってしまった」。自信を失くし、自分ばかり責めました。

しかし現実は待ってくれません。この苦く辛い体験をした事例の問題点に対し、原因を考え対策を立て実行しなければなりません。仲間と共に考えていくと、原因は自分だけではなく、システムや環境も大きく影響していることが見えてきました。自分を責め、自分だけに向かっていくベクトルは向きを変え、自分以外の外へと向かいました。

このように客観視が可能となった頃、共に考え歩んできた仲間の一人と語り合う時間を持ちました。この時もらった相手の言葉によって、私は主体を回復し新たな未来が見えてきました。「言葉によって、私と私を取り巻く社会は作られていること」。実体験を通し理解しました。まだ学び始めて2年目の私が体験によって得られたナラティブアプローチの効果を聴いていただき、私の考えるナラティブアプローチについて議論し示唆を頂きたいと思います。

8. ALS 患者による介護者に対する教育場面のエスノグラフィー研究

安達俊祐（立命館大学大学院応用人間科学研究科）

本研究ではALS（Amyotrophic Lateral Sclerosis、筋萎縮性側索硬化症）に罹患した人の教育場면을エスノグラフィーの手法を用いて研究する。ALSとは神経難病の一種であり、罹患した人は運動ニューロンに異常が生じ、脳からの指令が筋肉に伝わらなくなる。さらに病気の進行に伴う治療の過程で発話が出来なくなる。つまり、体をほとんど動かすことが出来ず、発話も出来ない状況に至るのである。本研究では、このようなALS患者が学生ヘルパーに対して、コミュニケーションエイド（コミュニケーションを補助する道具）の一つである文字盤の使い方を教授する場면을観察する。一般的な教育場面では指導者側が被指導者側に多くの情報を伝達する。しかしながらALS患者の場合、一度に多くの情報を伝達することは、そのコミュニケーションの方法上不可能に近い。つまり、今回観察の対象とする場では、特異な教育場面が展開されていることになる。そこで、本研究ではその場면을観察することにより、ALS患者による教育場面がどのようなものか、何故その場教育が可能になっているのか、非指導者はどのようにその場に参加しているのかを分析していく。

9. 中途障害者の家族プロセスにみるパワーの変化：頸髄損傷で半身不随になった A さん 家族との会話の分析から

得津慎子（関西福祉科学大学）

研究の目的：困難や危機に曝されるときに、元に戻る「家族レジリエンス」と表現される自律的な力を家族は持っている（Walsh, 1996）。家族が「家族レジリエンス」によってシステムの様相を変化させて、やがては平穏な日常生活に戻っていくプロセスを明らかにすることは、家族危機における円滑な家族システムの変化を導く示唆となると思われる。家族システムの変化の手がかりは様々あるが、本研究では、家族関係に見られるパワーに着目し、家族のコミュニケーションにどのようにパワーの変換が反映しているかを家族の会話の分析によって明らかにする。

研究の方法：脊椎損傷による中途障害者 A さんの家族と受傷直後とそれぞれ 2 年後に 3 回の面接を行い、その内容を分析した。会話におけるパワーストラグルについては、主に家族療法からの語用論的な知見を下に家族の葛藤場面における「脱文脈化」の方策（Minuchin, 1978）や会話におけるコミュニケーションの受け方と、「コンテンツとコンテクスト志向の会話」（Haley, 1959）を参考にコーディングした。

研究の結果：受傷後の期間が長くなるにつれ、パワーストラグルを想定させる「脱文脈化」の会話が減じて、コンテンツ志向の会話が増加した。これらは家族が混乱から安定に向かうことによる変化であると考えられた。

その他の結果と考察については当日詳述する。

10. 看護師が語る「根治治療が困難になったがん患者への告知」をめぐる物語についての ナラティブ分析：構造、関係性、テーマ

菊永 淳（新潟大学大学院保健学研究科）・坂井さゆり（新潟大学大学院保健学研究科）・宮坂道夫（新潟大学大学院保健学研究科）

研究目的：がんの告知は解決済みの問題のように語られるが、再発や転移、治療の不奏功など、根治治療が困難になった状況での告知には数多くの問題が未解決のまま残されている。本研究では、この事象を看護師の視点から語らせることにより、そこに関わる人がどのように関わり合い、告知をめぐるジレンマがどのように構築されるのかを立体的に把握することを目的とした。

研究デザイン

- 1) 対象者：がん看護経験 3 年以上の看護師数名。
- 2) 研究方法：データ収集はナラティブ・インタビューによった。対象者には、「根治治療が困難になったがん患者への告知」という主題で印象に残っている 1 人の患者についての話をするように依頼した。
- 3) 分析方法：インタビュー・データを逐語録にし、①構造分析（物語の構造分析）、②キャラクター分析（話に登場する人物の描かれ方、性格づけ、関係性等の分析）、③テーマ分析（物語内容の分析）を行った。

分析結果：①構造分析では、対象者の語りのプロット構造に相違が見られた。②キャラクター分析では、患者、医師、看護師、家族の描かれ方や性格づけ、看護者自身の視点のとり方に相違が見られた。③テーマ分析では、主題に関連した多数のテーマが抽出された。3 種の分析を組み合わせることで、告知をめぐるジレンマが立体的に明らかになるように思われた。また、看護師が果たすべき役割についても示唆が得られた。

11.基礎看護学における「罨法の援助」に関する授業研究：ニューカウンセリング経て罨法の技術から学んだ安楽な援助

岡田朱民（明治国際医療大学 看護学部 基礎看護学講座）

個々の患者にとって、もっとも安楽な方法を看護師が判断し実施できる基礎看護技術の一つとして「罨法」の援助がある。本学では、相手の体から発せられるメッセージに反応する自分に気づくことができるよう、ニューカウンセリングを、コミュニケーション能力を育てる教育に取り入れている。その段階を経て、対象に安楽をもたらす具体的援助技術を習得させるため、「罨法の援助」を1年次の前期に実施している。

今回、「罨法の援助」として湯たんぽ、氷枕、氷嚢、氷頸の方法を学内演習で実施し、演習後「看護師の技術によって安楽は変わると考えたか」、「それはどのように変わると考えたか」、また「安楽な援助とはどのような援助か」をレポートに求めた。その結果、有効回答者の94.2%が「看護師の技術によって安楽は変わると考える」と答えている。また、「安楽はどのように変わるか」についてのレポートの内容を、KJ法を用いてグループ編成したところ、①「より患者一人一人に合った安楽」、②「より安全と安心をもたらす安楽」、③

「苦痛・疼痛を緩和する安楽」、④「治癒力を向上させる安楽」の4つの上位カテゴリーに分類された。さらに、エビデンスに基づいた、対象への気遣いのある援助は、その人が不快なく安心していられる援助、つまり安楽な援助であることを学んでいる。ニューカウンセリングの講義後、さらに具体的援助技術の発展につながっていることが示唆された。

12.「文脈横断論」を前提とした看護基礎実習の試み

鮫島輝美（京都光華女子大学健康科学部）

看護学教育では、学内学習を効果的に臨地実習の学びへと接続することが求められている。しかし、現実には、過密なカリキュラムの中、十分な演習時間を確保することが難しく、ケアや世話の経験の少ない学生たちに、短時間で学習させることに教員たちは困難を感じている。既存の研究では、学内授業での学習過程や臨地実習での学習過程が検討されているが、看護学生の学内学習から臨地実習での学習過程が、経験主義的研究方法論を用いた形では十分検討されてこなかったと、香川(2007)は指摘している。同時に、看護学では、学内授業から臨地実習への学習過程は「学内授業が臨地実習にどの程度役立てられたか」に焦点があてられており、学習者の視点に立って分析されているものはほとんど見当たらない、とも指摘している。そこで、本研究では、基礎看護学実習において、学内学習から臨地実習への学習過程を、香川のいう「文脈横断論」(2008)を前提として捉え、複数の文脈を意図的に横断させ、文脈間の差異を学習の「駆動因」として積極的に導入するという方法を試みた。具体的には、4ヵ月の学内学習を修了したK大学の1年生90名に対し、臨地実習への事前学習として「他者の入院体験」の語りをまとめさせ、「文脈間の差異」に気づきやすい状況を創りだし、見学を主とする臨地実習での学びを促進しようと試みた。当日は詳細な方法について報告する。

13.聴覚障害のある人の他者とのやりとりと発達との関連：手話による語りの分析から 広津侑実子（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース）

聴覚障害のある人は、コミュニケーションの障害を抱えている（田中，1999）が、手話を用いることで自身の思いを自由に語ることができる（河崎，1996）。筆者は、これまで 20・30 歳代の聴覚障害のある人へ手話を用いたインタビューを実施し、他者とのやりとりの特徴や、やりとりをすることから育まれる自身への見方などについて検討を進めている（広津，2010 など）。本発表では、より年長の聴覚障害のある人の他者とのやりとりの様相や見方・意味づけについて検討する。

研究協力者は D さん（50 歳代・男性・先天性の重度難聴（ろう））である。ライフストーリーや聴覚障害のある人／聴者とのやりとり、手話通訳などについて、手話で半構造化インタビューを実施した。

結果として、他者との（ミクロな）やりとり場面において、D さんがコミュニケーション手段を工夫するなどして、自分の思いを語りやすい場にしていくだけではなく（手話通訳者がいる病院や店舗を選ぶ・筆記をお願いするなど）、職業生活においても自身が語りやすくなるように工夫していた（聴覚障害・手話に関連した職業に就くなど）。すなわち、D さんが主体的・能動的にやりとりの場や条件を設定している姿が見出された。

発達の背景として、小さい頃からきょうだい同士（兄・姉も聴覚障害をもっている）やろう学校のなかで、手話を用いて語っており、自身の思いが通じる経験が蓄積されていたようであった。

14.慢性病と「ともに生きる」という事象をめぐって 今尾真弓（名古屋大学医学部）

慢性病とは、元の健康状態へ回復することはない病気をさす。「死」には直接に結びつかないものの、根本的な治療法は確立されていないため、患者は長期間に渡り、病いを抱えて生きていくことになる。このような慢性病に目が向けられるようになったのは、最近のことである。この背景には 1960 年代から 1970 年代にかけて起こった、病気・医療をめぐるパラダイム転換がある。近代医学は、急性疾患中心の治療モデルの限界に直面するようになったが、慢性病はその端的な例と言える。また、病気を生物学的要因のみではなく、心理社会的要因をも考慮して説明する「生物心理社会モデル」の必要性が認識され、患者の「病いの経験」（Kleinman, 1988）にも目が向けられるようになった。

このような流れの中、慢性病を持つ人の経験に迫る試みも行われるようになり、治癒や回復の見込めない病気と「闘う」よりも「ともに生きる」という事象に焦点が当てられるようになってきている。しかしながら、病む人の経験世界の把握が不十分なまま、「ともに生きる」という言葉が、先行しているようにも思われる。

本発表では、発表者が行った、3 名の慢性病の方へのインタビューを取り上げ、その語りを聴き手である筆者がいかに聴き取り、理解したかを提示する。この試みを通して、慢性病を持つ人々の経験世界を描き出すことを目指す。

15.慢性疾患患者の講演による高校生の見えない障害観の変容

赤阪麻由（立命館大学大学院文学研究科）

見えない障害は社会から理解されにくく障害そのものの苦痛だけでなく、二次的な苦痛ももたらす。自らの病いを開示し、正しい形で理解を求めるためには「わかるもの」にしていく必要があり、病者が声をあげ、病いの語り手として社会に向けて発信していくことが重要である。見えない障害には多種多様なものが含まれるが、代表例の1つとして内臓疾患、慢性疾患である潰瘍性大腸炎に注目した。

講演会は大学院生が講師として参加するプログラムである高大連携講座の一環として行われ、高校3年生35人が参加した。講師は潰瘍性大腸炎の患者である女性であった。

本研究では「見えない障害」とともに生きる当事者の講演から、参加者である高校生の障害観の変容の有無と変容の様相を明らかにすることを目的とし、講演前と講演後に実施された見えない障害のイメージに関するアンケートの回答をKJ法を用いて分析した。

16.ターミナルケアにおける援助者と患者・家族との関わり：医師・看護師へのインタビューに基づく質的研究

向後裕美子（東京大学大学院 教育学研究科 臨床心理学コース）

<問題と目的>

慢性疾患の増加および医療における情報開示の進展により、自覚的にターミナル期を生きる人が増え、エンド・オブ・ライフ・ケアの重要性が高まっている。ターミナル期の患者は病前の人間関係から断絶されがちである（勝見, 1996）が、吉田ら（2007）は、人との関わりや愛情関係をあらわす「人間関係への希望」は、死が近づくにつれ増加することを指摘した。そこで本研究では、援助職者と患者・家族との関わりがより多いことが指摘されている（杉本ら, 2003）在宅の領域において、ターミナルケアに携わる専門職者が、①自身と患者・家族との関わりをどのように捉えているか、②どのように人間関係を支える援助を行っているか、を検討することを目的とした。

<方法>

調査協力者：在宅ターミナルケアに携わる医師6名、看護師5名。

データ収集方法：半構造化インタビュー。1～3回。許可を得て録音した。

分析方法：M-GTAを準用。

<結果と考察>

現在、分析の途上であるが、暫定的な分析の結果として、以下の2点が示唆されている。

- ① 協力者らは、患者・家族との関わりの中で、「専門職として援助する」立場と「人間として向かい合う」立場を併せ持っていると考えられる。
- ② 協力者らは、患者の家族を、「ケアの対象」でありながら「共に患者を支える援助者」であるとも捉えている。

17. 医師と患者のやりとりに潜在するゆらぎを捉える探索的方法：化学療法導入のインフォームド・コンセントにてミックス法を用いた観察研究より

八田太一（京大医院探索医療臨床部）・成田慶一（京大医院探索医療臨床部）・柳原一広（京大医院外来化学療法部）・石黒 洋（京大医院外来化学療法部）・岸本寛史（京大医院地域ネットワーク医療部）・横出正之（京大医院探索医療臨床部・京大医院地域ネットワーク医療部）

インフォームド・コンセント(IC)は、医師の説明と患者の理解を基本的な枠組みとする意思決定プロセスであるが、患者の動機づけと医師患者関係の構築プロセスとの関連に焦点を当てた先行研究は限られている。本プロジェクトでは、ICにおける医師患者関係のダイナミズムを探索的に明らかにするために、ICのやりとりで生じる現象を質的に捉え、『医療に関する達成動機尺度』による動機づけスコアで事例を量的に類型化し、これらを統合するミックス法を採用した。本院外来化学療法部で化学療法を開始するがん患者 22 名の協力を得て、IC 前から IC 後までを観察し分析した。質的研究として、患者の来院から IC 終了までの一連のプロセスに観察者が同席し、観察者が感じた事象を記録し、対話音声記録を逐語化し、これらの観察記録を用いて研究グループ内で臨床心理学的アプローチを援用した事例分析をおこなった。

本発表では、動機づけスコアが相対的に低い患者の IC 事例を 1 つ取り上げ、患者特性、臨床像、時系列での対話の抜粋、対話に含まれる間、観察者の感じた雰囲気を書き記述することで、観察記録から IC のやりとりで生じた現象の再現を試みる。そして、臨床心理学的視座から、医師と患者のやりとりに潜在するゆらぎがどのように立ち現れ、そこからどのような医師患者関係が紡ぎ出されるかを検討する。

18. 障害のある子どもをもつ親の障害受容過程：現象学的アプローチを用いた検討

奥村直子（広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学専攻）・川合紀宗（広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター）

親は子どもにとって最も近い存在であり、親の心理状態が子どもの発達に及ぼす影響は大きい。したがって、障害のある子どもをもつ親の障害受容過程を把握することは、親の心の揺れ動きに応じた支援のみならず、子どもの発達への支援をしていく上でも重要である。本研究では、障害のある子どもをもつ親を対象とし、質問紙と半構造化面接を用いて、親の障害受容過程におけるネガティブな感情とポジティブな感情の両面に着目し、受容に影響を及ぼす契機や要因を現象学的に検討した。研究協力者は、学齢期の障害のある子どもをもつ親 12 名であった。協力者には、質問紙で子育てにおける感情体験について答えてもらった後、それぞれの感情項目に対してより詳しく聞くために、個別に半構造化面接を行った。協力者の回答や語りの内容を周産期、乳幼児期、小学校期、中学校期、高校期の 5 つの時期に分けて分析した。その結果、障害のある子どもをもつ親の障害受容過程には S 型、T 型、U 型の 3 類型あり、いずれも常にポジティブな感情とネガティブな感情を併せもつが、S 型、T 型には年齢とともにポジティブな感情が強まる傾向が認められた。特に親のポジティブな感情が増加するのは、子どもに表情が出てきたり、ことばを話しはじめたりすることで、親が子どもの成長を感じ始めた時期であった。また、教師や地域の人など、第三者の対応によっても親の感情が揺れ動くことが明らかになった。

19.ある障がい者きょうだいの社会の見えと語り合いにおけるその提示方法

原田満里子（東京大学大学院・日本学術振興会）

本発表では、障がい者のきょうだいである二ノ宮さん（仮名・当時大学生）が社会や自分の周囲をどのように捉えてきたのか、その変遷を追っていくと同時に、二ノ宮さんが筆者に対してそれらを語り合いの中で提示する意味やその方法について探求していく。筆者と二ノ宮さんは障がい者のきょうだい同士として「語り合い」（大倉 2008）を 7 回（18 時間）行なっている。その内容はきょうだいの関係、家族や将来のことなど多岐にわたる。

結果として、幼稚園の頃のいじめをきっかけに、悪目立ちをしないよう周囲に同調しながら生きてきた二ノ宮さんは、障がいをもつ妹に起因した不快な経験を直接してはいないものの、まわりを「敵」と認識し、道徳の時間に「障がいを持っている人をみたら助けよう」と「きれいごと」をいうクラスメートに怒りも覚えていた。大学生になった今もその思いが薄れることはなく、「一般の人は障がい者をどう受容していくのか」という疑問を抱えながら、普段感じた嫌なことなどをその都度語り合いで提示し、自分の感覚がまっとうなのかを確かめているかのように、筆者の意見や感想を求めることも多かった。ここには、青年期のただ中にある二ノ宮さんの社会への反発心や、自分と妹との関係のわからなさといったアイデンティティ確立の課題といった様相が大きく現れていると考えられた。発表では、さらにこの事例から障がい者のきょうだいの生の特徴を捉えていきたい。

20.産後うつ病発症に関連するアタッチメント・スタイルの構成要素：夫との関係性に着目して

池田真理（東京大学大学院医学系研究科）・上別府圭子（東京大学大学院医学系研究科）

＜目的＞ 同じアタッチメント・スタイルを持つ妊婦でも、産後うつ病になる者とならない者がいる。アタッチメント・スタイルを評定するアタッチメント・スタイル面接（Bifulco, 1998：以下 ASI）の面接内容を質的分析することによってその違いを明らかにする。

＜方法＞ 対象は、都内大学病院 1 施設において、研究の趣旨に同意した妊婦である。妊娠後期に ASI を実施し、産後 1 ヶ月に産後うつ病の診断面接を実施した女性で、アタッチメント・スタイルが「恐れ型」と評定された 12 名と「引っ込み型」と評定された 12 名の ASI の逐語録を分析対象とした。分析は Mayring (2010) の質的内容分析を参考にした。なお、本研究は研究倫理審査委員会にて審査を受けて承認されている。

＜結果と考察＞産後うつ病群は、夫への打ち明けの中で、妊娠期や出産の悩みに関しては報告程度で、気持ちを含めては話していなかった。打ち明けをしていた場合でも共感的な応答が少ないことが共通していた。逆に非産後うつ病群は体調の悩み、流産等のつらい思いを打ち明けて、その際に夫から共感的な応答を得ていた。産后面接の結果からは、非産後うつ病群は、出産というイベントの後に、夫に悩みを相談する、育児協力を頼む等、アタッチメントの希求行動を起こすことで、夫から適切な応答を得ることができて新たに満足できる人間関係を構築する体験をしていた。不安定型のアタッチメント・スタイルが肯定的な方向へ変化する可能性を示唆した。

21. 変容過程を複数のアプローチを用いて捉える試み：インタビューから得られた家庭内役割分担に関わる語りの分析から

滑田明暢（立命館大学大学院）

インタビュー調査は質的研究法を代表するデータ収集方法のひとつである（滑田, 2011）。インタビューから得た語りをもとに行われる研究の理論的到達点の例として、経験や行動、心理的現象の変容過程を捉えることが挙げられる。しかし、変容過程を捉える視点は、少なくとも二つ存在するといえる。一つは、複線径路等至性モデル（サトウ, 2009）等に依拠した、実際に流れている時間をもとに経験の変容を理解する視点や方法であり、二つは、ナラティブ分析等の手法を用いながら、語りのなかで起きている出来事の変容を捉える視点や方法である。どちらも当事者が経験した事実や現実のなかでの時間的変容を捉えようとしているアプローチである。本研究は以上の二つのアプローチを用いて同一のインタビューデータを分析し、得られる結果にどのような差異が存在するのか、得られた結果を合わせることでより現象の理解が促進されるのかを検討する。考察する題材として、家庭内役割分担の変容過程を明らかにすることを目的としたインタビュー調査の語りテキストを用いる。インタビューでは、実際の家庭内役割分担の変容を巡って、自らが抱いた規範が崩れる瞬間や行動に変化を起こそうとする過程、あるいは継続する際の気持ちなどが語られていた。複数のアプローチを併用することによって新たな発見につながるのかどうかを考察する。

22. 医療観察法制度における入院治療中の青壮年期の患者の体験：治療に取り組むことへの意味づけ

小松容子（国立精神・神経医療研究センター/マンチェスター大学）

医療観察法（正式名称は、「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療および観察等に関する法律」）における入院治療は平成 17 年から行われている。法の施行から 5 年経過するが、入院治療を受けている青・壮年期（20～39 歳）の患者の体験についての研究はまだなされていない。青・壮年期は社会的な準備を始めたり、社会・精神的な活動を図る時期である。本研究では、この時期にある患者が入院治療に取り組むことにどのような意味を見出すのか、あるいは見出して取り組んでいるのかに注目した。研究デザインは、解釈現象学的アプローチ(Van Manen, 1990)を用い、青・壮年期にある 4 名の患者に半構成的インタビューを実施した。インタビューは録音し、逐語録を作成した。収集したデータは、解釈現象学的分析(Van Manen, 1990)を行い、意味ごとに分類した。この分析の結果、「社会に出るための訓練」「自分を試す場」「可能性を伸ばす」「身体機能の保持」の 4 つの意味づけが明らかとなった。本発表では、研究対象となった患者による入院治療へのこれらの意味づけとその構造を提示する。

23.過量服薬経験者の過量服薬の効果に対する意味づけ：「過量服薬によって得たもの／失ったもの」についての語りから

砂谷有里（明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻）

精神安定剤や睡眠薬などの処方薬および市販薬を規定以上に飲む「過量服薬」は、リストカット・アームカットなどの「自傷」と同様に、「故意に自己の健康を害する行為」として規定されている。

過量服薬は、行為者の自殺念慮の強さの程度という点からも（過量服薬を行う者は、自傷行為を行う者と比較して行為の目的に「死にたい」を挙げる比率が高いとされる）、行為者によって行為の結果の予測がつきづらいという点からも、自傷以上に自殺の危険因子となる行為とされている。それにもかかわらず、自傷に関する研究と比較して、過量服薬に関する研究はいまだにわずかである。

本研究では、過量服薬という行為が、行為者によってどのように意味づけられているかについて詳細に検討したい。発表者が実施した、過量服薬の経験をもつ者を対象に行ったインタビューデータの中から、「過量服薬によって得たもの／失ったものは何ですか」という問いに対する回答を分析し、発表する。それにより、過量服薬者の行為の背景にある思い・考えを明らかとし、適切な理解と支援・援助方法の提案につなげたい。また、発表者が前回発表した「自傷によって得たもの／失ったものは何ですか」という問いに対する回答との比較を行うことで、過量服薬と自傷との共通点・相違点についても検討したい。

24.暴力更生プログラムの導入がDV被害者の主観的認知に与える影響について

長船まどか（安田女子大学大学院教育学専攻臨床心理学コース）

親密な関係性の中で起こる女性に対する暴力であるドメスティックバイオレンス(以下、DV)は、深刻化している問題の一つである。内閣府の調査(内閣府,2011)によると、平成 23 年度の配偶者暴力相談支援センターにおける相談件数は 77334 件にも上り、その数は年々増加の一途を辿っている。さらに、DV による被害を受けた女性は長期反復型のトラウマを形成しやすく、PTSD やうつ病を高確率で発症するという示唆されている。

このような現状を踏まえ、日本では DV 防止法が制定されるなど、様々な取組みが行われているが、国での取り組みとは裏腹に、女性と加害男性の間には共依存関係が成り立っている場合が多く(武者・大田,2009)、加害者の元へ自ら帰ってしまったたり、助けを求める気力を失っている女性も多く存在していると考えられる。

そんな中、近年注目されているのが、暴力更生プログラムである。暴力更生プログラムとは、暴力を振るう男性を対象とした再教育プログラムのことで、自らの男性性や人間関係の構築について学習のし直しを行う場(飯野,2006)である。暴力更生プログラムが有効に機能することによって、DV 加害者の行動や認知を再構築する手助けになるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、暴力更生プログラムを受講している DV 加害者本人との半構造化面接を通して、暴力更生プログラムの実践を検討し、暴力更生プログラムの導入による男性の主観的な変化を明らかにすることを目的とした。

25.心理療法における内的ナラティブの生成とその特徴について

小泉 誠（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）・岡本祐子（広島大学大学院教育学研究科）・森岡正芳（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

心理療法場面において、クライアントは様々な話題を語る。しかし、それは単にクライアントが一方的に紡ぐ物語ではない。セラピストという心理療法場に積極的に参与する聞き手との関係性、コンテキストにおいて、いわば共同生成されるものである(森岡,2008)。Angus, Levitt, & Hardtke(1999)はクライアントとセラピストにより共同生成される語りを、外的、内的、内省的の3つのナラティブモードに分類し、そのプロセスの構造を分析する枠組みを提唱している。本研究では、その中で内的ナラティブに焦点を当て、分析を行う。ここでの内的ナラティブとは、クライアントが主観的経験を再体験する過程のことを指す。心理療法のアプローチにより過去の体験した感情を想起させるか、あるいは現在の感情に焦点づけるかという相違はあるものの、自己あるいは他者についての新たな意味の生成やマクロナラティブの変容の基礎として感情の発露が重要であるということが、心理療法研究者の共通理解となっている(Angus & Hardtke, 1994)。分析は小泉・岡本・森岡(2011)で得られた試行カウンセリング9事例のうち、3事例を取り上げ、内的ナラティブの生起が何によって引き起こされているのか、またその感情がどのように面接の場で表現され、その後の語り影響をもたらすのかを明らかにする。

26.子どもの遊戯療法による親への橋渡し機能

舛田亮太（久留米大学医学部神経精神医学講座）・松岡美智子（久留米大学医学部神経精神医学講座・小児科学講座）・永光信一郎（久留米大学医学部小児科学講座）・前田正治（久留米大学医学部神経精神医学講座）・内村直尚（久留米大学医学部神経精神医学講座）

児童・青年の興味・関心を重視し、現実世界への適応を促す際に重要とされているのが、遊びや絵画、音楽、イメージといった非言語的体験と言語的体験をつなげる面接作業である。これらは「橋渡し機能」として、精神分析の立場から北山（1993,2001）により理論化されている。これまで舛田(2009)では、青年期後期の心理療法事例をもとに内的世界から外的世界への適応を促す「橋渡し機能」を検証してきた。しかし、幼児・児童・青年期前期への遊戯療法事例は未検証であり、またその際重要視される子どもへの援助が親もしくは家族への援助にどのようにつながるか、いわば「子どもの遊戯療法による親への橋渡し機能」は検証されていない。

久留米大学医学部付属病院では精神科—小児科—心理カウンセリングセンターが協同して子どもと親への援助を目指す「子どもの心のクリニック」が2007年5月より開設されている。援助対象は児童虐待、DV、養育者の喪失、犯罪被害といった重篤な心的外傷体験を有する事例、知的障害や発達障害を有する事例まで様々である(向野(松岡)ほか,2009)。そこでは、子どもへの薬物療法だけでなく、各種の心理検査や遊戯療法、教育・福祉・矯正機関との連携等の環境調整まで多方面の援助が視野にいれられる。本発表では、子どもへの関わりが親への援助につながった事例を提示し、「子どもの遊戯療法による親への橋渡し機能」を検討したい。

27.不登校児への対応：異なるケースに共通して存在する概念

土田弥生（茨城県スクールカウンセラー）・石川清子（東京福祉大学大学院）

朝からぐずり着替えも食事も遅々として進まない。美里の様子を見て覚悟を決めた。「ひきずってでも学校に連れて行こう。」ソファにしがみついた美里の手を振りほどき、引きずるように玄関までたどり着く。くつをはかせ、ランドセルを背負わせ玄関のドアを開けた。腕をつかみ、玄関からやっと連れ出してはみたものの、美里は泣き叫び、あらん限りの抵抗を試みる。やっと2メートル先の駐車場までたどり着いた時、「いったい私は何をしているんだろう。」という虚無感に襲われた。学校には行ってほしいけど、このままだと自分が壊れてしまうのではと思った。「育て方が間違っていたのでは」「甘やかしすぎたのか?」「ちゃんと美里をみてあげてなかったのでは?」頭の中を不登校になる前の美里のことがぐるぐる回った。今思うと、本当はこの日からが美里の不登校の始まりで、長く苦しい日々のスタートだった。

上記文章は筆者が関わることになった小学4年生美里（仮名）さんが再登校に至るまでの家族との苦闘の日々を父親が綴った手記の一部を抜粋したものである。

美里さんが登校出来るようになったと考えられる要因が、父親の手記と父親と筆者の面談内容の分析から明らかになった。

さらに小学校の不登校対策担当教員による実践内容の分析を通して、両者にはある共通点が存在することが判明した。その共通点を明確にすることが今後の不登校対策の一助となるのではないかと考えられる。

28.スクールカウンセラーの現状と問題点に関する一考察：カウンセラーに対する生徒や教師の認識・評価に注目して

神山拓哉（茨城大学大学院教育学研究科）

本研究では、スクールカウンセラー（以下、SC）に対する中学生の認識・評価がどのようなものであるのかについて質的調査を行った。その認識・評価の具体的な記述を通して、SCの現状や問題点を考察することを目的とした。

2002年度から文部科学省により「スクールカウンセラー活用事業補助」が始められ、SCが小学校・中学校・高校に派遣されるようになった。学校におけるSCの有用性が認められる一方で、SCと職員の協働や勤務時間・勤務体制についてなど問題点もいくつか指摘されている。これらに関連する研究として、SCに対する評価を取り上げたものがある。ただしそれらは、教師や保護者からの評価、あるいはSC自身の評価であり、生徒からの評価に関して質的に研究したものは少ない。

そこで本研究では、生徒自身からの認識・評価に注目した。研究方法としてフィールドワーク（参与観察とインタビュー）を用いた。私はある公立中学校で約1年間ボランティアとしてかかわってきた。その中で、生徒指導主事の先生にインタビューを、また、生徒に対してグループインタビューも行った。

本発表では、生徒のSCに対する認識・評価の内容、あるいはSCに対する生徒の認識・評価が高くはなくても、必ずしもSCが有効に機能していないわけではないという考察など、本研究を通して得られたものを報告する。

29.当事者の語りから見るひきこもりという経験：社会参加までのプロセスにおける葛藤 岡部 茜（立命館大学社会学研究科）・青木秀光（立命館大学社会学研究科）・深谷弘和（立命館大学社会学研究科）

【はじめに】2010年7月に内閣府は「若者の意識に関する調査」を行い、その中で「ひきこもり群」が約70万人、「ひきこもり親和群」が約155万人とそれぞれ推定されることを示した。ただし、ここで示される定義は、便宜的かつ操作的に捉えられるものであり、若者のひきこもる意味を見出すことが難しい。ひきこもる若者の育ちを保障していくためには、彼らの意味世界に注目し、彼らが自己の現状と向き合う力を見出すことが必要となる。

【目的】本研究は、ひきこもる若者の語りを分析することによって、便宜的かつ操作的にではなく、内的なひきこもりの経験を理解することを目的とする。

【方法】調査は、A県にある地域若者サポートステーションと、支援機関Bの利用者を対象とし、2010年11月から2011年1月の期間に行った。この調査では、半構造化面接で聞き取りを行い、得られたデータをM-GTAを用いて分析した。

【考察】この分析から、ひきこもる若者の語りから閉鎖的な生活スタイルが浸透するまでと、社会参加へ向かうまでの幾つかの概念を導き出し、ひきこもり過程の仮説的図式化を行った。また、親や同年齢集団、普通という概念等の間で葛藤や、徐々に社会に参加していく過程での、ひとまずの一步を踏み出す中での揺れ、家族内での役割の獲得から親に対する感情の柔和化への変化等が分析から見出された。その他、各概念や詳細については当日報告を行う。

30.「学校観の脱構築」実践の研究：子どものネガティブな戦略的適応を超えるナラティヴ・アプローチ

山崎一希（茨城大学大学院人文科学研究科）

今日、あらゆる能力の育成を学校教育に求める過度な「教育依存」が進むと同時に、その裏返しとして「教育不信」も過度なものになるという、教育観の両義性がますます高まっている。学校の当事者たる子どもたちも、親などの先行世代やマスメディアの語りを通してその教育言説の渦中を生きている。このことは、学校に「不信」を抱きながらも「依存」せざるを得ないという、子どもの「ネガティブな戦略的適応」とでもいえる身体性を生み出す。この状況を脱するには、子どもたちの学校観を、彼らが生きる学校の「今・ここ」を起点に脱構築する試み——「学校観の脱構築」実践が必要だと考えている。

その方法論として、ナラティヴ・アプローチの先行研究は多くの示唆を与えてくれる。すなわち、学校教育の「ドミナント・ストーリー」を相対化し、教師と子ども、あるいは外部者も関わりながら新たな学校観を協働生成するような具体的なアプローチを、実践的に探りたい。

同時に、水戸市内の小学校で展開される「放課後の学校」というプロジェクトにおけるアクション・リサーチを試みる。これは現代美術作家の北澤潤らによる活動で、放課後の学校施設を利用し、子どもたちとの対話を通してオルタナティブな学校像をつくりだそうというものである。プロジェクトの成果は紙媒体などの形で教師や地域住民にも随時共有される。ここでの協働的实践の経過を報告したい。

31. 新任小学校教師の経験と変容過程

曾山いづみ（東京大学大学院教育学研究科）

ベテラン世代の教師の大量退職に伴い、東京都の小学校では新任・若手の小学校教師の割合が増加している。新任期はその後の教師の発達的基础となる重要な時期であることが指摘されているが、新任期の研究は回顧的なものが大半となっている。

本研究の目的は、新任小学校教師がどのような経験をしているのか、それらをどのような意味づけていくのか、それらを通してどのように変容していくのかをプロスペクティブな視点から明らかにすることである。

具体的には、新任小学校教師を対象に1学期（5～6月）・夏休み・2学期（9～10月）・3学期末以降（3月末以降）の計4回の縦断的インタビューを行い、複線経路等至性モデル（TEM）を用いて分析を行った。本発表では、特に、複数回インタビューを行うことによる語りや経験の意味づけの変化に焦点を当てて検討したい。語りや意味づけが変化すること、あるいは変化しないことから、新任小学校教師の変容のありようについて考察することが本発表の目的である。

32. 私立学校に対する親の態度の階級差

金 鎮淑（釜山国立大学）・宋 娟珠（釜山国立大学）

私立学校に対する親の態度を階級別に分けて考察する。階級は上層階級、中間階級、庶民階級と分類した。その基準は相当な資産や自分所有の事業体があって、子どもを別の職場に就職させる必要がない場合は上層階級に、子どもの就職の心配のないくらいの相当な資産はないのに、生活するのには余裕があって、子どもを私立学校に通わせている場合は中間階級した。自力で生活するのはできるのに、子どもを私立学校に通わせるくらいの経済的な余裕はない場合は庶民階級に分類した。

研究の方法はインタビュー方法を取って、ブルデューのハビトゥス理論を借りて、親の階級と私立学校に対する態度を分析した。その結果、私立学校の志向性が強く、公立学校に対して警戒心を持つ中間階級の親は、生徒たちの家庭環境が類似している安定性と勉強中心の雰囲気と私立学校のよさと語る。それは子どもを良い学歴を通してよい職業に就けさせたい中間階級の「上昇志向」と関係があるとみられる。経済的な理由で教育費の負担が重い私立学校ではなく公立学校を選ぶ庶民階級の親は、庶民階級の「プラグマテックなエートス」を持っているようである。エスカレーター制の私立学校に通わせる上層階級の親たちは、選択理由として「友人関係」や「学校の教育精神」を挙げる。こらは、庶民階級が重んじる必要性や中間階級が志向する社会的な上昇から自由になれる存在条件からくる「ゆとりのエートス」の発現であるだろう。

33.専門職大学院ビジネススクール院生視点の授業満足基準～成人教育（者）は個性をどう扱うのか

豊田かおり（東京大学大学院教育学研究科）

日本の専門職大学院は 2003 年度よりスタートし、ビジネススクールもその一つとして次々と開校されている。しかし大学院が実務レベルを支援する制度は、医系、理系分野を除き、人文社会系分野においてはいまだ未整備なままであり、教員が直面する課題も多い。ビジネススクールでは、様々な業種・職種の第一線で活躍する個性豊かな社会人が、授業により 4 人から 20 人ほど一つ教室に会し、教員が提供するテーマに沿い 1 コース 14 回の学びを深めるのが一般的であろう。そこでは成人はどのように学びを深めていくのか。専門性の深さも価値観も興味も違う社会人を相手に、教員はどのように授業を組み立てればいいのか。そこには、成人教育ならではの特性があるはずである。ビジネスに役立つ高度な専門スキル教育と、成人の学習を促進する授業デザイン、更にビジネス教育の社会的意義と公共性を担保する理念など、日本におけるビジネス教育が成人の学習文化の一部として生成され、定着し、社会的評価を受けるには、今後教育学が果たすべき役割は大きいはずである。この研究は、あるビジネススクールの協力を得て、学生が授業改善に寄せた様々な感想や提案を分析し、個性豊かな個人がどのような価値観と期待をビジネススクールに寄せているのかを研究したものである。授業満足基準をモデル化することで、科目特性や個性を超える汎用性の高い成人教育デザインの一指針を提示することが本研究の意義である。

34.世代間交流が子どもの高齢者表象に与える影響 2

村山 陽（慶應義塾大学大学院）

今日世代間の断絶が問題視されている中で、地域の世代間交流の効果を検討することは不可欠である。これまでの高齢者イメージ研究では、SD 法による形容詞対(例えば、弱々しい・たくましい)による評価(肯定的

/否定的)が用いられてきた。そのため、子どもの高齢者イメージの分析は限られてしまい、高齢者イメージの内容およびその生成と変化を説明する理論的根拠は示されてこなかった。こうした問題について、社会的表象理論(Moliner, 2005)にもとづき、高齢者イメージを「自由記述」や「描画」から捉えることで、児童がもつ多様な高齢者表象を明らかにすることを目的とした。本研究では世代間交流として、東京都健康長寿医療センター研究所における研究事業である高齢者による絵本の読み聞かせボランティア活動「りぷりんと」(REPRINTS: Research of Productivity by Intergenerational Sympathy)に注目した。具体的に、川崎市立 A 小学校で実施している小学生と高齢者との交流授業に注目し、授業開始前と授業終了後で児童が抱く高齢者表象がどのように変容するのかを検証した。対象小学校の児童に質問紙(事前調査・事後調査)を配布し、高齢者の表象について自由記述および絵画描写をもとめた。その結果、交流授業を通して、児童が抱く高齢者表象に変化が生じることが認められた。

35. 「伝える」という仕事：動物園 1 日飼育体験における飼育担当者の大人と子どもに対する語りの特徴の違いから

町田佳世子（札幌市立大学デザイン学部）・河村奈美子（札幌市立大学看護学部）

本研究では、大人と子供を対象とした動物園の体験型教育プログラム「1 日飼育係」において、その成功要因の 1 つと考えられる飼育担当者の「導き手」としての機能を明らかにすることを目的として、体験中の飼育担当者の語りの内容や方法を分析・考察した。

発表者らはこれまで、飼育体験の満足度は大人も子供も常に高く、動物や飼育作業への認識が大きく変化すること、その要因として飼育担当者の言動が影響することを参加者の語りやアンケート結果から見出してきた。本研究では、飼育担当者が実際にどのような内容や方法によって、参加者を動物や飼育の理解に導いているのかを明らかにすることを試みた。協力を得られた飼育担当者の飼育体験実施中の発話を録音し文字化した上で、参加者が大人の場合と子供の場合に飼育担当者の語りがどのように異なるのかを分析した。体験中の動物に関する共通の話題を抜き出して比較すると、子供に対しては、動物の習性を子供が日常で経験している事柄にたとえる表現が多く、また動物の気持ちを「代弁する」方法により、子供を動物の立場に引き込んでいた。それに対し参加者が大人の場合は、飼育員がどのように動物と関わるかについての説明や自らの飼育哲学を語ることによって、飼育の仕事を通して動物の習性を伝えていることがわかった。これらの結果は、体験前後に参加者に実施したアンケート調査での動物や動物園の印象変化の違いとも対応していた。

36.1 歳児の「わからなさ」と保育実践

古賀松香（四国学院大学）

乳幼児期の子どもの姿には、明確な思いや意図がわかりにくいものが多い。しかし、その保育は常に現在進行形ですすんでいく。1 歳児という自我の芽生えの時期でありながら、まだ言葉で十分に自分の思いを説明できない時期には、その「わからなさ」が一層際立つ。保育者はその「わからなさ」を目の前にして、子どものどのような様子を重要な姿であると感知し、思考をめぐらせ、保育行為をかたちづくっていくのだろうか。保育者は前日までの子どもの姿とやりとり、またそのときの子どもの反応について、体感を蓄積してきている。「わからなさ」を眼の前にして、前日までの体感や現在の様子を手がかりに、試行的にかかわるが、「わかった」という瞬間は容易にやってこない。かかわりのなかで子どもの行為にある思いや意図に関する仮説が生成され、試行的に保育行為がかたちづくられていくが、時には一層大きな「わからなさ」を抱え込むこともある。

本研究では、ある保育所の 1 歳児クラスにおける継続的な保育観察および保育者へのインタビューを行い、保育者が「わからなさ」に出会う場面について検討する。「わからなさ」が意識化される場面とはどのような子どもの姿と保育実践が展開されていたのか、保育者は「わからなさ」と保育実践をどう捉えているのか。このことを通して、保育者の暗黙的と言われる実践知のありように近づきたい。

37. 幼稚園のあいさつのルーティンにおける子どもと先生の役割交換：5 歳児クラスあいさつ当番の分析から

鈴木幸子（静岡英和学院大学）

本研究では、幼稚園の「降園前の集まり」を対象に、あいさつのルーティン〔先生(主導)の役割「明日も元気に幼稚園にきてください」→ 子ども・先生(参加)の役割「さようなら」〕の役割を交換しあいさつをする、当番の子どもの行為を記述し、分析することを目的とする。観察は、5 歳児クラスの 4 月中旬から 7 月中旬の 3 か月間週 1 回行い、ビデオ撮影とフィールドノートで記録した。

ルーティンは、定型的な行為の連鎖を指し、複数の人に共有されているやりとりの仕方を学び、繰り返されることでその活動についての知識を得ていくと考えられていることなどから重要である。またルーティンは、定型性のために次の行為が見通せることから、活動を主導する役割と参加する役割の交換を容易にする。

研究協力者の 5 歳児クラスの子どもたちは入園から長い間、あいさつのルーティンを繰り返してきていることや、3 歳児クラスの子どもが先生の役割の台詞を発言する報告(鈴木, 2010)があることから、子どもの役割と先生の役割の交換は容易であると考えられる。

しかし、あいさつ場面では先生が子どもたちの状況に応じてマナーに関する発言をすることも観察されており(鈴木, 2010)、子どもが他児らの状況に応じて発言をすることは難しいのではないだろうか。また、クラス全員の前で先生の役割を担うことは緊張や不安などの心情が伴うと思われる。そこで、他児らの行為と当番の心情も含めて分析する。

38. 幼児の挑戦的活動の展開プロセスに関する研究

境愛一郎（広島大学大学院）・中坪史典（広島大学大学院）・中西さやか（広島大学大学院）

本稿では、幼児にとって達成が困難または未知の活動を挑戦的活動と定義し、幼児が挑戦的活動をどのように開始するのか、また、途中どんな選択肢や課題などに直面し、それらに対してどう対応していくのか、を検討することで、幼児によって挑戦的活動が展開されていくプロセスを明らかにすることを目的とする。

幼児が挑戦的活動を経験することは、彼らの「発達の先端」を刺激し（全米乳幼児教育協会 1996）発達を促進するとして重要視されている。そのため、挑戦的活動の展開プロセスを経験主体である幼児の視点を踏まえて明らかにすることを目指す本研究は、このような活動によりもたらされる幼児の経験の実態を捉えるとともに、幼児理解に則した活動の設定や援助の方略を検討する上で、資するものであると思われる。

研究の方法としては、まず、データ収集の手続きとして、挑戦的活動を促進する遊具の一つである「木登り遊具」に着目し、そこでの幼児の活動の様子をビデオカメラで記録する。分析の手続きでは、収集した映像を比較・検討することで、幼児の挑戦的活動の展開に関わる構成要素とその関係性を抽出していく。これまでにを行った研究では、挑戦的活動の誘発要因（境・中西・中坪 2011）と阻害要因（Sakai・Nakanishi・Nakatsubo 2011）がそれぞれ明らかとなっている。本稿では、これら諸要因を再検討した上で、各々の関係性を整理し、幼児の挑戦的活動の展開のプロセスをモデルとして描き出すことを試みる。

39.母子関係研究へのポリフォニー（多声的接近）

小島康次（北海学園大学）

母子関係研究はこれまでアメリカを中心として愛着研究として膨大な研究成果を生み出してきた。日本でも 1980 年代から 90 年代にかけて、東洋、三宅和夫、柏木恵子、高橋恵子を代表とする日米共同研究によって愛着研究が一定の成果を上げたものと見られる。しかし、実際には大規模な共同研究プロジェクトによって大量のデータが採集されたにも拘らず、日本の母子関係に対して实际的な示唆が得られたのか疑問が残る。母子関係のあり方に関する日米の文化的背景の相違が、単に、技術的なレベルのものでないのは勿論のことであるが、価値観といった共時的な文化差だけでも説明できない、より長期にわたる精神風土の違いに根差すのではないかという問題意識をもつに至った。それは母性原理による文化的特色であると考えられる。

40.メターコントラクトのダイナミックスの観点から見た大人と子どもの共同活動の分析

朴 東燮（新羅大学校）

メターコントラクト(Meta-contract)とは、特定のコミュニケーションの参加者たちが対話の主題を扱うやり方であり、関連した背景の知識であり、そしてその場で使われることばの意味をめぐる交渉の道具だとしている。たとえば、教室の教師と生徒の間には、ダイダクティックコントラクト(Didactic contract)が発生する。このコントラクトでは、まず教師が生徒たちに質問をし、生徒がそれに答え、最後に生徒たちの答えに対して教師がコメントをしたりフィードバックを与えるというコミュニケーションのパターンが頻出する。一方、子どもの問題解決能力などをテストする心理学実験室場面では、心理学実験者と子ども被験者の間には実験コントラクト(Experimental contract)が働き、実験者が被験者に質問し、被験者はその質問に答えるが、実験者は答えに対するコメントやフィードバックを与えない、というコミュニケーションパターンが実践される。

本発表では、メターコントラクト論とその含意を大人が参加する幼児のリテラシー学習の場面に適応してみたい。そうすることで、従来のメターコントラクトという概念を採用する研究がメターコントラクトを事前に決定可能だと前提したモノローグ的な観点を批判でき、メターコントラクトの動揺と変化そして共同構築的性質を明らかにすることができよう。そしてメターコントラクトのダイナミックスと共感や情動の一体感との関係などを明らかにし、共同活動を扱う概念の精緻化を試みる。

41. 小学3年生の英語活動にみられる子どもの質問：ALT とのコミュニケーションに対する質問とは

黒田真由美（京都大学大学院）

小学校における英語活動の指導方法は徐々に構築されつつあり、カリキュラムの開発や英語ノートの作成、指導者の講習が行われている。ALT に目を向けると、ALT 同士での研修は行われているものの、指導経験が浅い場合が多い。日本の教室文化にもなじみがなく、活動を展開する中で困惑することもある。そのため、担任と構築した関係の中で日々行われている授業とは異なる問題を教師も子どもも抱えることになる。そこで、本研究では、子どもが英語活動で直面する問題を具体的に把握することを目指す。英語の知識に関する疑問ではなく、英語活動に取り組む中で子どもが直面する疑問を明らかにする。これにより、ALT が主導する小学校の英語活動における子どものとまどいを捉え、英語活動をより円滑に進めるための示唆を得る。

小学校3年生を対象として英語活動を観察した。この小学校では、観察当時、3年生から英語活動が行われており、初めて ALT 主導の英語活動に取り組む子どもの様子を捉えることを試みた。ビデオ記録とフィールドノーツを基に、ALT の行動や発話に関する子どもの質問の内容と質問の相手について分析した。

その結果、ALT が英語活動を進める中で持ち込むルールに関する質問だけではなく、ALT の教室内での不適切な振る舞いに対して質問する様子が見られた。教室での適切な振る舞いを重んじる学級であり、不適切な振る舞いには子ども同士の場合直接的に注意を促す。ALT に対しては質問することにより間接的に注意する様子が見られた。

42. 媒介された行為の創出による世界と知覚の相互生成

松本健義（上越教育大学大学院）・井上啓一（上越教育大学大学院）・水谷奈央（上越教育大学大学院）・関根淑充（上越教育大学大学院）・竹内 淳（上越教育大学大学院）・平沢大樹（上越教育大学大学院）・藤田仁美（上越教育大学大学院）

小学校の授業における子どもの学習活動は、ものや道具を用いた媒介された行為と、言葉や語りに媒介された行為との、2つの媒介された行為により形成されている。子どもが他者とともにこの2つの媒介された行為をつくり、つくり変えていく媒介された行為の協同的創出過程において、ものや道具を用いた経験を創出する過程と、言葉や表、絵等を用いた語りや書かれたものを生成する過程との、2つの質的に異なる過程の重層化により、経験や知覚といった身体や行為の側の変容と、世界の側の現象とが共起する。

本発表では、算数や国語などの小学校での学習活動を、他者との協働による媒介された行為の創出過程という視点より記述分析を試みることににより、世界と知覚や経験とが相互的に生成される過程がどのように観察可能となるのか、その試みを示したい。

43. 小学校時代の自然体験やまちづくり学習を中学生がどう振り返り、意味づけるか

米川久子（茨城大学大学院人文科学研究科）・伊藤哲司（茨城大学人文学部）

現在、自然体験をベースとした環境教育に対して、2つの提言がある。持続可能な未来の実現に向けた環境教育カリキュラムの質的变化を必要とするという提言（フィエン、2001 [1993]）と小学生が地球環境問題に取り組んだ結果、乖離からくる「エコフォビア（自然恐怖症）」を起こしてしまうという提言（ソベル、2008）である。

そこで、小学校における自然体験を基盤とした環境教育についてあらためて考え直すことが必要と考え、U市で行われたNPO・行政・学校連携の「学校ビオトープから始まるまちづくり学習」を新しい環境教育のモデルとして取り上げ、環境教育の再考を試みた。

具体的には、中学生に、小学校時代の体験を現在どう意味づけているかを語ってもらい、小学校時代の環境学習が持続可能な未来をつくるためのSLE（Significant Life Experience：環境的行動につながる重要な体験）となったかどうかを検討した。

方法としては、交流学習を参与観察し、中学生2名の言葉から小学生時代の学習がSLEであったと判断するために、ライフストーリー・インタビューを実施した。また、その学びの場を構成した指導者の飯島氏にインタビューし、さらに、当該の中学生にもう一度インタビューを行った。児玉（2007）のアンケート調査の結果を分析枠として用い、K小の「環境保全活動への意欲の高さ」「話し合い活動の参加意欲の高さ」を語りから詳細に検討した。これらを通して、新しい環境教育カリキュラムの1つを提起する。

44. 高校数学教科書の「語り口」に関する言説分析研究：新しい教科書の構想

ハツ塚一郎（熊本大学教育学部）・河合直樹（京都大学大学院人間・環境学研究科）

数学教科書も「理数離れ」「数学嫌い」を生み出す一因である。数学教科書は、学習者、教師、数学界、教育行政等を媒介する結節点の位置にあり、児童生徒の学習の遂行や教育目的の明示などに重要な役割を果たしている。しかし、現行の高校数学教科書は、「学習者に対する積極的な語りかけ」を極度に欠落させた特異な言説体となっており、学習者が数学に参入することを排除している。発表者は、数学教育関係者へのインタビューと、現行教科書の言説分析を通して、上記の問題を検討してきた。今回は、教科書本文の「語り口」に着目し、そこにみられる特徴と、学習者のための代替案とを提示する。現行教科書本文における述語の出現頻度をカウントしたところ、「とする」「という」など、無色透明で中立的な表記が圧倒的に多く使われていた。しかし、このような語り口は数学教科書に不可欠のものでは必ずしもないことを、かつて刊行されていた三省堂版の数学教科書と比較することで示す。三省堂版では、学習者に対する積極的な呼びかけが多数用いられており、「数学知や共同学習者に能動的にアクセスするための媒介項」となることを意識した語り口が採用されている。三省堂版教科書の分析によって得られた知見、および、それをういた現行教科書の書き直し（語り直し）の試みを提示し、多様な語り口をもった教科書の可能性と数学学習への新たな糸口を示す。

45. 青年期の親子関係の変化：反抗期を中心に

須崎暁世（神戸大学 人間発達環境学研究科）

従来、青年期は疾風怒濤の時期であり、特に青年期前期（思春期）においては、真の自己を確立するために青年は親や教師に対する反抗すると考えられてきた。第二反抗期と呼ばれるこの反抗によって、青年は、自立すると同時に、親子関係の再構築を図ると考えられてきた。

しかし近年、青年期における親子関係は変化し、反抗自体も変化し、とらえることが難しくなっている。そのため本研究では、青年にインタビューを行い、青年自身にとっての反抗の意味づけ、青年自身の変化、親子関係の変化を質的に捉え、質問紙調査のみでは見えづらい青年の変化と青年自身にとっての意味合いを探る。また、反抗的な感情を感じなかったという調査協力者においては、反抗がなかった理由や、思春期から現在に至るまでの親との関係を聞くことにより、反応の有無によって親子関係の変化、青年自身の変化にどのような違いがあるのか考察する。調査対象者である大学生は、多くの場合、第二反抗期が終結し、親との関係性の再構築の時期を迎えているものが多い。大学生に第二反抗期を振り返ってもらうことで、ステレオタイプにとらわれない、新たな第二反抗期の意味づけを探る。また、インタビューの際、特に対立が起こりやすい進路の問題、兄弟など親以外の人からの影響などについても聞くことにより、親子関係に留まらず、反抗を多面的に捉える。

46. 「おやじの会」における男性の経験の考察：おとなの学び合いの場-SCAT を用いた語りの分析から

井上眞理子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

Keywords：SCAT おやじの会 おとなの学び 生涯学習

近年、男性の子育て参加、地域への貢献の一つの形態として、「おやじの会」の活動が全国的な広がりを見せている。子どものサポーターとしての活動はもちろんのこと、その内容や形態はさまざまであり、これまでの観察では、男性はその活動自体に楽しさや意義を見いだしているようにみえる。

本研究では、「おやじの会」における男性の経験の語りから、「おやじの会」において男性は何を経験し、どのような意義を見いだしているのかを、SCAT（大谷, 2007）を用いて分析する。職場とは異なる、インフォーマルな場における「おやじの会」は、子どもをサポートする場としてだけでなく、男性の学び合いの場としての意味を持つことを明らかにし、男性の生涯学習の観点からその意義を考察する。

47. 中年期の子が実感した父親の老い・母親の老い

谷村ひとみ（立命館大学大学院 先端総合学術研究科）

本研究は、中年期の成人子はどのような様相や場面、出来事で親の老いを実感しているのか、また父親と母親で子の実感に違いはあるのかを明らかにする目的で行った。40歳から59歳の男女に質問紙を配布し「(父・母)親が年を取った」と回答した父親分87名（男性36名、女性51名）と母親分158名（男性62名、女性96名）を対象に実感した場面や出来事を父親・母親のそれぞれについて自由記述を求めた。得られた自由記述はKJ法に準じ、父親・母親ともに共通する内容、父親と母親では異なる内容に着目し意味まとまりごとにカテゴリ分けを行った。結果、父親と母親で共通する老いは、親の年齢や白髪など「おじいさん（おばあさん）というイメージ」からの実感や、病気や入院、足腰の衰えなどの身体的・生理的な老いの実感であった。また父親と母親で異なった内容は頼みごとの増加や介助が必要となった状況で、父親では今まで言ったことのない“ありがとう”“すまん”などの発言から弱くなった父親、丸くなった父親と老いをとらえ、母親では今まで見たことのない不安や落ち込みなどを伴って頼る母親から気弱になった母親と老いをとらえていた。また話を聞き入れないなどの頑なな態度からも老いを実感していたが、父親ではその様子をさらに頑固になったととらえ、母親では配慮や協調性がなくなった、わがままになったととらえており、父親と母親でその様相は異なった。

48. 「祖母—母—娘」三代の関係性を超えて：「声・心・体を育てる丹田呼吸法と正しい発声法」の創始者、K子氏の語りから

西山直子（京都大学大学院教育学研究科）・やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

日本の子どもたちを世界に通じる「天使の声」に導くために、「声・心・体を育てる丹田呼吸法と正しい発声法」を編み出し、数多くのヴォイストレーナーを輩出してきた発声教育研究所のK子氏。ソリストとしての自分と決別し、師から学び体得した呼吸法・発声法を、自分なりに分析し体系化し、誰でも教えられるシンプルな指導法を編み出した背景には、母をはじめとする家族の温かい支援があった。実際の母以外にも、音楽の世界へと導いてくれた中学校時代の恩師や大学時代の恩師を「母」と慕うK子氏は、いまや自らが弟子たちの母親のような感覚で面倒を見ている。「祖母—母—娘」三代の関係性を問うインタビュー調査のなかで出会ったK子氏のライフストーリーを、プロフェッショナルな面とプライベートな面とを絡めて分析・考察する。そして、母や師といった先行する世代から何を学び何を自分の身に引き受け、娘や娘のように可愛がる弟子たちに何を伝え残していこうとしているのか、「祖母—母—娘」三代の関係性を超えて、K子氏の語りから考えたい。

49.人付き合いを好まない高齢者の QOL 理論化(1).: 人付き合いを好まない高齢者は改善すべき存在か？

福島和俊（岡山大学大学院文化科学研究科）・長谷川芳典（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

人付き合いを好まない高齢者は、集団への参加を是とする場合においてネガティブに評価されることがある。本研究では、こうした視点に問題を投げかけ、その実際を探索することを調査目的とした。香川県内の医療施設に依頼して、施設入居者の中から“人付き合いを避ける傾向にある”高齢者2名（男性78歳、女性73歳）を紹介してもらい、この2名を対象に半構造化面接を行った。男性に関する施設側の評価は、「いつもひとりでテレビを見ていて、誰とも会話しなない」であったが、男性は他者との会話は楽しいと感じていて、自ら会話に参加することにも抵抗感を持っていない。ただし、野球のテレビ中継が始まると、一人それに見入ってしまうことがある。女性に関しては「集団で何かをすることはせず、自室にすることが多い」という評価が付与されていたが、気の合う人とは積極的におしゃべりを楽しみ、社交的なところもあると自分では思っている。しかし、一方的にしゃべり続ける人と話をすると腹が立って心臓も痛み出すので、自室で休むことが多くなる。痛みさえなければおしゃべりに行きたいとは思っている。今回の調査結果から、人付き合いを好まないように見える事例の中には、自らの趣味の世界にふけることのほうが優先されている、あるいは身体的な制約によって人付き合いが叶わないに過ぎない場合があることが示唆された。なお、面接に際しては医療施設側の監督の下で行った。

50.認知症高齢者による作話的特徴のある語りの検討： 連続して繰り返し語られる発話内容の変化

田中元基（淑徳大学大学院総合福祉研究科）

認知症高齢者との言語コミュニケーション場面において、同じ内容の話を繰り返し語る場面がよく観察される。筆者は、特別養護老人ホームにおいて認知症高齢者と関わる中で、同じ内容の話が連続して繰り返し語られ、同じ話を語っているにも関わらず内容が変化し、時に矛盾した内容が語られるという現象や現実的にありえない内容が語られる場面に何度か出会った。このような現象は、作話（confabulation）という、記憶障害を背景に、意図せずに、実際に起こっていないことを起こったかのように語る症状（穴水・三村, 2007）として説明されている。

本発表では、許可を得た上で録音した、認知症高齢者と筆者とのやりとりの発話データから、1人の認知症高齢者による、作話的特徴の見られる、連続して繰り返される同じ内容の語りを対象に、認知症高齢者の語りの内容がどのように変化するかを検討することを試みた。

その結果、作話的变化には、語られる内に5年前の出来事から1週間前の出来事へと次第に移行していくといった、段階的に変化するもの。その変化に合わせて出来事の生じた場所が病院、自宅など変化するといった、一部の変化に合わせて変化するもの。登場人物が兄や祖母など家族といったカテゴリー内で変化するものなど、いくつかの特徴が見出された。これらの作話的变化の特徴から、多様な変化の可能性がある中で、なぜその変化が選択されるのかという点について考察していく。

51.認知症介護者がウェブログを綴ることの意義に関する検討（第2報）：当事者にとってのウェブログの存在に焦点をあてて

河原智江（横浜市立大学大学院医学研究科）・西村ユミ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）・
塩田 藍（逗子市福祉部障がい福祉課）・池田真理（東京大学大学院医学系研究科）・林 由美
（ケア研究会）・渡辺陽子（尾道市立市民病院）

＜目的＞ 認知症介護者は、自らの介護経験をウェブログに綴ることの意義とその存在をいかに捉えているのかを明らかにする。

＜方法＞ 対象は、若年性認知症の妻の介護者である夫A氏とA氏の綴るウェブログ（妻の発症と同時に始めた5年間分）358件である。A氏に半構成的インタビューを行うとともに、ウェブログ記事は、IBM SPSS Text Analytics for Surveysを用いて分析してカテゴリ化し、カテゴリごとに時系列で整理した。なお、本研究はB大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

＜結果と考察＞ 5年間のウェブログの月平均更新回数は5.8回であった。ウェブログ記事のカテゴリは、「排泄の状況とケア」「認知症の治療やケア」「妻への気持ちとかかわり方」「他の家族との関係」「専門職との関係」「近所の人びととの関係」であった。A氏は、ウェブログは妻の排泄に関することが一貫したテーマであると認識しており、当初は、“自分が困ったことを教えてもらった”が、最近では“妻にとってより良い方法”を求めている。また、元来A氏は妻を大切にしているが、最近1年では“妻は幸せなのか”“自分の世話は間違っていないか”と自身に問い続けている。これは、ウェブログ仲間らにその問いの評価を期待しているようにも考えられた。また、A氏はこれまでを振り返りつつ、今後起こりうることも予測するなど、時間の経過とウェブログ仲間らとの交流により、ウェブログを過去—現在—未来をつなげるものとして捉えていた。

52.児童養護施設をとりまく社会資源のむすびつきとその実践—「役割分担」に着目して 高橋菜穂子（京都大学大学院教育学研究科）

児童養護の実践は、施設の中で行われる実践に閉じるものではなく、さらに子どもを取り巻く関係性も、子どもと職員の二者関係的なむすびつきに閉じるものではない。家庭、学校、児童相談所などさまざまな支援基盤が子どもへと重層的にかかわる中で支援が達成される。そのような連関の中で、児童養護施設の職員は、施設での日常的な子どもとの関わりに加えて、行政機関、教育機関との連携を含めた多重の役割をこなしていかなければならない。職員の実践の現実性をとらえるうえで、広く子どもをとりまく社会資源として、教育機関・行政機関とのむすびつきを職員がどのようにとらえているのかということが重要となる。

本研究では、学校と児童相談所とのむすびつきの中で、児童養護施設における支援がいかに展開されているのかを明らかにすることを目的とし、職員の語りを分析する。

方法としては、8名の児童養護施設の職員へのインタビューをもとに、上記の社会資源との連携の現状をとらえるとともに、その課題を明らかにする。その際、職員の語りのなかに頻繁に表れた「役割分担」ということばに焦点をあて、そのことばの意味する内実と、そこに立ち現われる葛藤を考察する。

53. 特別支援学級―「ふれあい」のエスノグラフィー：中国の中学校の視点から日本の中学校を見る

孟エイ（茨城大学大学院人文科学研究科）・伊藤哲司（茨城大学人文学部）

日本の新聞やテレビでは、不登校のことがときおり取りあげられている。不登校は教育現場における大きな問題とされており、さらに教育の問題を超えて、一つの社会問題として捉えられている。1992年度には病気以外の理由で30日以上学校を休んだ子どもの数は7万2千人強であった。しかし、9年後の2001年度には、14万人に迫るところまで増えている（文部科学省、2002年）。

留学生である筆者は、日本の中学校の先生たちはとても優しく、授業も面白いという印象を抱いている。にもかかわらず日本では、なぜ不登校の生徒がこんなにも多くいるのであるか？

そこで筆者は、2010年12月からスクールボランティアとしてある日本の中学校に関わるようになった。具体的には、授業の担当教員とペアになり授業のサポートをすること（ティームティーチング）や学校の事務処理の手伝いなどを、週に1～2回ペースで行っている。

そのような参与観察を通して、中国の中学校の視点から、日本の中学校と中国の中学校の相違点と共通点を明らかにしてきた。「ふれあい」と名付けられた特別支援学級の生徒たちに着目し、教室になぜ馴染めないのかに注目した。それらを通して、なぜ日本では学校に行きたくない生徒が多くいるのか、その個人的な理由と社会的な背景を明らかにしたいと考えている。

54. 日本人の親を持つ日本語学習者Xにみられる日本留学経験と読解教材との相互作用：PAC分析による縦断研究から

小澤伊久美（国際基督教大学）・丸山千歌（横浜国立大学）

日本語教科書は、学習者の関心が日本社会・日本文化に向いていることや、「読み」の学習目標の一つに学習者が日本の習慣や文化について知識を得ることが背景にあるため、日本社会や文化に関するトピックが選ばれることが多い。その一方で、日本語教師が開発する教材や授業実践について、1990年代後半でも1970年代に流行した日本人論の代表作が語学の教材として積極的に消費され続けていること、日本語教科書の記述内容に固定的な情報やステレオタイプが提示される傾向があることなど、日本語教師が文化的差異をめぐるステレオタイプの言説の再生産や伝播の一翼を担っているという指摘があり、教材や教師像についての議論の深まりが必要とされている。

このような背景から、発表者らは日本語学習者がステレオタイプの読解教材を読んだ場合、どのような影響を受けるのか、またその影響は学習者の属性、留学体験といかに関わるのかをPAC分析法を活用して縦断的に調査してきた。PAC分析法は、ある刺激に関して自由連想をさせ、連想語同士の類似度を評定させた結果をクラスター分析にかけ、その樹形図を元にインタビューを行って調査協力者の内面探索を促すという分析法である。

本発表は、この調査のうち、日本人の母親を持ち、渡日経験をすでに持つ留学生Xのデータに見られる、大学生になってからの日本への短期留学という経験と読解教材との間の相互作用について論じたい。

55.留学におけるホームステイ生活への心理的適応過程：女子大学生とホストファミリーとの対人関係を中心に

平山美雪（安田女子大学大学院 教育学専攻 臨床心理学コース）

□研究目的

今日、留学は個人で行うものから、大学がプログラムとして行うものまで多様化している。日本人留学生を対象とした研究では、ストレス要因（福田・白倉，1994）、ソーシャルスキル学習（田中・八島，1999）、英語能力の獲得（木村，2006）などが挙げられる。滞在方法の1つであるホームステイは、現地の人との密着度の高い空間での異文化接触であり、留学生の葛藤は想定されやすい（奥西・田中，2008）と考えられる。その一方で、留学生は葛藤を乗り越え、ホストファミリーとの生活に適応する過程で心理的な変化や成長を遂げているとも考えられる。

本研究では、留学生がホストファミリーとの対人関係の問題を体験する中で、何を考え、行動し、どのように葛藤を乗り越えて変化したかを調べ、その過程について検討する。

□方法

対象者は、A大学の留学プログラム（アメリカ・カルフォルニア州への6カ月派遣）に参加し2011年に帰国した学生のうち調査協力の得られた女子大学生20名（平均年齢20歳）。半構造化面接法を用い、2011年6月及び7月にインタビューを行った（平均時間49分、最長69分、最短28分）。調査では、ホームステイ生活におけるホストファミリーとの対人関係における問題と解決に至る過程、その中での変化・成長した点について尋ねた。回答を逐語録とし、KJ法と複線経路・等至性モデルを用いた分析を行う。

56.バイリンガル児の現地校・補習校の宿題遂行過程：初等学校から中等学校への移行を経験した独日国際児の事例から

柴山真琴（大妻女子大学）・ピアルケ千咲（大妻女子大学）・池上摩希子（早稲田大学大学院）・高橋 登（大阪教育大学）

本発表では、バイリンガル児が親に支援されながら現地校と日本語補習授業校(以下、補習校)の宿題に取り組む過程を「二言語に媒介された活動への共同参加の過程」として捉え、参加過程の特徴を検討する。研究方法としては、ドイツ居住の独日国際児とその家族を対象とし、データ収集法として日誌法を採用した。分析では、2009年1月から2010年12月まで(対象児:小2-小4)の日誌記録を用いた。分析の結果、次の4点がわかった。(1)＜現地校の宿題→補習校の宿題＞という宿題遂行の順番は2年間で変化しなかったが、私立校から公立校に転校した小4以降は、現地校の宿題の増加・難化と進路決定のための試験の準備により、補習校の宿題遂行時間が圧迫されるようになった。(2)現地校における早期選抜の圧力は、親子に心理的負担をもたらす一方で、子どもの主体的な取り組みを喚起していた。(3)補習校の宿題については、豊富な言語知識を持ち宿題形式も熟知した母親が主導する形で宿題が遂行されていたが、現地校の宿題については、親子間の能力差がより小さい関係の中で、子どもが自力で遂行したり母親が宿題・試験形式や言語知識を学びつつ共同で遂行したりしていた。(4)母親は子どもが両校の宿題に取り組む際の伴走者であるだけでなく、宿題遂行計画を管理・調整し必要な資源(教材の入手や父親のドイツ語力の活用など)を調達するコーディネーターでもあった。当日は、共同参加過程の理論的考察も含めて発表する。

57. 成人バイリンガルの文化的アイデンティティ：対話的自己論の視点から

Prymakova Kateryna（神戸大学大学院人間発達環境学研究科心身発達専攻人間発達論講座）

文化的アイデンティティとは、ある文化への所属感覚・意識のことである。2 つ以上の異なる文化を経験しながら成長する青少年が増え、彼らのアイデンティティへの注目が集まっている。しかし、文化的アイデンティティが内包する葛藤を中心的なテーマとして取り上げているものは極めて少なく、「〇〇人」または「日本人」といった二項対立的な視点が目立つ。本研究では Hermans&Kempen（1993）の対話的自己論に基づいてバイリンガルの文化的アイデンティティを自己において「文化的ポジション」として変換し、当事者がどのように 2 つの「文化的ポジション」を体験しているのか、ポジション間にどのような対話的関係があるのかを動的に捉えていくことを目指した。

青年期に海外滞在経験のある大人 5 名を対象に自己対面法（Hermans&Kempen, 1993）をベースとした半構造化面接を行った結果、「文化的ポジション」間には、一方が支配的である場合や、葛藤、共存、同盟等の関係性が見られた。また、外的・内的要因の変化によって「文化的ポジション」の支配性がスイッチングしたり、葛藤が生じてどちらかのポジションの支配性が傾いたり、共存関係が生まれたりする等、関係性の変化が見られた。本研究より、今後の多文化間研究及びカウンセリングの視点のひとつとして、文化的アイデンティティを自己における今・ここの動的な体験過程として捉え、総合的なアイデンティティにおいてその位置づけを考えていく必要性が示唆された。

58. バイリンガル児の二言語における読書活動の社会化過程：教育的関係における文化の伝達関係論を手がかりに

ビアルケ千咲（大妻女子大学）・柴山真琴（大妻女子大学）・高橋 登（大阪教育大学）・池上摩希子（早稲田大学大学院）

本発表は、バイリンガル児の読書活動を、教育的関係における多様なタイプの文化の伝達関係が交錯する中で進行する社会化の過程と捉え、バイリンガル児は具体的にどのように 2 言語で自立した読書活動をするようになるのかを検討する。分析にはドイツ居住の独日国際結婚家族とその子どもの事例を取り上げ、2009 年から 2 年間（対象児：小 2・小 4）、日誌法により収集されたデータを用いる。分析の結果、以下が明らかになった。①読書の経験や知識が豊富な親がそれを子に伝達し、読書活動のイニシアチブをとる「序列的な関係」のうち、定期的に図書館に連れて行くという環境構成は、二言語の読書活動の全過程を通じて読書を習慣づけていた。また親による本の選択・提示は、対象児の優勢言語であるドイツ語の場合は全体的に少ないのに対し、滞在国での読書環境が限定されており、対象児の言語能力も相対的に低い日本語の読書では多く見出された。②両親はお互いの母語の読書の知識や経験に関する情報交換を基盤に①の支援を行っていた。③読書をめぐる対話や経験を伝達しあう親子、姉妹間での「平等的な関係」は読書活動を一貫して動機づけていたが、友人とのそれは主にドイツ語の読書活動において見られ、日本語の場合乏しかった。④対象児は自身のイニシアチブにより読書対象を、初期には同一メディア内で、その後はメディアや言語を超えて選択・拡張しており、自分なりの読書の世界を構築していた。

59.在日三世にとって「文化」とは何か

松岡瑛理（一橋大学大学院社会学研究科）

今日、人類学や社会学で「文化」とは「伝達可能な、社会的に決められた意味の脈絡」を指し、特定の集団の行動様式を正統化することで差異化をはかる機能を有すると定義されている（岩波小辞典『社会学』2006,「文化」の項より）。

本報告は、「在日韓国・朝鮮人（在日）」について、現代の社会状況と合わせながら彼らが独自の「文化」を持つ難しさを指摘する。特に三世世代へのインタビューを通じ、彼らの生のありようから「文化」概念を再考することが目的である。

第二次世界大戦前後、植民地支配政策や就労等を背景に来日した「在日韓国・朝鮮人」。90年代以降、在日社会では日本国籍取得者や、在日と日本人の結婚による「ダブル」の出生件数が増加傾向にある。これにより「在日韓国・朝鮮人」という存在を一枚岩として捉えたり、共通の文化を思い描くことは大変難しくなっている。

こういった現状に対し、本研究では朝鮮学校出身者／帰化者など、異なるバックグラウンドを持つ在日三世世代にライフストーリー・インタビューを行った。語りは、コーディングを通して個別の話題を概念的カテゴリに高める「質的データ分析」を用いて分析した。

語りは方向性はだまかに 1、日本社会 2、在日社会 3、在日同世代の 3 方向に分けられた。発表では特に、彼らが 2 や 3 との「つながり」の難しさを認識しつつ、1 や 2 の文化からどのような影響を受け、独自の生き方を編み出しているかに注目したい。

60.大学食堂での食事場面における日本人と外国人留学生の文化・社会的行動に関するマイクロエスノグラフィー

西浦和彦（立命館大学大学院文学研究科）

近年、「食文化」が新たな研究分野として注目を集めている。文化人類学では食文化に関する様々な研究が散見される一方、心理学領域では十分に消化されていないように思われる。そこで、心理学において食文化行動を研究することで、食文化行動への理解を深め、文化・社会的文脈における人間（集団）行動のあり方について考察することを目的とする。

方法としては、人々が食事を行っている場面をマイクロエスノグラフィー法によって観察し、文化・社会的行動について記述し、行動の意味を解釈する。

先行研究では、外食場面での人々の食事行動を観察し、2 つの文化・社会的行動に注目しその特徴について検討した。1 つは食事の挨拶である、手を合わせる動作、「いただきます」および「ごちそうさま（でした）」という発声（以下、「いただきさま行動」）に注目した。もう 1 つは、複数人で食事を摂取する際に、料理を配膳された成員が、配膳されていない成員の料理配膳が完了するまで食事を開始せずに待機する行動（以下、「配膳後他者待ち行動」）である。研究の結果、これら 2 つの行動は集団で一斉に食事を摂る（共食する）ための行動であると解釈した。

本研究では、先行研究を発展させ、主に大学食堂での食事場面における日本人と外国人留学生の文化・社会的行動に焦点を当て、「いただきさま行動」・「配膳後他者待ち行動」が、観察した文脈においてどのような意味を持っているか考察する。

61. いわゆる異文化接触における「私たち」と「あなたたち」：内モンゴル人と日本人が相手の文化に対して抱く違和感の分析と比較

ウダバラチチゴ（茨城大学大学院人文科学研究科）・伊藤哲司（茨城大学人文学部）

筆者の出身地である中国・内モンゴル自治区でも近年は経済発展が著しく、インターネット等を通して外国からも多くの新しい情報が入ってくるようになった。これにより、内モンゴルの人々が抱く外国についての興味も増し、なかには日本に留学して夢を叶えたいと考える人も多くなっている。そのため、内モンゴル人と日本人が直接接したときに起こりうる文化の問題についての基礎的研究は、今後の両者の交流にとって一定の意義がある。そしてそれは、内モンゴルと日本の間にとどまらない、異文化理解の一般的な問題を提起しうるだろう。「私たち」と「あなたたち」の間に摩擦が起こった際でも、互いの文化の有り様を固定的に決めつけることなく、どのように理解しあうことができるのか、それを明らかにするのが本研究の目的である。

本研究では、たとえば「同居をしている友達が、あなたのコーヒーを無断で飲んだ場合、あなたはどうしますか？」といった仮想場面を提示し、それについて内モンゴル留学生や日本人学生にインタビューし、さらに両者の語りあいをしてもらう。相手の文化を理解することから生じるコミュニケーションの摩擦で、お互いの異文化理解が悪い方法へ進んでいってしまうことなく、その摩擦をどのように乗り越えられるのか、お互い文化を語りあうなかでその糸口を探ることが大きな課題であると考えている

62. 中国人留学生の日本文化取り入れ行為における文化的気づきと異文化変容

奥西有理（大阪大学 工学研究科）

本研究は、在日中国人留学生の日本文化取り入れ行為に注目し、どのようなプロセスをたどってそこに至るのか、取入れ行為にまつわる文化的気づきと異文化変容の実態について分析した。

調査対象者は西日本の大学院に所属する中国人留学生 6 名。うち 3 名は日本での就業経験があり、1 名は日本の高校での留学経験があり、残り 2 名は学生としての経験のみであった。2010～2011 年に 1 時間程度の半構造化面接を実施し、来日から面接当時までに経験した日中の文化的なギャップや、日本文化的行動の取り入れ、それらをめぐる感情や認知、日本文化での自己変容などについて、自由に語ってもらった。語りは許可を得て録音し、後に書き起こしてスクリプト化して分析に用いた。

分析にあたっては、複数経路等至性モデルを用いた。到達点を、日本文化的行動の取り入れの有無と設定し、そこに至るまでのプロセスと変容について図式化を試みた。分析の結果、中国人留学生による日本文化の取り入れ行為には、コミュニケーション行動上の齟齬の認知、齟齬の内的な帰責、文化学習、日本人ホストへの能動的関与等が関わっていた。一方で、日本人ホストによる外国人に対する偏見の知覚、自文化優先的解釈、偏見の内面化、日本人ホストへの消極的関与等が、日本文化を取り入れないことに関係していることが示唆された。

63.2011 年 3 月 11 日以降の原発に関するブログ記事のテキストマイニング

上村晃弘（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）・サトウタツヤ（立命館大学文学部）

2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震とそれによって発生した津波で、福島第一原子力発電所の事故が起きた。この事故以来、原発に関するニュースを聞かない日はない。これまで原発に関心がなかった人々も生活基盤であるエネルギー、電力について考えざるを得なくなり、様々な意見を表出している。

本研究では、事故以降、原発とそれにかかわる事柄に対して市民がどのような意見を持っているのかを調査するためにブログ記事を収集し、テキストマイニングを行う。

事故自体の経過や政府や東京電力の対応、放射性物質の有害性についての議論、原発の安全性、世界と日本の原発政策への影響、代替エネルギー、原発に関する不祥事、原発報道についての意見などについての記述を抽出し、これらが事故以降、時系列的にどのように変遷したかを分析する。

原発に関する議論は今後の世界にとって避けては通れない重大な問題である。政府機関が原発に関する言説を収集していることも報じられた。実際にどのような意見分布であるのかを明らかにすることは重要であると考ええる。

64.大洗町の復興過程のエスノグラフィー：町内外の社会的ネットワークの果たす役割に注目して

王晓玉（茨城大学大学院人文科学研究科）・伊藤哲司（茨城大学人文学部）

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こった。茨城県大洗町は今回の大震災で深刻な被害を受けたが、津波による犠牲者は奇跡的にゼロであった。現在の大洗町では、積極的に復興に向かって協力しあう人たちが様々な取り組みをしている。しかし、海岸に集められていた瓦礫はすでに片付けられ、海水浴もできる状態になっているにもかかわらず、現在の状況が十分報道されず、大きな被害を受けたというイメージに伴った風評被害が続いている。

そうした状況の中、地元の NPO 法人・大洗海の大学、旅館経営者、さらにマスコミ関係者や茨城大学の学生らによって、大洗町の復興のためのネットワーク「大洗応援隊！」が結成された。現在では、約 30 名が参加している。今後このネットワークがどのような活動を行い、大洗町が 1 年後の夏までにどの程度復興を果たすことができるか。筆者も活動メンバーの一人としてその実践に関わりながら、参与観察やインタビューなどの方法を用いて、大洗町の復興過程をエスノグラフィーとしてまとめていく。

本研究では、大洗町での復興過程の事例を通じて、津波などの災害からの復興に、そこに関わる人たちの町内外の社会的ネットワークがどう寄与できるのかを明らかにしていきたい。

65. ボランティア活動の原初的規範（意味）生成についての一考察

竹内みちる（（株）原子力安全システム研究所）・鮫島輝美（京都光華女子大学健康科学部）

ボランティアに関する実践や研究は近年数多くある。しかし、原田(2010)は、これまでのボランティア活動は「する側」の意思や姿勢だけを考えるものであったが、今後はもう一方の主役である「相手」を視野に入れて考え直してみることが必要だと指摘している。そこで、本研究では、独居高齢者を対象にした話し相手のボランティアである「りすの会」の事例を用いて、ボランティアと利用者が相互作用を通じて「りすの会」の活動に関する原初的な規範（意味）を形成する過程をボランティア側の語りから例示し、活動の意味を社会的・宗教的に指し示すような（社会的意義や宗教的意義といった意味を付与するような）超越的な規範に支えられたボランティアとの差異を踏まえて、「りすの会」が目指しているボランティア像を明確化する。「りすの会」は、「利用者に話してもらい、元気になってもらう」ことを目的としており、ボランティアと利用者は、活動の意味を両者間で生成する。ボランティアの一人は、「ボランティアが利用者に喜んでもらえるのが半信半疑だった。ごこない最初の雰囲気、回を重ねるごとに、利用者も自分も成長する」「最初の回は『なんで来た？』という感じだった。でも、回を重ねると、その方はベッドにずっと寝てられるのだが、『私がこんなで、何のおもてなしもできなくて申し訳ない』と言われるようになる」と語る。発表では様々な事例を提示し議論を試みる。

66. PEN-A による地域コミュニティの魅力の発見：沖縄県国際通りを事例に

加藤潤三（琉球大学法文学部）・石盛真徳（京都光華女子大学人文学部）・岡本卓也（関西学院大学社会学部）・谷口淳一（帝塚山大学心理学部）

本研究は、写真・ナラティブ誘出法（Photo Eliciting Narrative Approach : PEN-A; Okamoto et.al., 2011; 石盛・岡本・加藤, 2011）によって、地域コミュニティに対する人々のイメージを明らかにすることを目的とする。

写真投影法や自叙写真法、写真発言法など、これまで写真データを用いた研究法が展開されてきた。これら写真を用いた研究は、年齢や国籍を問わず誰もが等しく参加できる点、イメージなど概念化や言語化が困難な対象を測定するのに有用である点にメリットがある（岡本・石盛・加藤, 2010）。特に現在では、これらのメリットを利用して、危険マップや景観評価など、コミュニティづくりの実践や教育において写真を用いた研究が多数行われている。

本研究では、写真から語りを融合的に誘出する写真・ナラティブ誘出法を用い、人々が地域コミュニティに対してどのようなイメージを持っているかを、写真データとナラティブデータの両側面から検討を行う。具体的には、沖縄県那覇市の国際通り周辺を撮影してもらい、その後撮影した写真をもとに面接を行った。なお本研究では、地元住民と観光客に研究協力を依頼した。従来の研究では、地域住民のみを対象としたものが多いが、本研究では観光客という外部からのイメージを測り、地元住民のイメージと比較を行った。両者を比較することで、観光客は気づいているが地元住民が気づいていないイメージ、地元住民固有のイメージなど、地域コミュニティの新たな魅力の発見につながる事が示された。

67. 茶道における間主観的関係の構築の可能性について

宮本知子（兵庫教育大学大学院）・浅川潔司（兵庫教育大学大学院 学校教育研究科学校心理・発達健康教育コース）

筆者は、「こども茶道教室」主催の茶道教授者に師事して茶道を学んでいる。主客双方の思いが交錯し「一期一会」の場が醸成される茶道とは、まさに五感すべてを動員した有形・無形の豊潤なアサーティブ・コミュニケーションの源泉であり、ひいてはトレーニング・メソッドとしてのアサーションをも再布置化し得る営為ではないかと考える。

本研究では、自身の茶道を通じた自他の受容のあり方や師の教示による気づきを問題意識の端緒として通底させながら、あえて脱自的に体験を再構築することで、「こども茶道教室」に通う子どもたちの点前作法の習得が「無相の自己のインカネーション」（久松,1987）として「型」を越える「型」（古田・熊倉,1998）,いわば「心」の型の錬成に繋がる過程を分析する。同時に、点茶を通して醸成される間主観的な関係(intersubjectivity)が、茶席を離れた日常の場面においても「個性」化した思いやりを他者に向け、ともに心地よい居場所と心理的紐帯を形成し得る可能性と、アサーティブなコミュニケーションとの着地点を探ることを主たる目的とする。さらには、心理教育への実践プログラムとして、「心」の型を育み、「社会」や「他者」と自分とをつなぐ「橋や扉」（菅野,2003）を把持し得る茶道体験の有意性を提言できればと考えている。

68. プロフェッショナルにとっての「教えること」の意味：伝統芸能の師匠の語りから捉える伝承と熟達の関係

竹内一真（京都大学大学院教育学研究科）

これまで教育心理学では「教え手」の熟達化というのは主として学校教育における教師を中心に研究が進められてきた。このような学校教育における教師というが一方、「教え手」には OJT を通じた自らの技能を伝えようとする教師も存在する。本研究では優れた技能の持ち主が OJT を通じてどのように教え、そして、教えることを通じてどのような熟達があったのかということを明らかにする。日本舞踊の一派である京舞篠塚流の家元である篠塚瑞穂氏を研究協力者として、ライフストーリーインタビューを実施した。本研究ではライフストーリーインタビューを実施するにあたって、瑞穂氏がどのように自らの技能を伝えているのかということを中心に稽古場面に対して参与観察を行っている。この参与観察のデータをもとに質問項目を作成し、インタビューを行うというプロセスを経ることで、一事例での研究においてインタビューの質をより厚くしている。分析の結果、「教えることによる技能の重要性の気づき」、「教えることによる新たな技能の創発」、「教えることによる技能の定着」という三つのカテゴリーとその関係図が示された。このように優れた技能を有する実践者は教えることを通じて自らの技能の熟達へとつなげているのである。

69.博物館における「解説者」の熟達の諸相

並木美砂子（千葉市動物公園）

博物館法では、美術系から科学技術系、動物園や水族館も「博物館」であり、「もの」の収集と展示という機能に加え、今日、その場を利用する人々にとって、どのような役割がこれらの博物館にあるのか、あるいはあるべきなのかという議論がさかんになってきている。そして、利用者の個人的な意味作りに関与し、その際に媒介となっている「展示（物）」にまつわる社会的文化的背景をよく知る「人」の存在にも注目が集まりつつある。

発表者はこれまで、そうした「人」を総称して「解説者」と呼び、一貫して彼らの熟達のプロセスを明らかにしたいと考えているが、今回は、それぞれの館種において「解説者」自身が利用者に関わることをどう捉えているのか、自分自身の変化へのまなざしをとらえるための一連のインタビューを試みた。

その結果、自分の属する博物館の「展示(物)」や作品などの媒介物に関する知識や価値意識にこだわるのではなく、利用者を一人の人間として尊重するような意識の芽生え、パーソナルで深みのある関わり、あるいは「今、共に在る」ことへの気づきといった言葉が聞かれ、さらには、利用者がもつそれぞれの「自分らしい視点」に利用者自ら気づいてもらえることを重視していることが確かめられた。

70.サグラダ・ファミリアに集う人々：建築継続の要因としての協力・葛藤

仲根聰子（茨城大学 人文科学研究科）・伊藤哲司（茨城大学 人文学部）

スペインのバルセロナのサグラダ・ファミリアは 1882 年贖罪教会（キリスト教の信徒協会が計画し集めた資金で始めたローカルな教会）として着工された。その 2 代目建築主任がガウディである。着工から 120 年以上もたつが、現在も建築が続いている。バルセロナの碧空を貫く調和に満ちた革新的な教会として今なお成長を続けている。筆者は、そこで働く人々や研究している人々など、社会に対するこれらの個人のあり方を研究中である。

サグラダ・ファミリア財団法人で働いている人々は、下請けを入れると 200 人以上を超える。3 年間にわたって建築部門、彫刻部門、広報部門等で働く人々のフィールドに入り込み、参与観察やインタビューを行ってきた。その他、「実測」という方法で研究しているガウディ研究家、バルセロナ国立大学でバルセロナの文化を研究している教授、バルセロナ工科大学のガウディ研究の第一人者にも何度も面会し語りを聞くことができた。

サグラダ・ファミリアという社会とそのエリアに集い研究し、働いている人々を対象にして 100 年以上も未完の建築物を継続させている思いや生き方、それに人間関係は何であるのか、どこに向かっているのか、考察しようと考えている。

事例として日本人のサグラダ・ファミリアの彫刻主任の外尾悦郎氏と実測でサグラダ・ファミリアの図面を起こした田中裕也氏の語りを通して個人と社会、社会に対する個人のあり方に着目する。

71.日本人キリスト教徒の「宗教」語りにおけるポジションと「語り方」の分析

綾城初穂（東京大学大学院教育学研究科）・北村篤司（東京大学大学院教育学研究科）

ポジショニングとは、語り手が自分や他者を言説上でどのように位置付けるのかを示す用語である。Harré は、ポジション（言説上の位置）を、ストーリーライン（語りの内容）と行為（発話行為など語りによって達成されるもの）の二側面から検討することを提案している。綾城（2011）は、日本人キリスト教徒が「宗教」という言葉をどのように用いるのかを Harré のポジショニング理論を用いて分析し、3つのポジションが語りの中で動的に自己を構築していることを見出したが、この分析は主に語りの内容に着目したものであった。そこで本発表では、綾城（2011）のデータを用い、語りの行為的側面からポジションを検討していく。分析では、「語り方」に着目し（綾城・北村・李, 2011; 北村・綾城・李・能智, 2011）、語り手が自分と「宗教」とをどのように表現しているのかについて検討を行った。また、語りの行為的側面を分析する上では、語り手だけではなく聞き手の在り方も検討する必要があると考えられたため、聞き手の発話についても分析を行った。分析の結果、綾城（2011）とは異なったポジションが見出された。また、個々のポジションと特定の語り方の間に一定の対応が見られること、及び、聞き手の発話が語り手の特定の語り方と関連しやすいことも示唆された。これらの結果は、語り手が、語りの「内容」と語りの「場」において、二重にポジショニングを行っている可能性を示唆するものである。

72.「運の譲渡」に関する一考察

村上幸史（神戸山手大学 現代社会学部）

「運」に関する語りの中には、他者間での運のやりとりに関するものがしばしば見られる。本研究では、新聞記事を中心として、この「運の譲渡」に関するコメントを分類し、理論的考察を行った。

その結果、語りの内容は「直接的接触」と「対人的接触」の2カテゴリーに分類がなされた。「直接的接触」には身体的な接触と物質的なものを媒介した接触が含まれ、また「対人的接触」には直接的に対面する場合と、時間や空間を越えたやりとりが含まれると考えられる。また、この運のやりとりは、理論的には贈与と被贈与の両面がありえるが、実際は願望を含めて「運をもらう」という被贈与の側面が多く語られていることが分かった。

日本質的心理学会第8回大会 賛助団体 御芳名

助成・協賛

広島大学大学院教育学研究科 心理学講座
安田女子大学
公益財団法人 広島観光コンベンションビューロー

広告・展示

株式会社 アンデルセン・パン生活文化研究所
株式会社 北大路書房
合田産業 株式会社（月虎・鐵）
株式会社 新曜社
東京図書 株式会社
株式会社 ナカニシヤ出版
株式会社 にしき堂
株式会社 ヒューリンクス
広島駅弁当 株式会社
株式会社 ミネルヴァ書房

（五十音順・敬称略）

大会を開催するにあたり、上記の各企業団体より多大なご支援をいただきました。
ここにその御芳名を記して、心より感謝の意を表します。

2011 年 10 月

日本質的心理学会第8回大会

委員長	岡本祐子
事務局長	澤田英三

日本質的心理学会第8回大会 準備委員会・実行委員会

委員長 岡本祐子 (広島大学)

事務局長 澤田英三 (安田女子大学)

準備委員・実行委員

岡花祈一郎 (福岡女学院大学)
奥田紗史美 (神戸女学院大学)
鹿嶋達哉 (広島国際大学)
小嶋由香 (安田女子大学)
田中共子 (岡山大学)
中坪史典 (広島大学)
永田彰子 (安田女子大学)
前盛ひとみ (香川大学)
南 博文 (九州大学)
渡邊照美 (くらしき作陽大学)
木下寛子 (九州大学・大会ポスターデザイン)
境愛一郎 (広島大学・大会ホームページ管理)
深瀬裕子 (広島大学・大会通信・抄録集編集補助)

実行委員 池田龍也・尾方綾・川本智映子・神谷真由美・佐藤裕樹・高野恵代・
中西さやか・森田修平・尹智成・吉田恵三・劉原婧璇
(以上, 広島大学 大学院生)
井手元麻美・大畠由起子・長舩まどか・貴島はる香・熊谷佳奈・台原沙
紀・中島慶子・野島麻里・淀瀬麻未 (以上, 安田女子大学 大学院生)
(五十音順)

日本質的心理学会第8回大会プログラム抄録集

発行日 2011 年 10 月 31 日
発行者 日本質的心理学会第8回大会準備委員会
委員長 岡本祐子
準備委員会事務局 広島市安佐南区安東6丁目 13-1
安田女子大学 澤田英三研究室
印刷 (株)ニシキプリント

やまだようこ 著 作品集 第1巻

ことばの前のことば

うたうコミュニケーション

ことばをもたないもの (infant) である乳児の心理とその発達を通して、人間の根源をどうよつと紡がれた処女作「ことばの前のことば」と関連論者を収め、著者のことばと「コミュニケーション」研究が見通せる。 A5判上製496頁／5040円

やまだようこ 編

この世とあの世のイメージ

描画のフォーカス心理学

日本、イギリス、フランス、ベトナムの人々に、他界やたましいについてのイメージを描いてもらうことによって現代民衆の心理世界のコスモロジーを浮き彫りにした、心理学の新しい分野を拓く一冊。 A5判上製360頁／5040円

浜田寿美男・伊藤哲司 著

「渦中」の心理学へ

往復書簡 心理学を語りなおす

人は与えられた条件のもと、自分の「生きるかたち」を模索してゆく。その「渦中」に寄り添いながら生活世界の問題と切り結ぶ「もつとつ心理学」を目指して一書簡形式の対話により考察が深まってくる。 四六判並製272頁／2520円

日本質的心理学会 編

質的心理学研究 第10号

特集 環境の实在を質的心理学はどうあつかうのか
生が営まれる「場」、生きものを取り囲む「環境」を問い直す。 B5判並製184頁／2730円

日本発達心理学会 編／子安増生・白井利明 責任編集

時間と人間

発達科学ハンドブック 3

さまざまな「時間」を切り口に発達の根本原理に迫る。 A5判上製336頁／3780円

高橋 晃 著

キーワード心理学 5 発達

基本的な知識と最新の知識をバランスよくおりまぜた一冊。 A5判並製176頁／1995円

山岸明子 著

こころの旅

発達心理学入門

文学や映画を道案内に、人生における心の発達をたどる。 A5判並製184頁／1995円

二宮克美・子安増生 編

キーワードコレクション 社会心理学

キーワードで学ぶ、コンパクトで読みやすい入門テキスト。 A5判並製242頁／2520円

子安増生・二宮克美 編

キーワードコレクション 認知心理学

入門テキストに、また知識の整理や各種試験の参考書にも。 A5判並製240頁／2520円

マイケル・ペリッグ 著／鈴木聡志 訳

笑いと嘲り

ユーモアのダークサイド

批判心理学の旗手が、笑いの社会的・心理的意味を読み解く。 四六判上製496頁／4515円

ジョナサン・ハイト 著／藤澤隆史・藤澤玲子 訳

しあわせ仮説

古代の知恵と現代科学の知恵

世界の10の「偉大な思想」を現代心理学の知見から吟味する。 四六判並製424頁／3465円

石丸径一郎 著

調査研究の方法

臨床心理学研究法 (シリーズ編者 下山晴彦) 第5巻
実践的視野から、初学者がつまづきやすい隙間に配慮した。 A5判並製224頁／2625円



矢守克也・渥美公秀 編著／近藤誠司・宮本 匠 著

ワードマップ 防災・減災の人間科学

いのちを支える、現場に寄り添う

現場に関わるなかで生まれた「協働の実践」と「アクションリサーチ」を軸に、防災・減災への取り組み方を徹底的に再考。旧来の研究分野の枠を超え、現場に寄り添い、現場とともに考えるためのキーワード集。 四六判並製268頁／2520円

サトウタツヤ 著

方法としての心理学史

心理学を語り直す

心理学の歴史はじつに面白い。歴史は「事実の羅列」ではなく「語り直される」ものであるという主張に基づき、常に新しい問いを作り、歴史を編み直し、新しい知識を生産するための心理学の一分野を紹介する。 A5判上製224頁／2520円

菅野幸恵・塚田みちる・岡本依子 著

エピソードで学ぶ赤ちゃんの発達と子育て

いのちのレレーの心理学

生き生きとしたエピソードを軸に胎児から2歳児くらいまでの心理や発達を学びつつ、いのちのレレーという視点から、親となることについてのイメージや知識も得られる、画期的な乳児心理学のテキストが誕生！ A5判並製212頁／1995円



株式会社

新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 多田ビル

TEL: 03-3264-4973 (代) FAX: 03-3239-2958

E-mail: info@shin-yo-sha.co.jp URL: http://www.shin-yo-sha.co.jp/

(表示価格は税込)

インタビューやフィールドワークの 整理・分析に

NVIVO

エヌヴィボ

日本語版 最新バージョン NVivo9J 発売！



フリーフォームの
アンケート



映像



インタビュー

NVIVO

(質的データ分析)
ソフトウェア

単なる数値の集まり
ではない情報を分析

統計的ではない
重要なポイントに
気づく事が可能

表計算ソフトでは
できない分析

マルチレベルの「元に戻す」機能があるので、失敗を恐れずに分析可能です。

アニメ化されたチュートリアル「mini show me movies」およびウェブを基本とした膨大なリソースにアクセスできます。

ファイルと結果をウェブページとしてエクスポート可能です。NVivo ユーザ以外とも共有できます。

最新のサーチエンジンでデータ検索をパワフルに実行できます。



あらゆる言語と言語の
コンビネーションで作
業可能です。

コーディングストライ
プでプロジェクトの展
開をリアルタイムに確
認できます。

マウス操作でハイライト
した重要部分をその
場で「コード」できます。

プロジェクトの情報をリアル
タイムにモデルやチャート
(グラフ) で可視化できます。

音声、動画、Word 文書、PDF 文
書や画像など、すべての資料をひ
とつのプログラムで作業できます。

トランスクリプト無しでも音声や動画ファ
イルを直接分析可能です。NVivo 内でトラ
ンスクリプトを作成することもできます。

入門セミナー開催承ります

教室をお借りできれば、地方の大学にも入門セミナーに伺います。
周囲の方を集めて「質的研究ソフトウェア勉強会」を開催しませんか？
＜セミナーに関するお問い合わせは marketing@hulinks.co.jp まで＞

知的創造性を支援するソリューションカンパニー



HULINKS 株式会社ヒューリンクス

TEL:03-5642-8380 FAX:03-5642-8381

ヒューリンクス取扱い製品の最新情報は下記 URL をご覧ください

<http://www.hulinks.co.jp/>

製品に関するお問い合わせは：soft.sales@hulinks.co.jp

※ NVivo は QSR International Pty Ltd.の登録商標です。 開発元：



北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

▶ 価格は定価(税込み)で表示しています

ナラティヴから読み解くレジリエンス

一危機的状況から回復した「67分の9」の少女少女の物語一 S. T. ハウザー・J. P. アレン・E. ゴールデン著 仁平説子・仁平義明訳 A5・286頁・2940円
一握りの者だけが虐待・養育放棄などの破局的状況に打ち克てたのは何故か。縦断的インタビューに基づく対照群との比較から見えてきた真実。

ぼくにだってできるさ

一アメリカ低収入地区の社会不平等の再生産一 J. マクラウド著 南 保輔訳 A5・304頁・2940円 20世紀末アメリカの低所得者住宅に住む2つの少年グループのエスノグラフィ。参与観察法等の調査により彼らを追い、ブルデューらの理論を批判的に発展させ、社会再生産の多様なメカニズムを解きほぐす。

あなたは当事者ではない

一〈当事者〉をめぐる質的心理学研究一 宮内 洋・今尾真弓編著 A5・216頁・2625円 患者学・障害学など〈当事者〉の取り組みが広がる中、フィールドワークや質的研究では、研究者・研究対象等の固定化した関係の綻びに自覚的になりつつある。第一線の研究者が〈当事者〉とは誰なのかを探る。

〈当事者〉をめぐる社会学

一調査での出会いを通して一 宮内 洋・好井裕明編著 A5・228頁・2940円 フィールドワークや質的研究での「研究する側」と「研究対象とされる側」の対人関係論的な視座を越え、社会的装置・舞台・制度といった〈場〉へメスを入れ、調査研究における実証性の意味をあらためて問う。

科学と社会的不平等

一フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判一 S. ハーディング著 森永康子訳 四六上製・328頁・2940円 客観性、合理性、価値中立性、真理など科学の中心的概念から科学と権力の共謀関係を問う。現代社会と科学の関係を批判的に考察してきた科学哲学者、ハーディングの本邦初訳。

認知や行動に性差はあるのか

一科学的研究を批判的に読み解く一 P. J. カプラン・J. B. カプラン著 森永康子訳 四六・320頁・2625円 数学的能力、空間能力、言語能力、脳、セクシュアリティ、対人関係能力など、これまで性差の存在が強調されてきたテーマごとに、その研究の方法論や結果の解釈にさかのぼって批判的に考察する。

人間科学のための混合研究法

一質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン一 J. W. クレスウェル・V. L. ブラノ クラーク著 大谷順子訳 A5・328頁・3465円 研究プロセスの各段階において、質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し、各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

質的データの取り扱い

L. リチャーズ著 大谷順子・大杉卓三訳 A5・304頁・3360円 文字テキストなどの定性（質的）データの取扱説明書ともいうべき、質的研究手法のガイドブック。「はじめにデータありき」のスタンスで、研究を行うために必要な手順や、特定の研究手法に依存しないテクニックの詳細な説明を行う。

心理学マニュアル 観察法

中澤 潤・大野木裕明・南 博文編著 1365円

体験と経験のフィールドワーク

宮内 洋著 2310円

アジア映画をアジアの人々と愉しむ

山本登志哉・伊藤哲司編著 1680円

心理学マニュアル 面接法

保坂 亨・中澤 潤・大野木裕明編著 1575円

質的研究法による授業研究

平山満義編著 3360円

心理学者、裁判と出会う

大橋靖史・森 直久・他著 2625円

心理学におけるフィールド研究の現場

尾見康博・伊藤哲司編著 2940円

新 保育ライブラリ 保育実践のフィールド心理学

無藤 隆・倉持清美編著 1785円

狭山事件 虚偽自白【新版】

浜田寿美男著 2520円



はじめての 質的研究法

教育・学習編

質的研究をはじめて学ぶ人のために、第一線で活躍中の研究者たちがそれぞれの貴重な研究事例を紹介。事例を通して質的研究の「初歩の初歩」から「方法の解説」「手続きの紹介」そして「工夫のしかた」や「技法」、「注意点」といった「実践法」までを丁寧に教示してくれる。「教育・学習編」では、編者による概括的な第I部と、編者厳選の執筆陣による特徴的な研究を事例として多数紹介した第II部に分けて構成している。

秋田喜代美・能智正博 監修／秋田喜代美・藤江康彦 編
B5判変形／2940円

はじめての質的研究法

医療・看護編

秋田喜代美・能智正博 監修／高橋 都・会田薫子 編
B5判変形／2940円

はじめての質的研究法

臨床・社会編

秋田喜代美・能智正博 監修／能智正博・川野健治 編
B5判変形／2940円

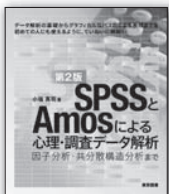
はじめての質的研究法

生涯発達編

秋田喜代美・能智正博 監修／遠藤利彦・坂上裕子 編
B5判変形／2940円

6月新刊 SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 第2版

因子分析・
共分散構造分析まで



データ解析は、いくつかの統計技法の「合わせ技」で論文やレポートの形になっていく、と語る著者が、基礎から因子分析・共分散構造分析までのひと通りをわかりやすく解説。SPSSやAmosの初心者が携えておきたい1冊。

小塩真司 著
B5判変形／2940円

研究事例で学ぶ SPSSとAmosによる心理・調査データ解析

小塩真司 著
B5判変形／2940円

実践形式で学ぶ SPSSとAmosによる心理・調査データ解析

小塩真司 著
B5判変形／2940円

(定価税込) 振替口座=00140-4-13803
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-19

東京図書

TEL 03(3288)9461 FAX 03(3288)9470
URL <http://www.tokyo-tosho.co.jp>

ナカニシヤ出版

<http://www.nakanishiya.co.jp/>

〒606-8161 *価格税込
京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
TEL:075-723-0111 FAX:075-723-0095

- 動きながら識る、
関わりながら考える**
心理学における質的研究の実践
伊藤哲司・能智正博・田中共子 編
フィールドでの心構えから「研究」としてまとめるステップまで。
2040円
- グラウンデッド・
セオリーの構築**
社会構成主義からの挑戦
シャーマズ 著／抱井 未田 監訳
社会構成主義版グラウンデッド・セオリーを
わかりやすく解説。
3045円
- ラディカル質的心理学**
アクションリサーチ入門
パーカー 著／ハツ塚 一郎 訳
アクションリサーチの理論と方法を鮮やかに
詳説。
2940円
- 人間科学研究法
ハンドブック** [第2版]
高橋順・渡辺文夫・大淵憲一 編著
人間科学全般にわたる実証研究の方法論と技
法を網羅。卒論・修論指導に必携。
2940円
- 質問紙デザインの技法**
鈴木淳子 著
自分の尋ねたい質問を並べるだけの質問紙か
ら卒業するには？ 質問紙法の計画・準備・技
法・倫理的配慮を体系的に解説。
2940円
- 事例に学ぶ心理学者
のための研究倫理** [第2版]
安藤寿康・安藤典明 編
研究デザインから論文発表まで、様々なケース
で問われる倫理事態を分析・対処する指針を示
し、自ら判断する力を培う。
2730円
- PAC分析研究
実践集2**
内藤哲雄・井上孝代 監・たけひこ・岸 太一 編
理論と技法をわかりやすく概説し、効果的な
利用法を具体的に示す。
2625円
- PAC分析
実施法入門** [改訂版]
「個」を科学する新技法への招待
内藤哲雄 著
人文・社会科学から工学・自然科学にまで適用
可能なイメージ構造の事例的分析。
1890円
- 内容分析の方法**
有馬明恵 著
理論をおさえたうえで内容分析の方法を、論
文作成までの実際のプロセスに沿って詳しく
解説する。
1675円
- 実践をふりかえるための
教育心理学**
教育心理にまつわる言説を疑う
大久保智生・牧 郁子 編
「正しい」とされていることに惑わされず現実
に向き合って実践するために。
2310円
- あなたへの
社会構成主義**
ガイゲン 著／東村知子 訳
平明な文章で幅広い内容を一般の読者へと語
りかけ、著者と対話の世界へと誘うロング
セラー！
3675円
- 社会構成主義の
理論と実践** 関係性をつくる
ガイゲン 著／永田・深尾 訳
社会変革のための人間科学を目指して、既存
諸科学の脱構築を標榜する社会構成主義アプ
ローチ。そのバイブルたる大著。
6090円

人生を物語る

生成のライフストーリー

やまだようこ編著 心理学、人類学、教育学、社会学など学問の壁を超え、最先端の「物語」アプローチで来し方と行く末を結び、ものの見方を創造的にひらく。3150円

異文化接触における

文化的アイデンティティのゆらぎ

浅井亜紀子著 多文化社会のなか、文化間移動をした個人はどのように文化的アイデンティティを作っていくのか。外国語指導助手を手がかりに読み解く。4410円

2007年度日本自分史学会賞（学術研究）受賞！

私たちの中にある物語

ロバート・アトキンソン著 塚田 守訳 ●人生のストーリーを書く意義と方法
ライフストーリーを書くことの意義と実際に書くための手順・ストーリーをより深く理解するための枠組みを示す。インタビューするための方法も解説。2940円

フィールドワークの技法と実際Ⅱ 分析・解釈編

箕浦康子編著 詳細な技法の紹介とともに新鮮なフィールドワークのまとめ方、ドクター論文書き上げまでの経過を、11人の研究者たちが物語る。2520円

フィールドワーク探求術

西川麦子著 問いの立て方から調査、報告までわかりやすく解説する。2310円

調査研究法ガイドブック

S・B・メリアム／E・L・シンブソン著 堀 薫夫監訳 教育における調査のデザインと実施報告 3675円

よくわかる質的社会調査

谷 富夫／菅田徹郎編著 調査の技法（データの収集）・分析の技法を平易に解説。2625円

よくわかる質的社会調査

谷 富夫／山本 努編著 問題設定からレポート作成までをわかりやすく解説。2625円

よくわかる異文化コミュニケーション

池田理知子編著 身近な他者との関係から考えることを提案するテキスト。2625円

よくわかるコミュニケーション学

板場良久／池田理知子編著 コミュニケーションを学ぶのに最適なテキスト。2625円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

TEL 075-581-0296

FAX 075-581-0589

www.minervashobo.co.jp/ *表示価格税込



もっと安全に、もっとおいしく!!
食文化の新時代を拓きます。



お問い合わせ TEL (082) 286-0181

広島名物駅弁、行楽弁当、会議弁当、仕出し料理、ケータリング等
安心安全をモットーに季節の味をご提案してまいります

広島駅弁当株式会社

〒732-0042 広島市東区矢賀5丁目1-2



楽しいディナーをアンデルセンキッチンビュッフェで。

広島アンデルセン2Fの“アンデルセンキッチンビュッフェ”は、5つのキッチンから
バラエティ豊かなメニューをオーダーを伺ってご用意いたします。

- 時 間／18:00～21:30(オーダーストップ21:00) ※土・日・祝は、17:00～21:30
- 場 所／広島アンデルセン2F アンデルセンキッチン
- 料 金／Aプラン：3,800円(ソフトドリンク) Bプラン：4,500円(アルコール、ソフトドリンク)
小学生：2,000円 4歳以上：800円 4歳未満：無料 ※表示価格は税込です。

お問い合わせ、ご予約は、

広島アンデルセン5F パーティご予約カウンター 電話(082)247-4800まで AM10:00～PM7:00まで受け付けております。

ホームページからご予約頂きますと、「朝のパン」プレゼント！

ANDERSEN
HIROSHIMA

広島アンデルセン 〒730-0035 広島市中区本通7-1 電話(082)247-2403(代) <http://www.andersen.co.jp/>



月寅
Tsuki
Tora
Shabushabu, Seiro Dining

素朴な味、
素材の味、
湯気の中に贅があり。



最大 32 名様までのご宴会可能 (本店)

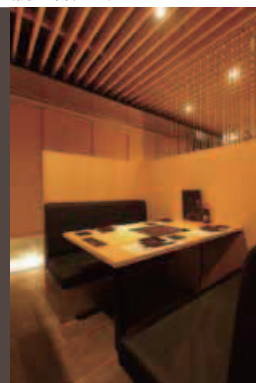
最大 30 名様までのご宴会可能 (紙屋町店)

ランチメニュー 850 円～ (紙屋町店のみ)

鐵

KUROGANE
Hiroshima Teppan Grill Dining

広島鉄板焼きダイニング



BOX席 4席×3



個室 1部屋

カウンター 5席

ごたつ席 全22席



GNS
GODA NEW SERVICE

合田産業株式会社

〒734-0004 広島市南区宇品神田 1-2-15
TEL 082-256-0033 FAX 082-254-7665
<http://www.goda-sangyo.co.jp>

月寅 -Tsuki Tora-

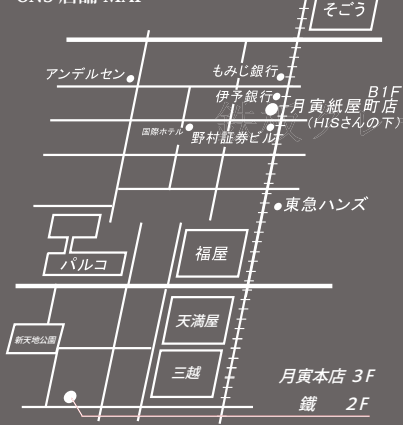
□本店 (流川)
広島市中区流川町 2-7 TOYO PEFUME 流川 3F
TEL 082-246-7789
17:30 ~ 3:00 / 日・祝 17:30 ~ 23:00
定休日: 第三日曜日

□紙屋町店
広島市中区紙屋町 1-1-1 東和ビル B1F
TEL 082-244-5440
11:30 ~ 14:30 / 17:00 ~ 23:00
定休日: 無休

鐵 -kurogane-
広島市中区流川町 2-7 TOYO PEFUME 流川 2F
TEL 082-246-5828
17:30 ~ 3:00 / 日・祝 17:30 ~ 23:00
定休日: 第三日曜日

<http://www.g-n-s.jp>

GNS 店舗 MAP



平成 23 年 11 月 25 ~ 27 日の間、日本質的心理学会第 8 回大会プログラムをご持参いただければ、1 ドリンクをサービスさせていただきます。

祝「日本質的心理学会」第8回大会

広島新銘菓

生もみじ



抹茶

広島新銘菓「生もみじ」の
抹茶が、こし餡、粒餡に続いて
新しく仲間入りしました。

好評いただいています「生もみじ」に
新しく抹茶が新登場しました。

お抹茶は、香りにこだわり、外の餅にも
内の餡にも高品質な抹茶(国産茶葉を
まぜ、風味豊かな生もみじ抹茶が完成し
ました。

新鮮なお餅と、美味しい地下水と、厳選
されたお抹茶でつくられた上品な味わい
を心ゆくまでお楽しみください。



■賞味期限／14日間

※こしあん、粒あん、抹茶の三種類あります。
お好みに合わせて自由にお詰め替えいたします。
お気軽にお申し付けください。



本店／広島市東区光町1丁目13-23 ☎262-3131(代)
<http://www.nisikido.co.jp> Eメール: info@nisikido.net
TEL ☎0120-979-161 (8:00~18:00) FAX ☎0120-963-161

